

西朋 30

安藤さん上遠野さん追悼 合併号

西朋登高会

2009年11月



西朋 30

安藤さん上遠野さん追悼合併号

西朋登高会

— 目 次 —

巻頭言	・・・・・・・・・2
山行総覧	・・・・・・・・・3
追悼：安藤英彌さん(1期)の思い出	・・・7
追悼：上遠野清さん(17期)の思い出	・・・11
山行記録	
2007年度	・・・29
2008年度	・・・65
追録	・・・・・・・・126
西高WV部記録	・・・127
西朋登高会会則	・・・・・・・・129



飯豊連峰 二ノ峰より門内岳・北俣岳

巻頭言

昨年につづいて「西朋」30号を発行いたします。この号には2007年4月から2008年3月の2年間の記録が収められています。山行の参加人数こそ多いとはいえませんが、20歳代から60歳以上の会員まで、幅広い世代がバリエーションを含むいろいろな山行をおこなっています。特に、学生会員の参加が増えてきたことは明るい希望です。バリエーションについては「いち」からのスタートである事を考えると、なおさら喜ぶべき状況です。

また、田中さん(11期)のご尽力で多くの先輩諸氏に会に復帰していただいたことも、嬉しい事です。高校のOB会という性格上、会員が増えるというのは大変稀な事です。

一方、大変残念な事もありました。昨年3月に上遠野さん(17期)が宝台樹の山小屋での落雪事故で、また9月には安藤さん(1期)がご病気でお亡くなりになりました。

この号は、お二人の追悼号ともなってしまうました。

西朋創設時から顧問的な存在であった安藤さんは、数年前まで年に何度も富士山に登られていたそうですが、一昨年暮れに動脈瘤の手術をされ、リハビリ中であった昨年9月に持病の糖尿病が悪化し、奥様のお話ではお医者さんも予想できないほど急に容態が変わられてお亡くなりになりました。

私にとっては高校時代からずっと憧れの先輩であり、岩登りの初めての師匠であった上遠野さんの、あまりにも早い突然のご逝去はいまだに信じられない思いです。

奇しくも、お二人とも航空関係のお仕事で、プライベートでも飛行機が大好きだった方々でした。たまたま昨年、ボーイング社の工場を見学する機会がありました。上遠野さんが長年操縦されたジャンボ機と、これからの空を風靡するであろう新型のB787の製造ラインを一度に見ることができました。安藤さんが航空雑誌に記事を書かれた国産ジェット機もまもなく実現するでしょう。時代の最先端を走りつづけ、山よりも、空よりも高いところへ飛んでいかれたお二人のご冥福を、謹んでお祈りいたします。

なお、今年4月の西朋総会で会長を28期の松本君に引継いでいただく事になりました。50歳を超えていまだにバリバリの現役です。最後に、皆様のおかげで5年間、無事に会長を勤めさせていただいた事をお礼申し上げますとともに、松本新会長へのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

前会長 遠藤 彰

2007 年度（平成 19 年度） 山行総覧 その 1

No.	日程	山行名	参加者
0701	4/6	箱根：矢倉岳	橋本，他
0702	4/7	北アルプス/ST：楯池～風吹～北小谷	尾崎
0703	4/8	身延：七面山	橋本
0704	4/10	高尾：高尾山・城山	林，橋本
0705	5/3-4	八ヶ岳【春山合宿】：美濃戸口～横岳～赤岳	中村，遠藤，島田，小澤
0706	5/3-5	北アルプス/ST【春山合宿】：馬場島～毛勝山・猫又山南東ルンゼ・赤谷山	青谷，上野午，尾崎
0707	5/12	奥武蔵/RCT：日和田山	山野，尾崎，島田，小澤
0708	5/27	奥多摩/WC：丹波川火打石谷	松本，尾崎
0709	6/2	北アルプス/ST：八方尾根～唐松岳・唐松沢偵察	尾崎
0710	6/23-24	上州/WC：武尊沢～上州武尊山	中村，松本，尾崎，島田
0711	7/15	桂秋：九鬼山周辺	尾崎
0712	7/20	奥秩父：北奥千丈岳，金峰山	橋本
0713	7/22	八ヶ岳：西岳・編笠山	尾崎
0714	7/25	八ヶ岳：権現岳・編笠山	橋本
0715	8/1	須走口～富士山	橋本
0716	8/4-5	八ヶ岳/WC：赤岳沢～立場川～阿弥陀南稜P3ルンゼ	松本，尾崎
0717	8/5	丹沢/WC：勘七ノ沢	中村，他
0718	8/7-8	南アルプス：塩川～塩見岳	橋本
0719	8/10	中央アルプス：木曾駒高原～木曾駒ヶ岳	橋本
0720	8/11	北アルプス：御嶽山	橋本
0721	8/12-14	裏岩手/WC【夏山合宿】：葛根田川北ノ又沢～大深沢東ノ又沢	加藤，尾崎，島田，中山
0722	8/18-19	八ヶ岳：小淵沢～西岳・権現岳・編笠山	山野，他26
0723	8/25-26	北八ヶ岳【西朋祭】：佐藤先生別荘	多数
0724	8/26	北八ヶ岳/WC：根石岳白薙沢	青谷，松本
0725	8/27	北八ヶ岳：蓼科山	橋本
0726	9/7	北アルプス：黒部平～雄山・大汝山	尾崎，中山
0727	9/22-24	北アルプス/VR：北鎌尾根	尾崎，他1
0728	10/7-8	北アルプス/VR：奥穂高岳南稜	尾崎
0729	10/12	須走口～富士山	橋本
0730	10/21	高尾/TR：高尾山～明王峠	尾崎
0731	10/30-31	頸城：梶山～茂倉尾根～金山・天狗原山～小谷温泉	尾崎
0732	11/23-25	中央アルプス：池山尾根～空木岳～檜尾岳	松本，尾崎

VR:バリエーションルート，WC:沢登り，ST:山スキー，IC:アイスクライミング，TR:トレイルランニング
FC(T):フリークライミング（トレーニング），RC(T):ロッククライミング（トレーニング）

2007 年度（平成 19 年度） 山行総覧 その 2

No.	日程	山行名	参加者
0733	12/16	上越：湯倉山湯檜曾尾根（仮称）	尾崎
0734	12/18	奥秩父：雁坂峠	橋本
0735	12/24	南大菩薩：初狩～鞍吾山～大月	中村
0736	12/29-31	上越：宝台樹スキー場	上遠野, 山野
0737	12/29-31	北アルプス/VR：餓鬼岳釣魚尾根（敗退）	松本, 尾崎
0738	1/5	北アルプス/ST：柵池～西柵コース～岩茸山	尾崎
0739	1/20	桂秋/VR：鶴島御前山東南東稜・北稜・柵穴御前山	中村, 青谷, 尾崎
0740	2/10-11	上州武尊山/VR：鹿俣山～獅子ヶ鼻山～武尊山	松本, 岡田, 尾崎
0741	3/8	北アルプス/ST：白馬乗鞍岳	尾崎, 他2
0742	3/8	丹沢：檜洞丸	橋本
0743	3/22	北アルプス/ST：柵池～風吹～紙すき山～北小谷	尾崎, 他2
0744	3/23	奥多摩：雲取山	橋本
0745	3/27	身延：七面山	橋本

VR:バリエーションルート, WC:沢登り, ST:山スキー, IC:アイスクライミング, TR:トレイルランニング
 FC(T):フリークライミング(トレーニング), RC(T):ロッククライミング(トレーニング)

2008 年度（平成 20 年度）山行総覧 その 1

No.	日程	山行名	参加者	緊急連絡先
0801	4/5	北アルプス/ST：栂池～風吹～紙すき山～北小谷	尾崎，他2	
0802	4/12	奥武蔵/RCT：日和田山	小川，山野，中村，松本，尾崎，島田	
0803	4/16	南アルプス前衛：日向山	橋本	
0804	4/26-5/1	増毛山地/ST：雄冬山～浜益山～群別岳～暑寒別岳	岡田，他1	
0805	5/2-4	飯豊/VR【春山合宿1】：二王子岳～赤津山～門内岳	上野午，尾崎	上野利
0806	5/3-5	南アルプス【春山合宿2】：北沢峠～仙丈岳	小川，中村，山野	上野利
0807	5/4	奥秩父：瑞牆山荘～金峰山	橋本	
0808	5/19	丹沢：箒沢～檜洞丸	橋本，他	
0809	5/22	箱根：早雲山～箱根神山	橋本，他	
0810	6/1	丹沢/WC：神ノ川伊勢沢	松本，尾崎	上野利
0811	6/13-14	北アルプス：爺ヶ岳南尾根～鹿島槍ヶ岳	尾崎	
0812	6/14	南大菩薩/WC：滝子沢	中村，渡辺	
0813	6/16	安倍奥：大谷崩れ～山伏	橋本	
0814	7/12-13	南八ヶ岳：赤岳～横岳～硫黄岳	山田，他	
0815	7/13	奥秩父：大弛峠～北奥千丈岳・金峰山	橋本	
0816	7/19-21	加賀：砂防新道～白山～別当出合	山野，他16	
0817	7/20	北八ヶ岳/WC：鳴岩川河原木場沢	尾崎	
0818	7/20	南アルプス：青木鉱泉～鳳凰三山	橋本	
0819	7/23	丹沢：寄沢～雨山	黒澤，橋本	
0820	7/25-26	中ア/WC：伊奈川本谷～三ノ沢岳～滑川二ノ沢下降	尾崎	島田
0821	8/2	北八ヶ岳：蓼科山	島田，他2	
0822	8/5-6	南アルプス：鳥倉林道～塩見岳・蝙蝠岳	橋本	
0823	8/8	北アルプス：西穂高口～西穂高岳	橋本	
0824	8/8	奥多摩/WC：熊倉沢右俣	青谷，島田，小澤，蒔苗，他1	尾崎
0825	8/10	中央アルプス：池山尾根～空木岳	橋本	
0826	8/10-14	神室連峰/WC【夏山合宿1】：土内川銀次郎沢～神室山 ～根ノ先沢左俣右沢～小又山～西ノ又川赤岩沢	山野，松本，岡田，上野，尾崎， 灘吉，島田，小澤，蒔苗	小川
0827	8/14-16	上越/WC【夏山合宿2】：宝川ナルミズ沢	中村，渡辺，青谷	遠藤
0828	8/15-17	裏岩手：松川温泉～秋田駒ヶ岳	岡田	
0829	8/23	奥多摩：鋸尾根	松田，黒澤，田中	
0830	8/23-24	奥多摩【西朋祭】：氷川キャンプ場（救急法講習）	黒澤，田中，松田，三浦，山野，中村，渡辺， 遠藤，青谷，松本，吉田浩，上野午，尾崎，島田	
0831	9/1	北八ヶ岳：麦草峠～縞枯山	橋本，他	
（裏面へ続く）				
VR：バリエーションルート，WC：沢登り，ST：山スキー，IC：アイスクライミング，TR：トレイルランニング FC(T)：フリークライミング（トレーニング），RC(T)：ロッククライミング（トレーニング）				

2008年度(平成20年度)山行総覧 その2

No.	日程	山行名	参加者	緊急連絡先
0832	9/13-14	上越/WC: 巻機山 割引沢 米子沢	中村, 渡辺, 吉田, 尾崎	松本
0833	9/21-23	朝日連峰: 長井葉山~大朝日岳	尾崎	
0834	9/28	富士山: 吉田口~剣ヶ峰	小川	
0835	10/2	富士山: 須走り口~剣ヶ峰	橋本	
0836	10/11-14	丁山地 他: 甑山, 甑岳, 黒伏山, 丁岳, 翁山	岡田	
0837	10/12-13	北アルプス: 餓鬼岳・唐沢岳	尾崎	
0838	10/12	中央沿線: 中尾根の頭~笹子峠~笹子雁ヶ腹摺山	中村	
0839	10/12	南大菩薩: 大谷ヶ丸	青谷, 他1	
0840	10/31	箱根: 地蔵堂~金時山	橋本, 他	
0841	11/1-3	足尾山塊/WC・VR: 柳沢川右俣~錫ヶ岳 ~宿堂坊山~国境平	中村, 松本, 岡田, 尾崎, 他1	島田
0842	11/6	奥秩父: 西沢溪谷~甲武信岳	橋本	
0843	11/23	裏高尾: 北高尾山稜	尾崎	
0844	12/14	上越: カドナミ尾根~荒沢山	山野, 尾崎, 中山	松本
0845	12/21-1/10	南米: アコンカグア(~6500m)	小川	山野
0846	12/27-31	南アルプス/VR【冬山合宿】: 聖岳東尾根~上河内岳	松本, 尾崎	上野午
0847	1/2	丹沢: 塔ノ岳~丹沢山	橋本	
0848	1/7	道志: 御正体山	橋本	
0849	1/11	奥武蔵/RCT: 日和田山	松本, 尾崎	
0850	1/27	丹沢: 簪沢~檜洞丸	橋本	
0851	2/7-8	那須/VR: 朝日岳東南稜敗退(遭難救助)	山野, 松本, 尾崎	島田
0852	2/10	安倍奥: 七面山	橋本	
0853	2/16	奥多摩: 鴨沢~雲取山	橋本	
0854	3/7-8	八ヶ岳: 西岳, 権現岳, 編笠山	尾崎, 中山, 他1名	山野
0855	3/7-8	鬼首/ST: 須金岳・大鍋山	岡田, 他1	
0856	3/10	天子山塊: 朝霧高原~毛無山	橋本	
0857	3/15	信越/ST: 湯の丸山~角間峠	青谷, 他1	
0858	3/21-22	堂津山塊: 南西尾根~堂津岳~奉納山	上野午, 尾崎	山野
0859	3/23	奥秩父: 瑞牆山荘~金峰山	橋本	
0860	3/28-30	知床/ST: 遠音別岳・海別岳・藻琴山	岡田, 他1	

VR:パリエーションルート, WC:沢登り, ST:山スキー, IC:アイスクライミング, TR:トレイルランニング

FC(T):フリークライミング(トレーニング), RC(T):ロッククライミング(トレーニング)

安藤英彌さん（1期）の思い出

安藤英彌さん 略歴

安藤さんは1943年（昭和18年）4月に当時の東京府立十中に6期生として入学された。第2次世界大戦後の1946年（昭和21年）に山岳部ができた時に初代のリーダーをされた。1947年3月に都立十中第6期生として旧制中学を卒業されそのまま新制の都立第10新制高等学校へ進まれた。1949年3月に都立第10新制高等学校第1期生として卒業された。1950年（昭和25年）早稲田大学第1理工学部機械工学科に入学され、山岳部に入部された。早稲田大学の山岳部では相当登られたようである。3年後には西高4期の田中将利さん平沢勇さんも早稲田大学の山岳部で一緒になられた。



西朋登高会以前の西高山岳部OB会NAC（1951年10月設立）の代表をされた。1953年4月に西朋登高会ができたが西朋登高会としての山行はあまりなかったようである。

1953年（昭和28年）早大卒業後富士工業（現在の富士重工業）に入社。国産のジェット輸送機T-1の開発作業に参加、C-Xとエアロスバルの基本計画主務者、KM連絡機の開発主務者などの航空機関係を歴任。その間、米ワシントン大学において航空工学の修士課程修了。1982年（昭和57年）退社。以後、文筆活動。デルタ出版社社長としてミリタリーエアクラフト、グランドパワー等の雑誌を出されていた。

はがき等によると晩年も2006年くらいまでは年間50回位富士山やその周辺の山に登られていた。

2008年（平成20年）9月5日にご逝去されました。戒名は「航天院秋露英岳居士」と故安藤さんの天職の航空機関係と山と、昨年秋9月に亡くなられたので秋露と名前一字の英を組み合わせられたものでした。

【2006年度西朋総会の返信はがきより】

近況報告：

今回は、登山の約束があるので欠席させていただきます。現在は、富士山に凝って、周辺の山や登山道、富士山本体の未知のルートに登っています。

以前は、奥多摩に凝っていましたが、今でも、年に50日位は山に行き、標高差千メートル位の登山をするのが標準になっています。皆々様も元気で登山を続けてください。

=====

安藤英彌さんのこと 6期 林 武志

安藤さんの名前は、高校生の時からよく聞かされていた。初めてお会いしたのは、多分高校2年生の時（1952年）の秋だと思う。山岳部がアルピニズム派とハイキング派に分裂した時だ。OBの会合に呼び出され、事情説明をした。OBに囲まれて緊張していたので個々の人は記憶にない。安藤さんを含めて、OBは「大人の集団」という印象しかない。安藤さんは、田中将利さんから常々大先輩としての話を聞いていたので、「雲の上の人」という印象だけは在った。

今でもはっきり記憶に残っているのは、1956年夏、丸の内の安藤さんの事務所を訪問し、昼食をご馳走になり、その後キャッチボールをした。何故キャッチボールだったかは分からない。事務所では、航空機の雑誌や沢山の資料を見せてもらった。

山行を一緒にしたのは、2回だけだった。1回目は、高校山岳部の夏山合宿で剣へ行った時だ。我々が上野駅のプラットホームで並んでいるところへ来て「俺はあっちから乗るから。」といって寝台車へ向かった。それは当たり前ことと了解されて、誰も違和感はなかった。（矢張り雲の上の人だった。）テントは一人で使用していたかもしれないが、定かでない。ただ、雨で夕飯が出来なくて待たされている時「これも結構うまいぞ！」と昆布の佃煮を摘んでいた姿が記憶に残っている。（安藤さんも普通の人間だなあと。）

2回目は、1956年11月富士山に登った。4期の長崎さんと3人だった。佐藤小屋を早朝歩き始めた時は快晴で、登山日和と思っていた。森林限界を過ぎて雪面を登るとアイゼンの爪が利いて快調だった。しかし、7合目辺りから山頂からの風が強くなり、時々風圧に耐えなければならなくなった。次第にアイゼンの爪も利かなくなってきた。「スリップしたら、おさらばだぞ！」と安藤さんに気合を入れられた。危険を感じたので8合目で断念することにした。富士山の怖さを体験できた山行だった。

その後、安藤さんとの接触は途絶えてしまった。最近、西朋の総会で何回かお目に掛かった。二次会でのお話で、最近も山歩きは続けているとの事で感服したものだだった。

田中将利さん追悼文の依頼をした時に電話でお話したのが最後だった。その追悼文は古い漢字や旧仮名遣いが出てきて、（自分の子供の頃を思い出して）懐かしかった。元気に富士山近辺の山を丹念に歩いているとの事だった。

訃報を聞いて、驚きと信じられない気持ちだった。お陰さまで、西高山岳部は、ワンダーフォーゲル部に名前が変わっても継続しています。何時までも見守って下さい。

安藤さんの思い出 6期 飯塚 康史

安藤さんとの数少ない思い出は50年程昔の話なので、記憶も曖昧になっています。しかし、その部分々々の内容では、今でもはっきり覚えている所があります。

その1

1956年8月、私は4期の笹田さん、11期の澤野徹君の父君と上高地に入った。(8期の高橋邦夫君も一緒だったかも知れない) 翌朝、我々は横尾のキャンプを出て涸沢に向かった、メンバーは4期笹田、6期飯塚、6期亀山(現桑田)、8期高橋、それと1期の安藤先輩であった。天候は快晴、私にとって初めてだった穂高の山々、涸沢の雪渓、カールのスケール、等々その美しさは驚きであった。そこで当日、我々は安藤さんの指導の下で雪上訓練を行った。キックステップによる雪渓登坂、グリセードでの雪渓下降、雪渓上の滑落停止、安藤さんは「自分で止まないとピッケルでブツ刺すぞ」と言って20メートル程下で構えていた。下で構えている人を20メートル位の間隔で、二重に構えさせる等。十分に安全に配慮し、今でも大変良い指導を受けたと感謝している。ベルトの回りから入った雪で、濡れたズボンが気にならない程の暖かい良い天気であった。合宿中の西高生、塩出君(11)が槍肩の小屋で亡くなったのは、この翌日であったと記憶している。

その2

1975年1月、西朋登高会の公式山行として爺岳に東稜から向かった。この山行は、五竜、鹿島槍から来る縦走隊(メンバーは町田、林、福田、関谷の4名)のサポート隊として向かったのだが道中、豪雪と悪天候で大変苦勞した。このメンバーに安藤、田中(将利)、笹田。小田が居た。最初は40キロ程の荷物を下ろし腰位ある積雪の中をラッセルしていたが途中から荷重の大きい私は雪道を崩さない為に免除、皆の後ろから付いて行った。しかし、私の後には安藤さんが居た。安藤さんは一人空身で殆ど何も入っていないキスリングを背負っていた。皆が汗だくでしんみり登っている間、安藤さんは、1人カメラを構えたり、色々話をされたりしていた。後日、「背中が寒いから空のキスリングを背負っていた」と云う話を聞いて、田中(将利)さんが笑い話にしていた。

その3

1960年頃のある日、「安藤さんが留学されるから壮行会に来い」と云う話が入った。話の出所は田中(将利)さんからだと思うが、笹田(4期)か林(6期)君を經由して私の所に来た。場所は学士会館だったと思うが、今では珍しくもない立食パーティ(と言ってもビールとサンドイッチ程度の簡単なもの)に私は初めて参加した。会場には早稲田のOBと思われる人達など20人位が部屋のあちこちで談笑していた。「飛行機的设计を勉強しに行く」と云う安藤さんの陰で、「本当の飛ぶ飛行機が出来るのかねえ」などと囁きが聞こえていたのと安藤さんにビールを注いでもらっ

た事か、何故か頭に残っている。安藤さんは翌日、横浜港を最後の航海となる氷川丸でアメリカに向かったと記憶している。安藤さんの渡米に刺激を受けた訳ではないと思うが、後日、1968年に、私も渡米する機会を得たが、当時はホノルル経由で、大陸迄の直行便はなかったと思う。(1971年には羽田からサンフランシスコへの直行便が就航していた)

以上、安藤さんとはそんなに親しい関係でもなかったのに、との時々の良い時間を過ごせた事に、非常に嬉しく、感謝している。多分、今は田中将利さんと尽きぬ山や西朋の話に花を咲かせている事と思う。ご冥福を祈る次第です。

上遠野清さん (17期) の思い出

上遠野清さん 略歴

上遠野さんは 1962 年（昭和 37 年）4 月に西高 17 期生として入学された。西高時代は丹沢、奥秩父、北アルプスなどの山行に参加したが、高校 2 年の 7 月に退部されている。しかし、1965 年に慶応大学に入学すると西朋に復帰し、夏は剣八ッ峰、穂高滝谷、北岳バットレスなどの岩場を精力的に登攀し、冬は越後、谷川、北アルプスなど多くの厳しい登山で西朋の牽引役を果たされた。特に大学 2 年の冬春の谷川岳国境稜線、大学 3 年の夏の北鎌尾根から末端からの滝谷登攀、グレボンの第 2 登、春の横尾尾根から槍ヶ岳など大きな山行を引っ張っていかれた。岩登りも上手かった。

1974 年（昭和 49 年）からは西朋のチーフリーダー、1980 年（昭和 55 年）から 1981 年は西朋の会長を務められた。1985 年 1 月に、甲斐駒ヶ岳戸台川双児沢で滑落事故があった際には救助隊の第二陣として尽力されたことも、西朋の歴史の 1 ページを作られた方として欠かせない。

職業は全日空の機長であり、その手腕には定評があったそうだ。水上・宝台樹に全日空のパイロット仲間で作られ、西高生のスキー合宿には 2000 年から毎年年末に、西朋でも周辺の山スキーやゲレンデスキーにたびたび使わせてもらった。もちろんスキーも上手だった。



1967 年 12 月、白馬（右端が上遠野氏）



1968 年 3 月、横尾尾根から槍ヶ岳
山頂の展望盤に立つ



当機、機長は上遠野

上遠野さんは、2008年3月9日(日)、その宝台樹の山小屋で、屋根の雪下ろし中に落ちてきた雪につぶされて、亡くなった。この記録集本文にも載っているように、直前にも西朋のスキーで山小屋を使わせてもらったばかりだった。これからもスキーなどで指導してもらえる方だった。あまりにも突然の事故死であり、享年61歳、その事故のありようは上遠野さんの性格とはあまりに裏腹で、運命というにはあまりに悲運だといか言いようのないものだった。ご冥福を、お祈りいたします。



1965年夏、剣岳八ツ峰



ホームグラウンドの宝台樹 定番のスキースタイル
(2005年ごろ)



パイロットとしての上遠野さんの姿

=====
上遠野君のこと 6期 林 武志

上遠野君とは、山行を共にしたことはない。しかし、個性的なので、かなり長い付き合いをしている印象がある。

古い記憶は、西朋の総会（？）が西高の多目的ホール（？）で開催された時、舞台上上がってギター演奏をしていた。決して上手とはいえなかったが、「面白い男だな。」という印象が残った。（その後ギターの話は聞いたことがない。）

彼とスキーを共にしたのが、数年前の目沢山荘だった。「林さんにスキーを教えたい。」と何回か言われていたのが実現したのだ。未だ現役であったので、小生の日程に合わせて、忙しい時間を割いて目沢山荘へ来てくれた。その日の朝、ニューヨークから帰ってきて直行して来た。その日はゆっくり眠って、翌日指導となった。

小生のスキー技術は、自己流で、ギャップのないゲレンデなら滑れる程度だ。早速カービングスキーの使い方からはじめ、ギャップの滑り方、ウエーデルンと詰め込む。午前中の半日だけだったが、丁寧に付き合ってくれた。あきれた生徒なのに、矢張り「先輩」ということが意識されていたのだと思う。否定的な言葉は全くなく、生徒としては気持ちよく指導を受けることが出来た。

そんなに急いで天国へ行く用事があったのですか。やっと時間が取れるようになったので、もう一度、上遠野君のスキーレッスンを受けたかったのに、残念です。みんなのスキー技術を天国から見てください。

上遠野のこと 12期 川田 秀明

彼の死後、彼との共通の仲間との集いの最中に、ふと彼の姿を探している瞬間が多々あり、そんな経験が初めてで自分でもおどろいています。

しかし今考えると彼とは年の差もあって（五歳）そんなに数多くあっていただけではなく意外な感じがします。山は一、二度、スキーには二、三度程度しか一緒にいったことがありません。数少ない山行に滝谷ローソク岩登攀があります。空冷式パブリカで出掛け上高地から歩いたと思います。途中徳沢から横尾の間で手製で木でできたクサビを拾いました。厚い方が二センチぐらいでナイロンの輪が付いていました。取り付いてその岩のもろさに前から分かっていたのですが、想像以上で閉口しました。ハーケンがほとんどつかえずだましまし登っていましたが、ゆるいオーバーハングの場所に着きました。もうなんの手掛りもなかったのですが、普段は見すごした大きなわれ目に拾ってきたクサビがガッチリききました。おそらくそのクサビがなかったら成功

はなかったでしょう。

数ヶ月前に出版された山の雑誌に初登攀の記事が載りおそらく第二登を目指していったと思います。わざわざ滝谷まで出掛けたのに他のルートに登った記憶もなく涸沢に宿泊したかどうかも定かではありません。ただ帰りに諏訪湖で釣りをやり、大月にある中央道から右手に見える、気になっていた岩壁を登って帰京したことは覚えております。岩殿山と聞いたと思うその岩壁も砂岩で出来ていてボロボロで予定していたルートは取れず側壁を登ったと思います。ローソク岩にしろ岩殿山にしろ、こんなボロボロの登攀を行った西朋の方は僕等以前にも以後にもいないと思う。

このように彼との行動は突発的で、その場かぎりで、なにか奇妙な印象があります。ぼけがはげしい今では彼と過ごした日々の詳細な姿は思い出せません。

こういう形の事故に合う事は彼が一番嫌ったことでした。しかし病床に横たわる彼の姿も想像出来ません。

こう書くと残されたご家族の方々には申しわけないのですが、上遠野は人より密度濃く、速度速く人生を駆けぬけたのでしょう。

北岳バットレスで見せられた写真 12期 小川 建吾

たしか 1966 年の 1 月頃のことではなかったかと思います。13 期の野原光君が興奮して真っ赤な顔をしながら飛び込んできました。「とんでもない新人が西朋に入ってきましたよ！ なにしろ入山から下山まで一人でしゃべりまくっているの、うるさくてしょうがないのです。ついに耐え切れず『うるさい、黙れ！』とどなってしまいました。」

冬の魚沼三山の合宿を終わっての報告でした。そのとんでもない新人が上遠野清君でした。これが私がカトオノの名前を知った最初でした。その後わたしも彼と山行を数々ともにしました。なかでも剣の真砂沢での合宿、あるいは穂高岳滝谷など思い出多いものでした。とにかく朝から夜までモーターが回りっぱなしの男でした。行動の機敏さには目を見張り、目のよさは伝説的でした。

その上遠野君と二人で北岳バットレスにでかけたことがありました。1970 年 9 月の週末と記憶しています。あいにくどこを登ったのか忘れてしまいましたが、当時余り馴染んでいなかったボルトに馴れるのも目的でした。1 ピッチづつ交代で登りました。上遠野君が先頭をやると思欲的で、わざわざルートをはずれいろいろチャレンジをするのです。クラックが明瞭についているので、そこを登れば順調に高度が稼げるのですが、彼はわざわざ左のフェースにルートを求めます。そしてとうとうジャンピングの登場です。得意げに打ちこみ、ボルトをセット、見事にフェースを登りきってしまいました。私が追いつくと「このフェースを上りきるにはあのボルトは絶対に必要。ということはこのルートは我々が初登攀ですよ」と得意気だった。

そしてクライミングも山場を乗り越え、先が見えた頃テラスで一休みしたときです。

「小川さん、見る？」「？」 怪訝な私に彼が胸のポケットから取り出したものがあります。写真でした。まさか彼が写真を胸に登っていたとは思いませんでした。女性の、しかもとびきり美人の写真でした。説明を求めると「彼女です。いいでしょう」

まぎれもなく後の上遠野夫人、まり子さんの写真でした。詳細は省略しますが彼は交際状況を語ってくれました。「もう決まりです」とも付け加えたように記憶します。正直のところ、後輩に先を行かれた先輩としては、心中穏やかならざるものがありました。彼も私の心の動揺を感じ取ったか「この先は僕がトップで登りますから」と言ってくれました。軽やかに高度を上げていく姿を下から頼もしく、というか羨ましく見守ったものでした。

その後まり子さんから、彼が送った恋文「あなたのもとを3歩離れると、私の孤独がはじまる」の話をお聞きしました。バットレスで見せられた写真は、その恋文の直後だったのではと想像しています。

ご存知のとおり彼の人生は、その後さらに高度を上げパイロットして空を飛び回り、そのまま天国まで逝ってしまいました。彼の死は本当に信じられません。たとえこの地球が滅びようとも最後に一人残る人間がいたとしたら、間違いなく彼だと誰もが信じていたと思います。バットレスでのボルトのように我々に数々の思い出を埋め込み、風のように去ってしまった男の冥福を祈ります。

上遠野清君 15期 平木 桂太

上遠野君が西高ワンダーフォーゲル部に入って来たときは、まだ普通の15歳の少年でした。という意味は、中学時代に目沢さんの薫陶を受けていたにしても、身体が大きいわけでもなく、所謂運動部タイプのがっちりした体つきではありませんでした。WV部は山岳部から移行させられてからまだ日が浅く、バンカラ的風情を残していましたが、目の大きな坊やがこの部でもつのかな、という印象でした。親御さんは入部にあまり賛成ではなかったようでしたが、こちらは1年生がほしかったので、引っ張り込んだ記憶があります。高校時代は一緒に登る機会が少なかったのですが、私が浪人した関係で、西朋登高会に入ってからかなりの山行をともにしました。先ずびっくりしたのは、私が浪人している間に彼の体格がすっかり変わっていたことです。同期の方々はその辺りのことをご存知なのでしょうが、きっと色々なトレーニングを積んだのでしょう。勿論山登りそのものが彼のからだを作っていたということもあるかも知れません。ガニ股の低重心という山登りには理想的(?)な体型に加え、上半身も逞しくなっていました。大学時代の活躍ぶりは、一緒に登った前後同期の会員諸氏も、見守って下さった先輩方もおわかりのことです。

彼の山歴は「西朋」誌の記録が語ってくれるところですが、学生時代は会の殆ど全ての山行に

参加していたのではないのでしょうか。当時の公式山行は夏秋冬春と、それぞれにかなり長期にわたり、学生会員はおおむねどの山行にも参加しましたが、一部、特に理科系の学生は実験など学業の都合で途中で山を下りたり、中ほどから合流したりで、可能な限り参加するようにしていました。そのような状況下で、彼の場合は終始参加し、それだけでなくそれらの長期の合宿の合間にも、数人で短期の岩登り山行を企画し、今日は北に明日は南にと、1年の内にかなりの日数入山していました。更にスキーにも情熱を傾けていましたから、忙しかったでしょう。その頃は私の部屋が天幕などの器具置場でしたから、山から帰ると、苦労したことは忘れてすぐに集まって、次ぎの計画を立てていました。そのような集まりは、拙宅だけでなく彼の家や秋山君、三浦等君のところにもお邪魔してよくやっていました。また、彼は車にも関心があって、パブリカでしたか、仲間と共同所有していじくりまわしていたことを憶えています。従って、学生時代は女性と交際する時間は無かったと思うのですが、その代わり就職後は抜き無く、転職するにあたって奥様候補だけはしっかり前の職場で確保していたのはご存知の通りです。

山における彼にまつわるエピソードは数限りなくあるのですが、それは他の方の原稿に譲るとして、彼の死は非常に残念です。よく山で死んだら本望と言いますが、決してそんなことはなく、仮にそうだったとしても、今回の逝き方は彼にとっても不本意であったのではないかと思います。まだまだ各方面で活躍出来たのに、という思いが離れません。

上遠野 思い出 17期 秋山 泰夫

昭和37年(1962年)4月、ワングル部に入部した同期の新入部員の中に、目玉をギョロつかせて自分の中学時代の登山暦を自慢げにひけらかす奴がいた。それが上遠野だった。「何だこいつは。」と思った。

同じ年の11月下旬、個人山行でしょぼふる氷雨の中を上遠野、梅原、私の3人で鷹巣山に登った。ぐしょ濡れになって巳の戸の避難小屋にたどり着き昼飯となった。昼飯は各人がおかずを持ち寄ることになっていて、私はすき焼き風に煮込んだ牛肉を持参した。上遠野が持ってきたのはヤマゴボウの味噌漬のシッポだった。

西朋3年目の8月、上遠野と前穂東壁の右岩稜に登った。右岩稜の広大な垂壁に取り付くと、足の真下に徳沢園が見え素晴らしい高度感だった。垂壁の最上部にはハングがせり出していて、その突破が右岩稜登攀のポイントだった。じゃんけんで勝った上遠野がそのピッチを取り、短い足を巧みに駆使してハングを越えた。登攀を終了して前穂の頂上で吸ったピースの味は忘れられない。生涯最良の山の日であった。

高校生の頃から、山行中、上遠野は良く見付け、良く拾った。大きな目玉は伊達ではなかった。

昭和48年、その夏の一番暑い日に冷房のない飯倉の教会で上遠野とまりちゃんは結婚式を挙げた。司会は私がやった。トチるといけないので万全の準備をしたから、30年以上たった今でも

何を言ったか大体覚えている。

私にとって、昭和53年頃からの幾年かは受けても受けても司法試験に受からないという時代だった。本人は意気軒昂のつもりだったが、上遠野からはよほどショボクれて見えたらしく、何かにつけて自宅の晩飯に誘ってくれ一時は食客状態だった。

振り返れば、思い出はいくらでも湧いてきて尽きない。残っている色々な借りは、とうとう返せない。

追悼 17期 三浦 等

初めて部室で会った時、「落ち着かない、うるさい奴だ」と思った。そんなだったから、よく衝突した。殴りあいになった事もよくあった。後年パイロットの身体検査で「鼓膜に破れた跡があると」言われた。お前のせいだ。」とこぼされた事もあった。50年近く付合ってきたから、色々な思い出がある。岩登りもスキーも抜群にうまかったが、世の中にはそんな奴はいくらでもいる。上遠野の真骨頂は、調達力と活用力だったと思う。何年か下に、ちょっと似た男がいて本人も上遠野二世を目指していた様だったが、彼が持って来る物はガラクタばかり。上遠野は、時に上物を拾ってきた。サングラスは握り飯に始まり、車・ヨットと数えあげればきりが無い。

存在感が非常に強い男だったから、居ればうるさいのは判っているのに必ず、「上遠野は？」という声が出た。特に飲み会ではそうだった。もっとも飲み会の匂いを逃す事などめったになかったが。

しばらく「酒が旨くて、ねいちゃんは綺麗な」所で、静かに待っていて下さい。俺にも色々事情があるから、今すぐという訳にはいかないが、おっつけ行きます。そしたら、又皆で楽しく大騒ぎをしましょう。

上遠野さんの思い出 18期 吉田 慎次郎

私達18期は、昭和38年4月に西高に入学しました。1年先輩の17期には、秋山さん、三浦(等)さん、上遠野さん、梅原さんがいました。17期からがいわゆる団塊の世代で、いまから考えればいろいろエネルギーがあふれていました。

その年ワングル部には7~80人もの入部希望者があり、困ったのは17期の二年生達でした。これ程の新人を抱えてはまともな山行もできないし、まして夏山合宿など計画も立てられないというわけです。

4月に行われた恒例の川苔山新入生歓迎登山には、確か3~40人の新入生が参加したと思います。塩地谷の小屋から川苔山~鳩ノ巣のコースでは、長い列が出来てまるで遠足の様でした。歓

迎会だと言うのに終始不機嫌な二年生のあの態度の意味が解るまでにはもうしばらく時間がかかりました。

5月の雲取山登山は厳しいものでした、部員を間引く為のしごき登山だったというわけです。何も理由がわからず連れて行かれた一年生こそいい迷惑でした。重い荷物を背負わされ、小さなサブザックで上級生の権威をふるう、三浦等さんや上遠野さんの顔が今でも思い出されます。しかしこの5月山行が功をそうして、新人は一挙に20人足らずとなりました。それでも二年生が考えていた適正な数には到底及びません。

夏山前までにどうやって一年生部員を絞り込むか、これが大問題というわけです。週三回のトレーニングと6月山行でしごいて一挙に目標の人数に絞り込む、こいつは残すけど、こいつは何としても辞めさせる、こんな密談を二年生達は連日していたようです。後で聞いた話では、辞めさせたい筆頭候補は私で、評価表の吉田の項には二年生全員が×点だったようですが、特に上遠野さんの評価欄には、グリグリマークが付いていたとの事でした。40年前のこんな出来事が、つい昨日の事の様に思い出されます。上遠野さんが目をギョロギョロさせながら忙しく動き廻っている姿と共に……

私はその後、西朋の皆さんともしばらく離れておりましたが、やがて上遠野さんや同じ17期の秋山さん達とヨット・テニス・沢登り・スキー等で遊ぶ様になりました。この仲間の中には、あの5月の雲取山登山のしごきで嫌になってやめた組の大石君もいて、その後はすっかりいい友人になりました。特に20年位前に上遠野さんが藤原に山荘を造ってからは、私も同じ頃石打にマンションを買った事もあって、しょっちゅうスキーを一緒に遊ばせていただきました。上遠野さんの存在は、何をやってもいつも三人分位の賑やかさで一人帰っただけで、何か急に静かにさびしくなったものです。

学生の頃に一年違えば天地の差で、今でも上遠野さんが、慎次郎！大石！山野！と気持ち良さそうに呼びつける声が聞こえるようです。我々と言えば、いつもちょっと面倒くさそうに上遠野さん、上遠野さんと、あの愛すべき先輩に応えていたものでした。

飲み会における上遠野さんは最高でした。銀座裏あたりにでも呼べば、あのキャプテンの服装に黒のパイロット用アツタシュケースを持って颯爽と現れ、もう娘達の視線はひとりじめでした。皆に「僕のことはこれから「マイケル」と呼んでくれ」が出ればもう絶好調でした。

上遠野さんが逝かれてもう一年になりますが、西朋の仲間が時々集う時、いつも上遠野さんの話が出て、いなくなったことが今でも信じられません。ドアの向こうから今にもあらわれそうな、いつもそんな気分です。これからもずっとずっと私達の仲間にいるに違いありません。

上遠野清さんを偲んで 18期 尾崎 純理

相変わらず20代の時と余り変わりのない意識で日々の生活を営んでいますが、もうすでに還

暦を過ぎてしまいました。若い人から見れば、さえないジジイとしか見えないのでしょう。同世代の人間が少しずつ姿を消し始めています。同期であった野崎も不慮の事故で亡くなりました。仕事を通じて親しくなった、マスメディアの友人も志半ばにして倒れました。それぞれの悲報を聞いたとき、ショックを受けたものです。しかしながら、上遠野さんの死を聞いたときは、まさに椅子から飛び上がらんばかりの驚愕の念を禁じ得ませんでした。

一期上の彼とは、私が大学に入学してからの二年間、西朋で親しく山行を共にしました。私にとって人生の最も懐かしい時代の一つです。彼は山登りに欠かせない驚異的なスタミナと動物的な視力の持ち主として、私の記憶の奥深くに刻まれております。冬山の日が傾きかけ、周囲がガスっているさなか、その日宿泊する山小屋を遠くから見つけメンバーをほっとさせたり、トップを歩いて、どうでもいいようながらくたを道のわきから拾って、バテバテの我々をあきれさせたりしたものです。

学生運動盛なりし時代、われわれが自らの行く末を見定めかねているときに、いち早く企業に就職を決め、サラリーマン生活を謳歌しているかと思いきや、あっという間に全日空のパイロットに転身するという離れ業も見せていただきました。パイロット時代も10年ほどお付き合いさせていただきましたが、同業者からも少しばかり異質の存在と扱われていたような気がします。

彼は、実に自由で自然にふるまっていたとの印象があります。私などよりはるかに長く人生を楽しんでいくものと考えておりました。彼の死は、平凡ですが、まさににわかには信じられないことでした。忽然としていなくなった彼を偲んで、年末のある日、武蔵野の小高い丘にある彼のお墓を参らせていただきました。間違っただけで教えられて、動物霊園に迷い込みギョッとしましたが、無事に行き着くことができました。小春日和の穏やかな年の瀬の一日でした。

このところ、この世を去った同世代の人たちの想いに支えられながら、自分が生かされているとの考えを強くしております。残された命に限られてきているだけに、私を頼りにしてくれる人たちのためにも、悔いのない人生を送りたいと、日々気持ちを新たにしております。もちろん生来のいい加減さと、ちゃらんぼらんのところは直らないでしょうが。

人生の大事な時期に、濃厚な時間を親しく共にした上遠野さんを偲んで、一文をしたためさせていただきました。上遠野さん、貴兄にはあまりふさわしい言葉とは思えませんが、安らかにお休みください。

上遠野先輩の事 18期 三浦 潤

大学入学後の西朋登高会としての山行では、私は上遠野さんに連れて行って貰う事が一番多かったと記憶しています。冬の横尾尾根からの槍ヶ岳も印象強いですが やはり一番多かったのは岩登りでした。谷川岳、横尾の屏風岩などありますが、岩登りで思い出すエピソードはいろいろあります。

確か私が新人の頃で、場所は谷川岳ではなかったかと思いますが、上遠野さんがトップでセカンドが私。ほぼ垂直の岸壁をトラバースした時ですが上遠野さんが通過した場所を私はどうしても通れない。ステップはあるのですが両足を一杯広げても届かない。何してる！と怒鳴られて、ダメです！と言ったら、上遠野さんが戻ってきてその場所を自分で渡って見せて、届くだろ！と言われました。真に不遜ではありますが、私は、少なくとも上遠野さんよりは足は長いと思っていましたので愕然としましたが、ザイルに繋がれていることもあり思い切って（それこそ跳ぶように）足を伸ばしたら渡れました。彼の足は見た目以上に長いのです。

もう一つ、上遠野さんと二人で岩登りから東京に帰ったが夜になって腹も減ってきたので当時司法試験の勉強に励んでいた同期の尾崎純理の家に押しかけたことがあります。尾崎のご両親は息子に似ずとても出来た立派な方達で、いつも上寿司を取ってくれたからです。寿司がきて手掴みで食べようとした時に、上遠野さんが、寿司の食べ方は、まず卵を食べてシャリの味を確かめ・・・と語りだした時に私と尾崎は口の中に2個、両手に2個のトロやらイクラやらの寿司を確保済みでした。私は勿論、講釈など全く耳に入らずひたすら自分の好きなネタを確保していたし尾崎は（確か既に夕食を済ませていたはずですが）他人に食われる位なら・・・と敢然とかつ黙々と食いだしていたのです。やっと事態の深刻さを認識した上遠野さんが参戦した時は時既に遅し、私はあんな不覚をとり啞然とした上遠野さんの顔を見たのはその時だけです。何時も私達には全く隙を見せないばかりか、啞然とするような事ばかりしていたというのが彼の印象として強いですが、それは彼の人並み外れた防御本能の裏返しだと思います。

それほど慎重であった人が、雪下ろしで命を落とすとは・・・未だに信じられません。

上遠野清さんを偲ぶ 18期 滝口 道生

学年は1年の違いしでしかなかったが、上遠野さんは10年も上の人のように思われた。もちろん山に登る力量のことである。その10年は、10年頑張ったからといって追いつけるようなものとは思えないのであった。どこまでも追いつきようのない差というものがあるものだと実感させられた。

すでに40年余の昔の話である。高校山岳部（ワングル部）の頃、一年上の先輩が記憶の中に5人いるのだが、かれは別枠であった。そもそも定例山行も合宿も一緒に行った思い出がほとんどない。時おり、部室にあらわれては古株の存在感を漂わせて何やかやと楽しげに話しては去ってゆく。アイゼンなどという高価なものを買い求めることは高校生にとって夢の話であった頃、自作のアイゼンをもってきて披露したのも彼であった。実用に耐えたとは思えない。とにかく、その工夫、創造性、こころざしにおいて瞳目すべきものがあつた。

晴れて大学生になった時、何人かの先輩達に荻窪で飲ませて貰った。3軒目の店を出ようとカウンター席から立ちあがった時に、腰が抜けた。意識はあつたが、そこから抱きかかえられて、

彼を含む先輩たちが共同所有していたパブリカ（トヨタの大衆車）に乗せられ、上遠野宅（ではなかったかもしれないが）に泊めていただいた。翌朝、吐物にまみれた後部座席のビニールシートを掃除させられながら、2度とアルコールは口にすまいと決意した。ふり返って堅い決意であったとはいえないのだが。

同行した山行が記憶に残るものは多くはない。ズボラな性格ゆえ、記録というものがまったくない。写真の一葉とてない。かすかな記憶のみであり、それとて思い違いである可能性も高い。三ツ峠で岩登り訓練をしていた頃に、ホールドもスタンスも、それらしいものはわからんような垂直の岩場に、登山靴（クレッターシューなどというものではもちろんない）の爪先と、手の指先をヒョコヒョコひっかけながら、ジッヘルもなく登っていくのを、あっけにとられて下から見上げていたのを思い出す。

また1967年の冬山合宿（西朋）のことであったと思う。7～8人で40kgのキスリングを背負ってスキーをはき、梅池から白馬乗鞍までたどりつき、そこにベースキャンプをはって、小蓮華までの前進キャンプをだした。白馬岳をめざした訳である。しかし、冬の後立山連峰は常に死と隣りあわせている。その日から猛烈な吹雪となり、身動きならぬまま4日間、テントにとじこめられた。燃料も食料も残り少なくなりわずかな小止みのみをみて撤収、退却しはじめたが、再び吹雪。ホワイトアウトの中で絶望的なラッセルに強いられながら、最も頼りになったのは彼の目であった。誰の目にも見えようがない遙か先の赤布をつけた竹棒の目印を「あそこだ」といって指さす。そこまで辿りつくとはたしかにそれがある。誠に信じられぬ思いであった。

それより前のことであったか、後のことであったかも定かでない。たしか松本深志高校が西穂で落雷による大量遭難をしたおなじ時期であったと記憶する。上遠野さんに文字通り率いられて、壮大な山行をおこなった。中房温泉から出発し、燕 - 大天井を経て、天井沢に下り、北鎌沢の出会いにテントを張った。翌日は北鎌沢をつめて北鎌の科尔から独標まで急傾斜の北鎌沢の雪渓は、僕のいい加減なステップカットとピッケル技術を寄せつけず、滑落した。上遠野さんが下でうけとめてくれた。独標のあたりで、猛烈な雷雲に囲まれて、テントの中でふるえていたように思う。それでも槍の穂先に顔をだした時は、多勢の登山者に驚きと敬意のまなざしで注視されたように錯覚して、若い心は誇らしさに溢れていた。さらに南岳 - 大キレット - 北穂 - 白出乗越 - 白出沢を経て、飛騨側、蒲田川右俣林道に降り、遡上して滝谷の出会いにテントをはった。名にし負う滝谷を下から突き上げようというのであった。どのように登ったのかは記憶の彼方である。早朝、暗いうちに、冷え冷えとした空気の中をなかば悲壮な決意で登りはじめたことをおぼえている。ただ上遠野さんがルートを拓き確保をしてくれているという安心感のみに支えられて、雄滝を攀じ、ナメリ滝も登り、多分は第2尾根を登って北穂に辿りついた。夕暮れがせまっていたが、怖ろしいと思うこともなく、むしろ、こんなものかという思いであった。その後、余力をかって、北穂の岩小屋に腰を据えて、岩登り合宿をした。その時も転落し、ザイルで確保してもらってことなきを得たことをおぼえている。とにかく長い山行を通じて、ドジでグズな後輩を一度も怒鳴りつけることもなく、あたたかく見守り、支え、励まし、そしていのちを守ってくれた。

それから 40 年余。いつでも会えるように思いながら、一度も会うことのないままに、上遠野さんは去ってしまったという。不思議としかいいようがない。

昨夏、笠が岳への道すがら、鏡平で槍穂高連峰を眺め、滝谷を眺め、40 年前をふり返り、いかにしても、自分がそこを登ったのだということを得心しかねつつ、上遠野さんを偲んだことである。合掌

上遠野さんへの感謝 19 期 山野 裕

上遠野さんには登山の多くを教えてもらいました。2 年先輩で、高校 3 年の夏山で黒部ダムから内蔵助から剣沢を登って剣岳に登った時は雪渓や岩場を多くの O B とともに丁寧にサポートしてもらった。西朋に入った大学 1 年の時は 5 月連休の谷川岳の雪渓訓練から 6 月の三つ峠の岩登り、夏山での穂高での岩登り。12 月の梅池から白馬へ登ろうとした時の吹雪の中での行動。3 月の横尾尾根から槍ヶ岳に登った時の南岳稜線上での幕営で吹雪での停滞。4 期の故平沢勇さんの計画に沿っての大きな登山が出来た西朋が多いに活動していた 1 年でした。大学 2 年の時は山に行くメンバーは減ったが、8 月の屏風岩中央カンテや 12 月の八ヶ岳裏同心ルンゼでの初めての氷登りなど初めて経験を指導してもらった。近年は冬、春に宝台樹の山小屋に泊めてもらいスキーを何度もした。高校生と一緒にことも多かったが最後は亡くなる 3 か月前の年末に 2 人で泊まった。また雪下ろしを手伝わなければと思っていた頃に訃報を聞いて残念な思いだった。多くの指導に感謝しつつご冥福を祈ります。

神様の計算間違い 21 期 伊東 伸作

上遠野さんを一言で言うと、機智と俊敏さ、行動力のある人でした。からだ全体は、うっすら体毛に覆われ、胸毛が自慢で、小ぶりのジェームス・ボンドといった風情。まさに不死身のイメージ。日差しの強い夏の雪渓で、上半身はだけた様が似合う人。目が動物的にギョロギョロと獲物を狙っているような感じの中にも、愛嬌を隠しきれないギタっとした笑顔が特徴でした。

僕は上遠野さんに可愛がられ、いろいろな所に連れて行ってもらいました。高校卒業後の西朋の時には既に社会人となられていました。安田海上に入社されたあと、美人の奥さまマリたんを見つけると、もう勤め人は卒業とばかりに、さっさとパイロットに転身し全日空に入社、資格試験も一発合格。その間、人手不足の西朋を支えるべく、僕らを励ましてくれて、荻窪界隈の飲み屋にもよく連れて行ってくれました。まずは長兵衛で焼き鳥、モツ煮込み、そのあとルナパークに行きました。ママさんは須田さんって言っていたかな。僕はひばりが丘に住んでいたの、夜が遅くなると必ずと言っていいほど、仲間の家に御厄介になっていましたが、上遠野さんの処に

もよく泊まらせて頂きました。ある晩、上遠野さんと飲みに行った時に途中ではぐれて、行方不明になり、仕方なくお宅にお邪魔して帰りをお待ちしましたが、いつになっても帰らず、心配でマリたんと二人で深夜の荻窪の街を搜索したこと今でも思い出されます。

とにかく面倒見がよく、動物的な顔の割には大きな声を張り上げることもなく優しいお人柄でした。僕の北海道の新婚旅行はもちろん全日空、沖縄出張のときは上遠野副機長のフライトに乗せて頂きました。その後は、宮前平のお宅を建てられた時には、玄関の門柱をレンガ造りにするんだと、即席左官屋に励まれていたのを見て、なんにでも屈託なく挑戦される上遠野さんを羨ましく思いました。

破天荒だけど、計算もキチンとできていて、人生の帳尻が必ず合ってゆくような天性の徳を備えた人でした。その上遠野さんがご自慢の宝台樹の別荘で事故に遭われたと聞いた時には、神様が計算間違いをしたのではないかと思いました。僕自身もどうしても辻褃が合わないような釈然としない気持ちになりました。なんで一人で雪降ろしをやらなければならないならなかったの。でも、上遠野さんらしいといえば、らしい最期だったんでしょうか？

上遠野さんの思い出 21 期 中村正俊

高校生の間は4年先輩のこの人に圧迫感というか、苦手感がありました。こちらがキスリングを目一杯背負わされて喘いでいる脇をサブザックでひょいひょいと飛び回り、その上「君のいく道は～果てしなく遠い～」なんて歌ったりするもんですから結構腹も立ちました。ほとんど後輩をしごくのが趣味のようにも見えました。

こちらが学生になり体力・技術のレベルが段々追いついてくると、今度はやたら付き合いが良くなりました。荻窪の南口近辺ではしょっちゅう吞ませてもらったし、岩に熱中していた時期にちょっと面白そうなプランを考えるとすぐに乗ってくれました。その内こちらが会社員生活に埋没していったため、自然と距離が生じてしまいましたが、いつでも若い澆刺世代に関心があったようです。

面倒見がいい、後輩思いとも言えますが、要するに若い連中を引き連れて一緒に騒いでると楽しかったのかもしれない。大人の落ち着きとか風格とかの身づくろいには無関心で、万年青少年のようにむきになって張り合ってくるものですから、年相応に老けていくこちらが引け目を感じてしまうお人柄でした。

でもこの人に限っては、あまりしみじみと偲んでも絵にならないんであって、若い連中をもっと集めて西朋を盛り立てていくことが一番のお返しになるのでしょうか。後輩を育てられない西高の現状が辛いところです。

まったく力不足ですが、お気持ちを踏まえてもう暫く頑張ればと思っております。

上遠野さんの思い出 25 期 久米 祐一郎

昨年のお正月、上遠野さんから頂いた年賀状はお孫さんの写真入りでした。全日空を退職されたこと、第二の人生を歩み始めたことが、嬉しそうな筆跡で添え書きしてありました。それから 2 ヶ月後、山野さんからの宝樹台で亡くなられたとの訃報に接しました。突然のことで驚いたと同時に、俄かには信じられませんでした。

上遠野さんに私が初めてお会いしたのは私が西高 1 年生のとき、2 月山行で那須茶臼岳へ行ったときだったと思います。私たちは先に着いて硫黄精錬所跡辺りに幕営していました。夜「おーい、西高おー！」という大きな声が出て、吹流しを開けると当時に入ってこられたのが上遠野さんでした。強風で有名な那須も、そのときは風も弱く快晴に恵まれ快適な登山でした。先輩達から「上遠野さんは厳しくておっかない」と聞いていたのですが、初めてお会いしたときには人間的に魅力がある方という印象を受けました。

私が大学へ入学して西朋に入ったころ、上遠野さんはすでに全日空へ移られ YS-11 の副操縦士として勤務されていたと思います。荻窪で飲んだときに、北アルプスの上空を飛ぶ話しをされていました。お子様が誕生したのも、この頃だったと思います。また西朋の山行にも積極的に参加され、滝谷で新人の私とザイルを結んで登攀の指導をして下さいました。山の魅力を教えて頂いたことに感謝すると同時に、社会人になっても衰えない山への意欲と体力にも感心しました。またスキーにもご一緒させて頂いたこともあり、長い板を履かれて颯爽と滑っている雄姿をはっきりと覚えています。このころ上遠野さんは杉並の実家に住まわれており、荻窪で飲んだ後にお宅にお邪魔したこともありました。考えるとご両親や奥様にご迷惑をかけていたのではないかと、今になって申し訳なく思います。

上遠野さんと西高で同時期に在籍したことはないのですが、お付き合いさせて頂いたことは、有り難く思っています。これも西高、西朋の良き伝統の賜物と思っています。上遠野さんが逝去されてから 1 年以上が経ちましたが、まだお会いできそうな気がしています。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

上遠野さんの思い出 28 期 青谷 知己

私達 28 期が高校生の現役だった頃、西朋からの引率はもっぱら 21 期の 3 人、そして 20 期山本泉さん、19 期山野さん、17 期の上遠野さんであった。

上遠野さんが引率とわかると、我々 28 期はことさら緊張感に包まれた。2 年の春合宿は早川尾根で、仙丈のアタックから戻ると、テントに上遠野さんが後発で到着していて、そこからのテント生活は一気に緊張が高まったものだった。しかしその合宿は、アサヨ峰、高嶺の山頂にテントを張り、天候にも恵まれて「快哉」と叫べるほどの充実した山行だった。途中雪庇が足元で崩

れ、ヒヤッとした場面があったことも鮮明に覚えている。上遠野さんが、悪いー悪いーと頭をかいていた。今思い返しても、高校時代の山の基本は、ほんとに西朋の先輩方に教え込まれたものである。いい先輩達に囲まれ、いい時代だった。

最近、常々言われていたのは「青谷おまえのせいで、俺は岩を止めたんだ」という話である。いつの頃だったか、大学時代の西朋合宿。舞台は穂高滝谷。2パーティーがP2フランケの取り付きにいた。上遠野さんパーティーがまずトップで取り付き、苦闘しながら（下からはそう見えた）少し古くなった技術で登り始めた。勢いに乗っていた私は、それを見かねて、左から強引に追い越しをかけ、先行してしまったのだ。今思えば、上遠野さんの気持ちを顧みる気持ちは私にはなく、引導を渡すことになったとは申し訳ないことだった。

最近、宝台樹スキー場にてお世話になった。何度も寄せていただいたような思いではあるが、記録を見ると2002年2回、2003年1回とある。山小屋での暖炉、食事作り、雪かき、そしてゲレンデでのスキー三昧、レストラン、すてきな同伴者？。私達の技術はまったく追いつけず、リフト下の新雪を選んでパワフルに滑っていく姿には脱帽であった。スキー場の往復の車の運転もパワフルで、いい温泉も教えてもらった。そういえば思い出したが、高校1年の初めてのスキー合宿（天神平）で、上遠野さんのオレンジ色のすばらしいスキー靴を借りて滑ったことがあった。丁寧に乾かして後日返しに伺ったのが最初の御縁だった。

毎年行こうと思いつつ、宝台樹の山小屋には行けなかった。今年の冬はそのチャンスだった。あまりに突然の訃報に言葉もない。宝台樹は楽しくまた苦い思い出の地になってしまった。いつものように総会の2次会の席に現れて、こちらが少しの緊張を感じたあと、「青谷一、おまえのせいで・・・」とまた言われるような気がしている。

上遠野さんの思い出 28期 松本 哲郎

上遠野さんと言えば、あのギョロツとした目がまず目に浮かぶ。あの目で睨まれると、すくみあがってしまう。でもそのあとに、ニコツとした笑顔に変わる。そんなに怖い人ではないとほっとすると同時に、引き込まれてしまう。上遠野さん独得の人心掌握術なのだろう。

山には、残念ながらほとんどいっしょに行った記憶がない。武尊の山小屋も一度お尋ねしたいと思っているうちに機会を逃してしまった。

やっと退職されて、これからやりたいことができる時間ができ、いろいろな計画もあったでしょう。雨の中で、焚き火をマッチ一本で起こす方法など、まだ、伝承すべき山の技術もいっぱいあったに違いない。最近、沢登りや、冬山の入山でも焚き火を使うことが多くなった。マッチはライターに変わり、あちこちつけまくる。新聞紙もどんどんくべる。最後の手段は、固形メタを放り込む。雨でぬれている木では、何度も試みて、結局焚き火をあきらめたこともある。焚き火で火を起こすのに苦労するたびに、上遠野さんのギョロツとした目を思い出さるう。「そんな

じゃだめだ。代われ、代われ！」という声も聞こえてきそうだ。まだ、教えてほしいことがいっぱいありましたよ。

上遠野さんの思い出 30 期 岡田 隆

6年前の年末に1度だけ、宝台樹山荘で西朋のスキーに参加したことがあります。水上地方は大雪で、4WDとはいえスリップするワゴン車を慎重に運転してたどり着きました。ゲレンデにはANAの若い女性社員が多数来ていて、山荘で一緒という方も居て、普段の西朋とは違う雰囲気には驚かされました。工具や酒瓶類などでごちゃごちゃになった山荘内の掃除や片付けや炊事など手伝いましたが、ボサツとしてると「こら仕事しろ！」とどなられます。最終日、私は近くの宿を取ってもらいもう一泊して、翌日も付近の丘をスキー散歩することにしました。山荘を出発すると、上遠野さんが「4WDにスタッドレスなら怖いもの無しだよ」といって車を結構飛ばして、宿までのわずかの間に、スキーへ来た子供達を載せたマイクロバスに接触。怪我は無く車が少しへこんだ程度でしたが、相手運転手がやくざまがいに上遠野さんをすごい剣幕で脅すので、警察沙汰となってしまいました。大雪で事故が多く、警官が到着するまで時間がかかり、運転手は一旦子供たちを宿舎に送って戻ってきました。トラブルは困りものですが、私にとって交番へ連絡のためANAの若い女性とドライブしたり、相手の脅迫まがいの態度に対して断固ひるがない上遠野さんの態度を拝見したり、普段無いようなことが体験できました。結局、上遠野さんの肩書きを見て警察側も全面的に味方になってくれて、相手運転手が脅迫行為をしたということで、警官に厳しく窘められ謝罪して一件落着となりました。私はこんな山以外の思い出しかないのですが、あのお人柄が懐かしく偲ばれ、また一緒できる機会もあるかと思っていたので残念です。

上遠野さん追悼文 34 期 吉田 浩之

1986年1月、私が甲斐駒ヶ岳戸台川本流でのアイスクライミングでの事故の際、救助に来てくれ、救ってくれた上遠野さん。西朋のみなさんとともに命を救ってくれたたくましい上遠野さんが今はいないことが、まだ信じられません。私と浜田くんの2人が大滝からザイルで繋がったまま数百メートル滑落し、私は右足首の脱臼骨折で動けなくなりました。すぐに西朋が救助に駆けつけてくれ、その中に上遠野さんがいました。谷にいたことからヘリが入れず、ヘリが入る尾根まで私を担ぎあげることになり、私は上遠野さんの背中に結ばれたまま尾根まで運ばれたことで、今の五体満足な自分があると思っています。

心よりご冥福をお祈りいたします。

上遠野さん、さっそうと登場 35期 森川 直人

上遠野さんというともまず第一に思い返されるのは、西高の部室（アパート2階）にころがっていた赤いザックです。変わった名字だなあと思いながら、眺めておりました。

西朋総会では、肩をいからせて、ギョロギョロあたりにならみをきかせつつ、ところどころで悪態をつきながら、狭い室内を徘徊されていた印象もあります。日活アクション映画でいうなら、主役登場のシーンです。つまり、上遠野さんには、強烈なオーラを感じておりました。

しかし、一番の思い出は、宝台樹の山小屋でのものです。青葉台で待ち合わせ、上遠野さんの愛車に便乗させていただきました。ANAの若手パイロットさんと一緒だったのですが、山小屋につくまでの車中、職場での諸々のことについて、熱心にアドバイスされていたのが思い返されます。買い物に立ち寄った水上のスーパーで、その若手パイロットさんと私が、「ポルシェとスバルはエンジン音が似ている」という話で盛り上がっていると、「何話してんだよ。お前ら気持ち悪いなー！」会話の主導権は、即座に上遠野さんに大政奉還です。

山小屋に関しても、豪快な話にはいとまがありません。スッチーをつれてきたら、あまりに原始的な建物なので泣いちゃった。根性のあるスッチーがいて、いやがるやつが多い中、ちゃんとドラム缶風呂に入った。等々。平成の昨今はセクハラだのパワハラだのいろいろありますので、気をつけてもらいたいものだ、と思いつつも面白おかしい話に聞き入っておりました。

その一方で、面倒な山小屋の管理を、こまめにされるという一面もお持ちでした。仲間内で山小屋をたてても、メンテナンスが大変で長続きしないそうですが、その面倒な部分を一手に引き受けおられているようでした。また、山小屋からの帰路は、いきつけの食堂でモツ煮を食べるのが儀式だったようです。国際線パイロットというセレブな雰囲気がありますが、モツ煮が好きな山小屋の親父でもあったのですね。

葬儀の日には、会社の後輩パイロットとおぼしき人が、呆然と立ち尽くしていたのが印象に残りました。どうやら、まだまだ上遠野さんの（若手の指南役としての）役目は終わっていないようです。時々、夢の中に出てやってください。

上遠野さんを偲んで 37期 上野 午良

突然の訃報でした。まさか、あの元気印の上遠野さんが亡くなられたとは俄かには信じ難い出来事でした。私が上遠野さんと初めてお会いしたのは、1985年お正月の西朋1年目の南アでの冬合宿の時でした。合宿前半を2組に分かれてアイスクライミングの後、後半に合流し鋸尾根縦走というスケジュールでの合宿でしたが、前半のアイスクライミングにおいて、34期の吉田先輩と浜田先輩組が双子沢で滑落事故が発生し、その救助隊として事故翌日の未明に東京より駆けつけてくれた西朋諸先輩の中に上遠野さんがおられたのが初めての出会いでした。当時もパワフルで

色々な判断と指示をされていたことが思い浮かんできます。その後、お忙しい中、総会に毎年のように参加して頂き、懇親会時に色々とお話しさせてもらいました。上遠野さん独特の言い回しでの、ワングルや西朋での昔話はあることがなく、特に上遠野さんと上遠野さんの同じ代付近の先輩方との話のやり取りは漫才でも見ているようで、いつも笑わせてもらっていました。また、西朋総会懇親会でしたたかに呑み酔っ払った私と山野さん含めた3人の横浜方面帰宅組をタクシーで送迎してもらい、素敵なログハウス風の上遠野さんのマイホームを見せてもらったこともついこの間のような気がしています・・・私とは年代もかなり離れており山行を共にしたことはありませんが、我々実働部隊にとっては、先日お亡くなりになられた田中将利さん然り、西朋活動において万が一何かあった場合の偉大で頼りになってくれる、大きな後ろ盾になってくれるという大きな存在でありました。パイロット職を退職され悠々自適の生活であり、これからという時の出来事で、さぞかし無念であったことと思います。インパクトがあり影響力のある上遠野さんが亡くなったことは本当に残念でなりません。毎年総会が長引き、遅れて集合した懇親会会場の新京でいつも言われる「おう！遅いぞ！」という声が来年はもう聞けないのが寂しいです。ご冥福をお祈り致します。

上遠野さん追悼 47期 尾崎 宏和

私は上遠野さんと山やスキーへ一緒させていただいたことはありませんが、総会のときには威勢良く話をされ、私も数度叱咤激励をいただきました。その姿が山に登っても強そうだなとの印象をもっています。

それより、上遠野さんが全日空の機長ということが、私にとって上遠野さんの存在でした。仕事で、酸性の液体実験試料を中国から持ち帰りたいことがあったのですが、害作用は弱いものの、航空危険物として一般に飛行機輸送が出来ないものでした。「航空危険物規則書」を読んだり国土交通省に問い合わせたりしましたが要領を得ません。完璧に法律に則ると相当な手間と出費がかかる上、わざわざ容器を入れ替え、目的外物質が混入したりすることも懸念されます。そういうボーダーライン上の物品は、現場において最終的には機長判断とのことも耳にはさんだため、どうしても、という場合には上遠野さんに聞いてみようと思っていました。

その後、危険物でも輸送量と包装方法に例外を設ける「少量規定」や「微量規定」という扱いを知り、何とかなるとわかって間もないころに、事故の知らせが入りました。上遠野さんの御冥福を、お祈りいたします。

2007 年度

2007 年度役員

会長	遠藤 彰
チーフリーダー	上野 午良
サブリーダー	尾崎 宏和
学生リーダー	島田 悠彦
会計	上野 利之
記録・会報	尾崎 宏和 灘吉 聡 島田 悠彦
装備	灘吉 聡
西高係	山野 裕 福村 任生 小澤 晃平
都岳連関係	上野 午良
ホームページ係	灘吉 聡
超 OB 係	林 武志

0702 北アルプス/ST : 梅池～風吹～北小谷

【期日】2007. 4. 7(土) 【参加者】尾崎

8:00 梅池ロープウェイ下～梅の森 8:30～梅池ヒュッテ 9:15～天狗原 10:35～フスプリ山とのコ
ル 11:00～林道末端 12:40～14:46 北小谷

暖冬だった後春先に多く降って、雪は平年と変わらない。いつものように、梅池の下のゴンド
ラで降り、ロープウェイ南側の沢筋を登り、途中でロープウェイをくぐって梅池自然園に。この
時期ロープウェイは動いているが、満員待ちもあつたりで、所要時間に大差はなさそう。

天狗原から山の神尾根を右に見て、尾根に伝う。ちょっとした登り返しはあるが全般に快適な
滑りである。今日は展望はすこぶる良く、白馬乗鞍の向こうに雪倉岳が見え、残雪の多さに5月
連休もだいじょうぶと感じた。

風吹大池手前で、木地屋方面に下るシュプールがあり、今回はこれが課題。このルートは蓮華
温泉から下るとき、峠越えルートと合流するから、イメージできる。

風吹山荘から東面はブナ大木の斜面だった。これを左に絡みつつ滑る。夏道のある尾根に入る
手前が急斜面で雪が切れており、さらに左へトラバースして下ったら左に行き過ぎる。ここはち
ゃんとしたルーファイが必要でちょっと難しい。窪を渡り、スキーを脱いで急斜面をラッセルで
登り返して正規の尾根へ乗るが、それが両側別々の川が迫ってきて、蟻の戸渡りのようになって
いる。左右の川は合流しない。左の川の中には温泉が沸いている所だ。そのまま歩きで広い所ま
で行って一安心する。後は林道まで少しあるだけ。

のはずが大あま。まず、雪が少なくなってきたヤブに引っかかったり激突寸前だったり、こ
れは何処でもあるので了承とする。微妙な林道跡が出てきて再度スキーをつけるが、林道が右へ
巻くところで雪も切れ、この先は大きく落ち込んでいる。ちょうど2万5千図の切れ目であり、
この先は林道だろうと甘く見て、エアリアマップ(92年頃発行のもの)しか持っていない。ヤブで林
道がどう続いているか良く見えない。枝沢を巻いた向こうの山腹には、確かに林道跡のようなも
のがマップと一致する所に有る。が、崩落しているようだ。逆に、左奥へ記載のない林道に登っ
ている。それでも旧道を行けると見たのが大間違い。まさか道が変わっているとは知らず、分岐
点から下る道(跡)に入るやいなや、崩壊林道の滑りとなり、結局ラッセルで上の林道まで直登す
る。そこから再びスキーを履き、山腹を乗っ越して、降りた所は予定よりだいぶ南だった。

おそらく、95年夏の豪雨か何かで旧道は崩壊したのだろう。後日、岳人2006年12月号でこの
新林道を確認した。とくに山麓は人為的に変わりやすいだろうし、山中とて大きく崩れれば同じ。
やはり、地図は新しいものが必要ですね。

0703 安倍奥：神通坊～七面山

【期日】2007. 4. 8(日) 【参加者】橋本

登山口の羽衣、朝7時で6℃。晴れ、霧。7:15 出発。肝心坊 7:48 着。18-19 丁目で大型のリス。参道の杉の大木の木肌が異様に赤い。9:20 見晴台着。見晴らしは全くなく、風がありやや寒い。作業小屋近くで休憩。七面山方面のカラマツ林が見事。昨日降った雪がうっすらと残っている。七面山山頂着 10:03 (1982m)。小休後、近くにある最高三角点 (1989m) に向かう。しかし、積雪のためか、ルートを見出せず、希望峰方面に進むが、30 分で引き返す。山頂で昼食し、下山開始。アイゼン着用。樹林帯の中のルートは雪がまだ凍結している。羽衣帰着 12:05。所要 4 時間 50 分。標高差約 1500m のこの山はきつい。今日は「仏陀誕生の日」だ。これとは関係なく、日蓮宗の信者が多数で唱和しながら敬慎院まで信仰登山をしている様は、まさにここが信仰の山であることに気づかされる。

その他、

04 月 06 日 (金) 矢倉岳 (870m) p

04 月 10 日 (火) 高尾山 (599m)、城山 (670m) p

にハイキングに行っています (後者は西朋超 OB 会で)。

(西朋掲示板 No. 2379)

0705 八ヶ岳：美濃戸口～横岳～赤岳

【期日】2007. 5. 3～4 【参加者】中村, 遠藤, 島田, 小澤

南八ヶ岳(2007年GW)、赤岳鉱泉-硫黄岳横岳赤岳-鉱泉[参加者:中村(21期),遠藤(26),島田(53),小澤(58)]のシンプルな記録です。

5/3:

茅野 1020(バス 900 円)美濃戸口 1140-1225 美濃戸山荘 1245-中村さんが壊れたストックを拾う。1355[北沢 2100m]1410-1440 赤岳鉱泉、幕営。人工氷壁は邪魔である。1610 テン場から雪訓へ、行者小屋へむかって 20 分くらいのところの右斜面で 1 時間ほど。アイゼン歩行、滑落停止→いわゆる基本形と滑り出す前に止まる事(しかし現地斜面は緩やかで反転すると膝でも止まってしまう。)、確保支点を用いない場合のザイルワークの形(コンテ腰がらみなど)考え方も教わった、ビーコン探し→2 つだったので動作確認のみ(4, 5 人で走り回ってやらないと練習にならない)。遠藤さんがアイゼン最終調整。夕食は小澤君による炒飯と具たくさんスープでうまかった。

5/4:

410 赤岳鉱泉 550(アタック)-655 赤岩の頭下 715-急斜面を左へ巻き気味に稜線へ乗る。雪庇はもはや張り出してはいない。750 硫黄岳 800-晴天だが広い稜線で西風が強く吹きつけ時折姿勢を崩しそうになる。目の前にカモシカがこちらを見ている、3m くらいまで近づいても逃げなかった。奥ノ院手前のクサリとハシゴは雪に埋まっていなかったので小澤君もゆとりを持って通過。910 横岳奥ノ院 925-鉾岳付近はピッケルを山側に打ち込みバランスをとりながら鉱泉側の急斜面をトラバース後、短いながら氷斜面をアイゼンを効かせ稜線に戻る。風で小さな雪板が吹き上げられ乱舞している。1030 赤岳展望荘 1105 中村さん遠藤さんは行者小屋へ下り、小澤君島田が赤岳へ。1135 赤岳南峰 1150-西側に下りルートをわずかに夏道から北よりにはずしたため最終的に岩場を慎重に下り急斜面を 5, 60m ほど南へトラバースする必要が生じた。雪質視界ともによく幸いだったが高度感がありアイゼン使用にも慣れない初雪山参加者には大変であった(今回の反省点)。1255 文三郎道起点 1310-急斜面だがトレースもあり下りやすい。見上げると樹林と稜線、空の対比が美しい。

1345 行者小屋(合流)1410-1450 赤岳鉱泉(テント回収)1510-小澤君が携帯を落とすが、中村さんが拾っていてくださったので無事。1630 美濃戸山荘 1650-1730 美濃戸口。タクシーで茅野(5000

円)、電車待ちの時間に養老ノ滝で晩ご飯をごちそうになる。

島田自身は晴天の南八ヶ岳稜線を楽しんだ上、初心者と同行するという経験をとおしていくつかの教訓も得たように思います。中村さん遠藤さんには雪訓や行動中などで具体的なアドバイスをもらいました、どうもありがとうございました。

(島田記)

0706 北アルプス/ST: 馬場島～毛勝山・猫又山南東ルンゼ・赤谷山

【期日】 2007. 5. 3～5 【参加者】 青谷, 上野午, 尾崎

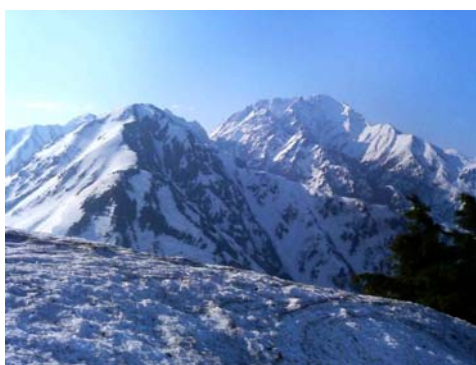
初めての山域であり試登的要素があったが、計画のピークを難なく踏むことができた。

3 日、麓の残雪は少なく、重荷とヤブで時間を取られる。左岸を行ったのが悪かった。ブナクラ乗越には予想超過の 14 時着。みんなバテ気味。コルから少し赤谷山よりの登ったところに幕営。ここから見る赤谷山は遠く高く立派である。あっさりあきらめ、休憩タイムとした。後立山連峰の見慣れないアングルが新鮮だ。猫又山南東ルンゼの支流で 2 度雪崩が起きる。

4 日、猫又山、毛勝山へ向けて登る。最初の斜面は雪がなく、急。南東ルンゼを観察して、滑降自体は問題無さそうと判断する。猫又山にスキーデポしてそこから毛勝山往復 4 時間。13 時半に帰ってきて 13:45 南東ルンゼ滑降開始。上部快適、下部はデブリと落石もあるが総じて問題なし。14:20 折尾谷合流点、すぐさま 350m、1 時間半の登り返し。上野先輩曰く、まるで奈落の底のようだと。ブナクラ乗越到着は 15:40。

到着 10 数分後に折尾谷側壁・猫又山登山道下の斜面から大ブロック雪崩が 2 度にわたり落下し、折尾谷をデブリで埋めた。ちょっと時間がずれていたら命は無かった。2 度目の雪崩は特に規模が大きかった。ブロックがひとつ脇にそれて転がり落ち、尾根を乗り越えブナクラ乗越に幕営していた別パーティのテントの 1m も離れないところをバウンドしていった。間一髪…。滑り出し時間が遅かった。この日は剣でも滑落事故が相次いだらしく、ヘリの捜索が続いていた。

5 日、空身で赤谷山往復だが、山容以上に登り応えのある山だと思った。頂上から剣岳の大展望は圧巻であった。下りは、スキーをデポしてきたのを少し後悔した。ブナクラ谷を滑って馬場島へ下山。登りのときは異なり右岸に道を見つける。ほとばしる雪解け水の傍らにカタクリが揺れている。果てしなく明るい空に帰宅が惜しまれる。西日の当たる剣の峻峰に、日本離れといえようか、山に魔物が住むというヨーロッパ的感覚もわかる気がする。林道左右は、至るところに遭難碑が並んでおり、一ノ倉沢とも似た雰囲気がある。上市で風呂に入って解散。(尾崎)



猫又山頂上から赤谷山と剣岳



赤谷山より毛勝三山。猫又山(左)から右寄りに落ちるのが昨日滑った南東ルンゼ

0708 奥多摩/WC : 丹波川火打石谷

【期日】 2007. 5. 27 【参加者】 松本, 尾崎

9 時入溪, 14 時半遡行終了 (岩岳尾根 1900m 地点), 前飛竜往復後岩岳尾根經由 18 時前に余慶橋に帰着。ルートレベルは小常木谷よりも低い。例年以上に早い沢はじめにはちょうどよかった。

滝は, 右俣大滝と最後の二股 20m なめ滝最上部以外は直登。最初の 7m 滝は右だが少しバランスが要る。2 番目の 10m 滝は右ルンゼを登って沢にクライムダウンするところが要注意。木があるので懸垂下降も可。その後のゴルジュ内の滝で 1 回ロープを使うがむずかしくない。ゴーロ手前の 10m 幅広ナメ滝はぬめっていて取り付いてみると悪そう。ロープ使用。はじめ残置ハーケン 2 つに気づかず 1 本打つ。そのとき 1 本を落として無くす。打つときもちゃんとスリングやカラビナを通しておく方が良い。

二俣奥の左俣大滝が前衛滝の奥に見える。前衛滝は右を登れる。前衛滝を越えるとひょっこりと二俣が現れ, これを入った右俣大滝は一見右壁を登れそうだが, 最上部がいやらしそうである。左岸のザレっぽい所を登ると, 傾斜が緩くなる手前くらいにかすかに踏み跡があり, そのまま右俣大滝のもう 1 つ上の滝も巻く。その後再び長いゴーロがあるが, 水流が出始めると気持ちよい 3 段の滝。二俣左の 20m 滝は最後の乗っ越しを左から巻く。詰めは浮石があるがヤブこぎなく岩岳尾根最上部のコルに出た。

稜線は新緑に石楠花と三つ葉ツツジが鮮やかだった。「奥多摩大菩薩高尾の谷」の記述は文章が大げさな感じ。著者の溯行が 4 月だから? 溯行図は奥の二俣前衛滝までは正しい。「東京周辺の沢」の溯行図はもっと簡素だが奥の二俣から上流も正しいと思う。(尾崎)

0710 上州/WC : 武尊沢～上州武尊山

【期日】2007. 6. 24 【参加者】中村, 松本, 尾崎, 島田

今回を振り返ると自分としては中山君がぎりぎりのところで参加できなかったのが唯一心残りではありますが、登攀は怖いところもないにもかかわらず岩と草付きに囲まれた上部はさすがは武尊の沢というだけの雰囲気を持った良い沢でした。これだけの沢に簡単に行って来られた気がしているのも遠路運転してくださった松本さんと中村さんのおかげです、どうもありがとうございました。以下、余計なコメント付きコースタイムです。

630 武尊神社 745-910 入渓点 930-1020 雪溪上部(～1680m)1035-(水が冷たいのをのぞけば快適なナメ滝などの景勝地。)-1115 二俣手前 1130-(左滝 5m はハング気味、巻きも悪そうで避ける。尾崎先輩トップでザイルをだして、岩がもろい右滝 5m を上った後、左へ草付きを容易にトラバース。詰めの藪こぎは短い。)-1230 沖武尊 1305-(尾崎島田は剣ヶ峰 2020m 経由下山。武尊沢が一見登れそうもない急斜面みたいによく見える。中村松本は手小屋沢避難小屋経由)-1515?(尾崎島田着合流)手小屋・剣ヶ峰分岐-1545?武尊神社

(島田)

前日まで行き先を迷ってしまい、参加者には混乱させてしまい申し訳ありませんでした。島田君の感想にあるように、開けた感じは丹沢の沢では得られない楽しい沢登りでした。詰めがもろく、少し苦労したほかは、登りやすい滝が続いています。ちょうど武尊岳の山開きを行っており、頂上で、山伏の方のパフォーマンス?も楽しみました。

反省点は2つ。

- ①日曜日の後半の天候の崩れを調べておらず、雨の用意をあまりしていませんでした。初めの予想では、土曜日が雨、日曜日が晴れだったのですが、まったく逆になってしまいました。登攀中は問題なかったのですが、下山ではかなり降られました。
- ②ちょっとお酒の量が多かった。車なので適当に持っていったのですが、飲みすぎました。

最後に、下山後の温泉で私がお財布を無くした(あとで届けがあったことがわかり、宅配便で送ってもらいます)こと、川越で皆さんを送ったあと給油で立ち寄ったガソリンスタンドで、ステアリング部のゴムパッキングが破けてグリスが飛び散っているのがわかり修理に1時間以上かかるなどのおまけもつきました。

結局千葉にもどったのは11時を過ぎており、ちょっと疲れたけれど楽しい山行でした。中村さん、運転ありがとうございました。また、お願いします。(松本)

武尊にこだわりの二人に引きずられて行きましたが、上越国境近くの山域の雰囲気が心地よくて、充分楽しめました。私としては、皆さんの足手まといにもならず幸いでした。松本さんに一言。前夜は1時位でめましょう。車でなけりゃ下りてからいくらでも飲ませたるケドね。(中村)

下山時にあんなに降られると思っていませんでした。やはり、あの林道は曰く付きですね。前は大雪ラッセルでしたから武尊神社から下は舗装道路だったとは知りませんでした。

剣が峰経由は武尊沢を正面から見ることができ、あんな所を登ったんだなと思いました。武尊にこだわる？つもりはないのですが、奥多摩や丹沢より山っぽく、かといってアルプスや上越ほど手ごわくない八ヶ岳的手ごろさを持ち、八ヶ岳のように手垢がついていない良さがあるのでしょね。

ATC なくしてお騒がせしてすみません。しかし、まだ出てきません。皆さんありがとうございました。(尾崎)

0712 奥秩父：大弛峠～北奥千丈岳・金峰山

【期日】2007. 7. 20 (金) 【参加者】橋本

今年の夏は梅雨明けが遅れ、梅雨明けと同時に猛暑が始まった。3000m 級の山に登るため徐々に高い山に登る計画を立てる。

金峰山には6月26日にミズカキ側から登ったばかりだが、オオダルミ側からの北奥千丈付近の高山植物見たさに再度同じ山に登る。塩平からの林道は閉鎖中だったが、運よく工事関係者に会い、ゲートを空けてくれた。07:37 オオダルミ発(気温 13℃)、08:07 北奥千丈岳着(2601m)、標高 1000m 位に雲海が広がり、その上は快晴で夏空、下は梅雨空である。ゴゼンタチバナ、マイヅルソウの白い花が満開に近い。カメラにおさめる。08:42 オオダルミに戻ると付近にはナナカマドが8分咲きで見事。09:30 朝日岳、シャクナゲの新芽が一斉に出ている。10:15 金峰山着(2599m)。南ア、富士山、八つ岳が美しい、写真をとり、すぐ下山。オオダルミ 11:42 帰着。所要 4 時間 05 分。帰途、柳平付近には塩水沢をせきとめ琴川ダムが完成し、ダム湖が緑に映えている。(西朋掲示板 No. 2486)

0714 八ヶ岳：観音平～編笠山・権現岳

【期日】2007. 7. 25 (水) 【参加者】橋本

小淵沢から登山口の標高 1560m の観音平に入る。濃霧で編笠は見えない。付近にはチダケサシ、シモツケ、ニッコウキスゲが咲き、ノリウツギとイタドリが満開である。07:00 観音平出発、07:33 雲海展望台着、08:07 押手川着、この付近からはハクサンシャクナゲのプロムナード。急登に入る。09:00 編笠着(2524m)。雲はとれ、権現が見える。強風のため、すぐに権現に向かう。青年小屋手前数百メートルは大石がごろごろして、この上を飛び飛びに歩く。09:18 青年小屋着。付近はイブキトラノオが群生している。権現小屋の手前のザレ場ではコマクサの群落。10:40 権現頂上(2715m)、曇り、強風のためすぐに三ツ頭方面のルートで下山開始。11:10 三ツ頭山着。11:35 木戸口着、しばらく降るとシラビソ、カラマツの樹林下に見事な「笹スベリ」のじゅうたんが延々と続く。三味線滝への四辻付近は高山植物が多く、ゆっくり多数の写真をとる。12:42 観音平帰着。所要 5 時間 42 分。(西朋掲示板 No. 2486)

0715 富士山：須走り口～お鉢めぐり・剣ヶ峰

【期日】2007. 8. 1 (金) 【参加者】橋本

本日関東地方は梅雨明け。須走り口新5合目 05:35 発、駐車場はすでに満車、気温 9℃、快晴無風。6合目瀬戸館 06:51、7合目太陽館 07:27、イタドリが満開、本7合目見晴館 07:59、吉田口からの合流点本8合目 08:40、この付近から富士山特有の強風が吹き出し、極めて歩きにくい。久須志神社 09:35 着。更に風が強まったが、時間に余裕があるのでお鉢めぐりに向かう。10:14 剣が峰 (3776m)、昼食。南アから駿河湾、奥秩父などすばらしい景色、多数の写真を撮る。降りはいつものように剣が峰から1ピッチで新5合目まで下山、12:27 帰着。所要6時間52分。

(西朋掲示板 No. 2486)

0716 八ヶ岳/WC：赤岳沢～立場川～阿弥陀南稜 P3 ルンゼ

【期日】2007. 8. 4～5 【参加者】松本, 尾崎

8/4 美しの森 7:00～8:00 地獄谷入溪～9:05 出合小屋下 沢靴装着～R～R～R～13:30 2400m 地点
～17:05 稜線～18:00 キレットからの下降点～18:15 立場川右俣幕営

思ったよりシビアな山行を強いられた。特に赤岳沢はなめていたかなど。もろい壁あり、シャワークライム、空身登攀とザック引き上げが続く。源頭では陰鬱なガスの向こうに、小さいながら雪渓が残っている。最初はガスで上が見えずびっくりするが、右下を簡単に通過できた。その後、どの窪を詰めるか迷う。正面やや右を行くと進退窮まりそうな奥壁となってルーファイ&クライミング、濡れて風に吹かれ寒い。急な草付きに手間取り、稜線には17時にやっとたどり着いた。泊まりはキレット手前から立場川右俣に下ってツェルト。



赤岳沢上部で雪渓現わる

8/5 発 5:10～55:45 二俣～5:55P3 ルンゼ入口～6:32 第二チョックストーン上水汲み～9:35 最後の
チョックストーンの上～10:02 南稜 10:30～11:00 阿弥陀岳 11:10～13:40 ごろ美濃戸口バス停

立場川の左俣と右俣の出合まで下ると、南稜 P3 ルンゼが真ん中に切れ込んでいるのが見える。出合付近は、河岸が草原状で気持ちよい。最初は長いなめ滝から始まる。2回目のチョックストーンは右壁から取り付き、微妙なバランスで流れに下ってくぐり抜ける。次の2段 20m 滝は、直登は難しいと登山体系に書いてある。右ボロ壁の悪い高巻となる。ぐずぐずの壁でどんどん足場が壊れていく。セカンドが抜けた後は足場は全部落ちてしまう。直登のほうがよかったかもしれない。この滝最後の高巻き者になるか？ 登りきったら獣道？をたどってダケカンバで懸垂したら流れに戻れた。最後のチョックストーン滝は、石の真下から左壁の堅い岩にハーケンを打って快適に乗り越す。P3 ルンゼは緊張して望んだのと好天のおかげで、楽しく快適だった。



P3 ルンゼ入口のナメ

冬に飛ばされたものか、ごみが多かったのは残念でしたが、夏最盛期の八ヶ岳ながらオリジナルルートで充実したかな、と思います。



第二チョックストーン右壁

0718 南アルプス：塩川～三伏峠～塩見岳

【期日】2007. 8. 7(火)～8(水) 【参加者】橋本

8月7日

例年8月の第1週は「一人夏山合宿」を行っている。自分の体調とスケジュールで自由に夏山を楽しめる。車を使うことにより、以下のような3山の山行が可能である。

茅野から杖突峠をこえ、国道152線を南下して、大鹿村の鹿塩温泉から登山口の塩川土場に入る。昨年くらい前までは、伊那大島からここにバスが入っていたが、鳥倉林道の整備でこちらのバスは廃止、鳥倉のルートにバスが入るようになった。したがって、塩川からの登山道も少しづつ廃道になりつつある。08:20 土場P発。ここから三伏峠までは0/10・・・10/10の表示の案内プレートが500mおきに設置されている。塩川を右岸に渡渉する地点から急登が始まる。プレート8/10付近より上は落葉がつもり、廃道の様相。10:55 豊口山分岐点着、11:22 三伏峠小屋着。時間があり、近くのお花畑に出かける。塩見岳、烏帽子岳、小河内岳が美しい。しかし、この辺り帯はシカなどが増え、水が汚染されているとのことで、水は飲めない。一昨年改築された三伏峠小屋のトイレは水洗で、太陽光による電気もあり、快適である。(小屋泊)

8月8日(水)

04:35 小屋出発。04:45 三伏山着、ヨツバシオガマ、マルバダケブキが多い。05:21 本谷山着、御岳山、乗鞍、北ア、南アの眺めはすばらしい。緩やかな降りに続く塩見小屋への登りがきつい。06:35 塩見小屋着、07:26 塩見岳(西峰3047m)着、07:35 東峰着(3052m)、快晴、360度すばらしい光景である。蝙蝠岳が真下に見える。いつか行ってみた。写真を撮り、下山開始、塩見小屋付近で短パンに履き替え、10:07 三伏峠小屋着、昼食、塩川土場P帰着12:03。所要(2日間通算)7時間28分。(西朋掲示板No. 2486)

0719 中央アルプス：木曾駒高原～木曾駒が岳

【期日】2007. 8. 10(金) 【参加者】橋本

前日、塩川から伊那経由、権兵衛街道を木曾路にでて、木曾福島の木曾駒高原に入る(泊)。高原のスキー場P 05:10 出発、正沢川の支流幸川の右岸に渡るところが林道終点である05:39着。

4 合目 05:53 着、4 合目半力水 06:19 着、5 合目 : 06:48 着、急登の連続である。カニコウモリが多い、ギンリョウソウもみかける。7 合目手前の見晴台から御岳山、乗鞍が見える。7 合目避難小屋 07:41 着。この避難小屋（無料）は中が大変きれいで、水洗トイレ、電気が設置されている。10 人は宿泊できる（水はない）。8 合目手前の山姥岩付近は雪渓が残っている。8 合目水場 08:26 着。上から高山植物監視員 3 人が下山してくる。駒ヶ岳のモレーン下部には高山植物が多く、夢中で写真におさめる。ヨツバシオガマ、キバナノコマノツメ、チングルマ、シナノオトギリなど。玉の窪小屋直下にはカラマツソウ、ヒメウスユキソウなど、山頂直下にはコマクサ、イワギキョウが咲き誇っている。駒ヶ岳山頂 09:44 着 (2956m)。快晴、南と北アルプスがすばらしい。写真をとりすぐ下山、8 合目水場で昼食、1 ピッチで木曾駒高原帰着 13:26。所要 8 時間 16 分。(西朋掲示板 No. 2486)

0720 木曾御岳山：田の原～剣ヶ峰

【期日】2007. 8. 11(土) 【参加者】橋本

今日は 66 歳の誕生日である。木曾駒高原の宿をでて、国道 19 号線を南下し、登山口の田の原に向かう。国道付近では厚い雲に覆われ、今にも雨が降りそうであったが、田の原に向かう登山道路を登る頃には雲が晴れ、快晴となった。田の原 P08:26 発、王滝頂上が見えるこのコースは、よく整備された道が続くが今日は特に暑い。低い樹林帯を抜けるとやっと少し涼しくなる。火山灰の斜面にはイタドリとオンタデが花盛り。王滝頂上 09:51 着、剣が峰 10:10 着 (3067m)。奥の院 10:45、昼食、田の原帰着 12:04。所要 3 時間 38 分。スキー場近くは斜面に高山植物が多く、写真におさめる。(西朋掲示板 No. 2486)

0721 裏岩手/WC【夏山合宿】：葛根田川北ノ又沢～大深沢東ノ又沢

【期日】2007. 8. 12～14 【参加者】加藤，尾崎，島田，中山

- 8/12 雫石駅から滝ノ上温泉地熱発電所までタクシー～入渓点 7:30～R～R～11:29 葛根田大滝下
～12:55 滝ノ又谷出合の上流～14:00 幕営
- 8/13 発 6:00～R～10:08 大場谷湿原・八瀬森山荘～R～12:40 大深沢本流～14:24 北の又・東の又
出合～16:00 1130m 地点幕営
- 8/14 発 4:56～6:01 1252m 三俣～7:30 稜線～8:40 大深岳～9:15 源太岳 9:38～R～11:24 松川温泉

この山行は自分にとって初めての沢登りであった。参加者は加藤さん(35期)、尾崎さん(47期)、島田さん(53期)、中山(57期)の4人である。

加藤さんを除く3人は前日夜に盛岡に到着し駅前で野宿。12日早朝に合流して雫石まで移動した。葛根田川沿いの林道をしばらく行くが、沢へ下りるまでにやや難儀した記憶がある。河原で沢靴に履き替えて水の中へ。高校時代に沢登りを経験した同期の友人から「夏の冷たい水が気持ち良い」という話は聞いていたが、まさにその通りだ。これまで(土の上を歩く)夏山では暑さが苦手だったため、水に囲まれているだけで心地よいものだった。水を飲み放題というのも実にありがたい。ところどころで初めて経験する水流の強さに戸惑うものの、着実に前進していった。1泊目は北ノ又沢に幕営。豊富な水に囲まれてゆったりと夕食を迎えられるのも新鮮であった。

多くの滝は巻いて越えたが、一度比較的大きな滝を直登する機会があった。尾崎さんが先頭でロープを張っていく。自分は2番手。岩場の経験は皆無といってよく(日和田山岩トレ1回)、ここだけは危機感を覚えた。足場もろくに考えずに進んだ結果、水流を頭からかぶったまま岩にへばりついて、文字通り「進退きわまって」硬直する結果になってしまった記憶がある。

葛根田の藪こぎは比較的(?)短時間で済んだか。湿地帯をしばらく歩いて、関東沢の下りに取り掛かる。源流部については記憶が定かでないが、葛根田川に比べ大きな石を飛び越えて歩く場面が多くなり、下りで相当消耗してしまった。2日目は開けた河原に幕営し、盛大に焚き火をした。

3日目、最終日は大深沢を登る。個人的には大分沢歩きになれたと感じており、本山行で2度目のロープを用いた直登では、最初よりはスムーズに登ることができた。しかし当然ながら疲労も蓄積していたようで、2度目の藪こぎは相当こたえた。稜線に出て格段に歩きやすくなったものの、ほぼ思考停止状態で大深岳に登頂。その後も無心で下り、松川温泉に下山した。

初の沢登りを終えた感想としては、普通の斜面を歩く分には土の上よりも格段に爽快だった。滝を楽しむようになるまでにはまだしばらく時間がかかりそうである。自分から藪こぎを欲する時は来るのだろうか。それにしても水の存在は、歩行中の景色のイメージをずいぶんと変えてくれるものだった。(中山)

=====

- ・ 下流部の沢歩きは増水すると渡渉が大変そう。ブナに抱かれ雰囲気は和賀に似ていた。
- ・ 幕営場所は滝ノ又沢出合いなど中流部までは豊富だが上流部はあまり無かった。
- ・ 最上流部の 20m 滝はあえて直登した。左から取り付きバンドをシャワークライムで右へ、最上部は左岸のヤブに入った。高度感はあるが、難しくは無い。
- ・ 大場谷地湿原から大深沢への下降は山荘より東の湿原内に踏み跡があった。人気ルートなので湿原への踏み込みはやはり問題になりそう。
- ・ 大深沢大滝は真ん中の灌木のあるところをロープを使って登った。
- ・ 大滝の上から東ノ又沢まで、見事なナメ。
- ・ 東ノ又沢入り口の東ノ又・北ノ又出合い、東ノ又 1252m 三俣に良い幕営地あり。
- ・ 山のスケールが深く、エスケープがききにくい点で厳しさがあると思う。

=====

0722 八ヶ岳：小淵沢～西岳・権現岳・編笠山

【期日】2007. 8. 18～19 【参加者】山野, 他 26

権現、編笠に行きました。小淵沢、西岳、青年小屋泊まり。権現往復、編笠、小淵沢。六つ星山の会という視覚障害者の山の会です。総勢 27 名。無事終了しました。

1 日目は富士見高原のゴルフ練習場から西岳経由で青年小屋まで。暑い日でしたがみなさんゆっくり歩いていました。10 時半発、小屋に 15 時半着。途中の不動水、乙女の泉の水が冷たくて美味しかったです。4 名が権現まで偵察に。途中鎖場が 5 箇所ありましたが問題ないだろうと判断。

翌日は快晴でした。6 時 10 分小屋発で空身で 2 時間で頂上までいきました。北アルプスから中央、南アルプスと快晴の景色を楽しみました。下は雲海でした。鎖場は登りも下りも時間さえかければ問題なく通過できました。青年小屋から編笠山は大きな岩がごろごろしたところで、全盲の人は非常に苦労していましたが時間をかけてゆっくり通過しました。編笠山からのくんだりも最初はゴロゴロの岩でした。15 時にはもとのゴルフ場へ下山して鹿の湯に入って帰りました。久しぶりの山で少ししんどかったですがゆっくりだったので大丈夫でした。

六つ星山の会（視覚障害者と晴眼者が同等の立場で互いに助けあい山に登る会）の HP を紹介します。

<http://www.mutsuboshi.net/>

六つ星山の会での権現岳、編笠山登山の報告もでています。

<http://www.mutsuboshi.net/report/r070818.htm>

視覚障害者と山に登るときのサポートの方法についても書いてあります。

「サポートBOOK」<http://www.mutsuboshi.net/pdf/saport-book.pdf>

「サポートの心得」<http://www.mutsuboshi.net/pdf/support-howto.pdf>

参考までに。

0723 西朋祭 & 0724 北八ヶ岳/WC : 根石岳白薙沢

【期日】2007. 8. 25~26 【参加者】白薙沢：青谷，松本

上野さん、お世話ありがとうございました。写真等、またアップしてください。

佐藤先生の別荘で、少人数ながら、近所の別荘仲間の方も一緒になって（もちろん4期の松田さんも）、楽しいひととき・BBQでした。

翌日、松本と一緒に根石岳西面の白薙沢を登ってきました。

大滝を有するすっきりした沢で、易しいもののうれしい一本でした。（写真 up しておきます）かつて、冬季に隣の河原木場沢に行ってます。戻った後、佐藤先生とっておきの温泉につかってきました。

蓼科は遠く、二の足を踏んだ人も多いとは想像できますが、山のコースをあらかじめ提示できれば、いろいろ考えられたかもしれませんね。（青谷）

幹事の上野さん、場所を提供いただいた佐藤先生、お世話になりました。

佐藤先生の別荘は居心地良く、あんな別荘ひとつあれば豊かな老後をごせるなと思いましたが、でも今の家の庭ももてあましている現状を考えると無理でしょう。私にはテントのほうが似合っています。

期せずして今年の夏は、3本の八ヶ岳の沢に続けて登ることになってしまいました。考えてみると八ヶ岳の夏の沢は初めてだったのですが、3本とも雰囲気が異なり、楽しめました。今回の白薙沢もとりたてて見所があったわけではないのですが、まったく期待していったのではないのがよかったです。

久しぶりの北八ヶ岳の高山の雰囲気もたっぷり楽しみました。（松本）



0725 八ヶ岳：白樺高原～蓼科山

【期日】2007. 8. 27 (月) 【参加者】橋本, 他

西朋祭の会場が蓼科山であったが、この日は友人の結婚祝いの蓼科登山で、以前から決まっていたので、西朋祭を欠席させて戴いた。高齢者が多いため、御泉水から登り始め (10:12)、頂上 12:32 着 (2530m)、昼食、下山の楽な大河原に降った 15:38。所要 5 時間 26 分。やはり高山植物を満喫した。春先や秋の紅葉時期もきれいなところらしい。

年をとり、握力の低下や体のバランスが悪くなるととても岩登りをしようと言う気がなくなる。また、若手の報告には沢登りが盛んなようですが、カメラが水に濡れることを心配して沢登りも遠慮している。残るは尾根歩きということになるが、現役の時に登れなかった山が多く残っており、これからも体力が続く限り続けてゆきます。

0727 北アルプス/VR：北鎌尾根

【期日】2007. 9. 22～24 【参加者】尾崎, 他 1

昨年と比べ雪は無く、北鎌に行く人も多かったです。槍の頂上はもっと混んでいましたが。。。

いつもの合戦尾根は 3 時間で稜線へ。天気は雲は多いがまずまずであり、登ってしまえば稜線漫歩で大天井へ。大天井のトラバースで、オコジョが出迎えてくれる。岩陰から出たり入ったり、無垢な姿を数分間見せてくれた。

大天井の小屋に 1 時前。ちょっと長く休む。貧乏沢の下降点は牛首山を巻いた最初のコルで、印もある。貧乏沢の下りは踏み跡は左岸に明瞭であるが、所々岩雪崩を起こしそうになる所もある。貧乏沢は天上沢出合直前で潤れ沢となり、水量豊富な天上沢も、北鎌沢出合の広河原では完全に伏流である。夕方までにテント村ができるほどとなり、明日の北鎌は混雑必至。たしかに 10 月連休に降雪のリスクを背負うより、9 月の方が登りやすいだろう。

2 日目、ようやく他のテントが起きだす 3 時半発を敢行。電灯でのルーファイはそれなりに神経を使う。とくに北鎌左俣に入らないこと。北鎌沢右俣に入っても真っ暗なので、小さな枝沢に入らないようにする。最後の二俣は、右のガレっぼい沢が本流とみてそれを進む。前回行ったのは左のカール状お花畑の沢である。少々ガレているが、右の微小な尾根に上がれば踏み跡をすぐに北鎌のコルである。人の気配通り、幕営者有り。お花畑カールからの踏み跡が合わさったところにももう一張り。

独標手前の天狗の腰掛けまでいっきに登る。独標トラバース入口の一步は少々いやらしいが残置 Fix あり。天候さえ良ければ、技術的にまったく問題ないのだが、やはり緊張するルートである。その後の岩稜はルートファインディングが大事で、それ次第でロープの使用・不使用や所要時間も変わりそうである。それは、時によっては大きな問題となるだろう。北鎌とはそういうルートなのだろうと思う。だが、ほとんど稜線沿いに行ける。岩登りとしての難しさはほとんど無いのだが、やはり頂上に抜けるルート、エスケープの効かない長時間行動のコースである。軽量化や判断が問われるクオリティの高い山行が出来るルートだと思う。2 回目なのでそれほどの感動はなかったが、何度来てもいい所だ。高瀬ダムからとか、積雪期とか、よりランクの高い課題も残されている。北鎌尾根はちゃんと取り組まないと来れない所だ。



北鎌独標より槍ヶ岳を望む

北鎌平から頂上はかなり急傾斜に見えるが、難しくはない。1 時間で大混雑の槍頂上に到着した。北鎌尾根からトラバース気味に小槍と孫槍(曾孫槍?)の間に突き上げ、難しい小槍の登りをカットし、槍西稜(の美味しいところ)を登る。そこそこ現実的だろうか？

3 日目は紅葉を愛でながら、ババ平から上高地へ。

0728 北アルプス/VR : 奥穂高岳南稜

【期日】 2007. 10. 7~8 【参加者】 尾崎

雪崩で崩壊してしまった岳沢ヒュッテの上部で一般道を離れ、岳沢本流沿いに入る。奥に取り付きとなる辺りが見えているはずだが、何処に登るのかまだわからない。右岸から顕著な枝沢が入るところでこれに下り給水する。本流はシュルンドをざっくり開けた雪渓で、表面はカチカチ。アイゼン+バイルで雪渓を左側から越え、シュルンド内に降りてから次の雪渓に乗り、大滝右岸にたどり着く。

左のブッシュへ入る踏み跡のようなものがある。が、トリコニー岩峰が高く映えていることもあり、これを目指して涸れ滝に取り付いてみる。けっこう立っていて、古典ルートとしては無理がありそうだ。やはり先の踏み跡に入ると、不明瞭だが続いている。途中には岩の乗り越しや木の枝頼りでリッジ状を行ったりで、ルートを読む目が求められる。ベニバナイチゴが実る斜面に入ると踏み跡は消えた。地形に従って適当に尾根上を登る。

トリコニー核心部はI峰の登り。そこそこ立っていて高度感満点だが、ホールドスタンスはしっかりしてノーロープで越す。積雪期は右から巻くこともできそうだ。トリコニーIの頂上で休憩。岳沢の奥壁から明神主稜、奥穂ジャンダルムに続くコブ尾根や畳岩が迫力がある。トリコニーIの下りは少々バランスを要する。トリコニーIIIは右側を通過して核心部は過ぎたが、まだ微妙なギャップの下りなどで気を抜けない。岩礫の斜面を登って南稜の頭に至る。縦走路は歩きやすい。

奥穂直登ルンゼは、残雪期の涸沢への直滑降ルート。そのうち行けるか？ 振り返ってジャンダルム飛驒尾根もそのうち行きたいルートだ。北の空には笠雲かレンズ雲が出ている。今日中に涸沢まで下る。

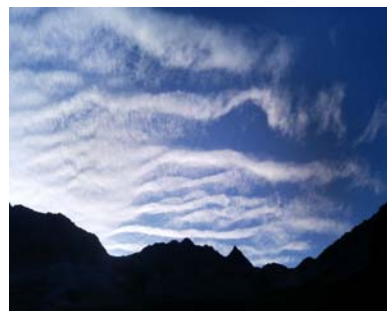
涸沢槍から縞状の雲が流れ、前穂の吊尾根には7色のクラゲ雲が逆光の稜線とコントラストを成す。しかし明日の悪天を物語っているのか？ 観天望気は要勉強。やはり秋に、北岳バットレス東側にクラゲ状の雲を見たことがある。その午後もかなり降った。山は勉強することが多い。翌日は大雨の一日、黙々と上高地まで歩くのみ。



雪渓を詰める



ジャンダルム コブ尾根



悪天を語る？

0729 富士山：須走り口～剣ヶ峰

【期日】2007. 10. 12 (金) 【参加者】橋本

9月に入ると急速に身边が多忙になり、山に入る機会が少なくなった。逆に言えば、日常生活が多忙になると、気がついたときには山行が忘れられてしまう。山行のたびに、山に入れることはすばらしいことなのだと実感する。

初冠雪の丁度1週間前に富士山に登る。今年2回目の登頂である。夏の喧騒と打って変わって、富士山は人の気配は全くなく、時々襲来する強風のなか、静かにナナカマドの赤い実、ダケカンバ、オンタデの黄葉を楽しむ。朝は須走口新5合目で7℃、7:14出発。6合目8:04着。丹沢は雲海の下、雲取山の石尾根から西に伸びる奥秩父連山が雲の上に浮かぶ。7合目太陽館9:17着、8合目江戸屋10:14着、山頂久須志神社11:29着、ここまで登山者は皆無。風は比較的弱い。軽食をとり、写真撮影をした。暫くして、イタリア人7～8人のパーティーが登ってきた。そのうちの1人はハダシで登っており、そのことを自慢していた。キリマンジャロもハダシで登ったとのこと。下山は人がいないので、登山道を使い、新5合目帰着13:57。所要6時間43分。(西朋掲示板 No. 2545)

0732 中央アルプス：池山尾根～空木岳～檜尾岳

【期日】2007. 11. 23～25 【参加者】松本，尾崎

前夜，松本さんの車で駒ヶ根の登山口まで入り，未明に就寝。翌朝 9 時に歩き始める。稜線は雪があるがワカンは不要と判断。旧池山小屋の水場で給水。池山のトラバース道のほか，2 万 5 千図記載とは少し違って池山頂上への遊歩道も出来ているらしい。子供連れらしい声も上から聞こえる。池山小屋は，池山との鞍部に立派に建て替えられて，さらにホースで水場も設置されている。この辺りから北面で雪を踏む。右手奥に宝剣岳が見渡せるが，まだ中腹という感じ。

登り始めてから約 4 時間でやっと本尾根に乗る。長い尾根だ。大地獄，小地獄のハシゴ場は陽が当たるのか雪はないが，積雪期は神経を使いそうである。迷い尾根付近のトラバースは日陰になりやすいのか，くるぶし下程度の雪がある。それなりの急斜面が続き，冬季は要注意箇所になりそうである。迷い尾根道標から尾根上に進むと聞いたこともある。

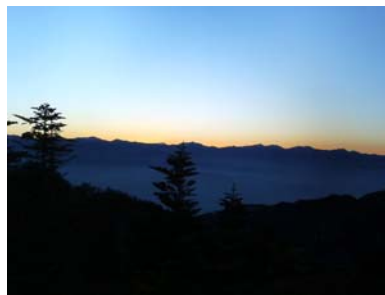
2400m 過ぎに着くころはすでに日も傾いてきて，早く小屋に着きたい気分になる。空木平分岐までは北面となってラッセル。分岐点で森林限界となり，満月に照らされた黄昏の南アルプスが見渡せる。積雪量によってはカールに入りたくなかったが，この程度なら空木平避難小屋が快適そうだ。10 年ほど前に来た記憶ではここからすぐのつもりが，微妙な上下とラッセルもあって案外長い。しかし小屋はきれいで貸し切り。夜は冷えたが小屋テンで快適な一夜を過ごす。

そのせいか翌日は寝坊から始まった。1 時間の寝坊で，昨夜もくろんだ今日中に下って河原で焚き火，は怪しくなる。加えて頂上まではモナカ雪のツボ足歩行に苦しめられ，2 時間を要する。途中，越百山からという単独の男性 1 名，頂上で木曾殿越しから往復の登山者 2-3 名と出会う。

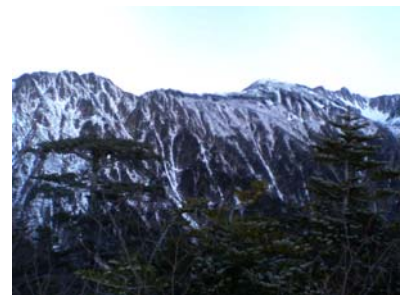
空木の下りはアイゼン装着で 1 時間。上部は岩・雪・氷のトリプルミックスで少々いやらしい部分もある。檜尾岳までの縦走は，足首上程度の積雪で夏時間の 1.5 倍以上を要する。ピークごとに忠実にレストを取っていく感じのペース。熊沢岳の下降などはちょっとした岩場もミックス



振り返り見る空木岳



明けゆく南アルプス



初冬の山

となって注意を要したが、むしろ良いアクセントとなる。北西風が強く吹き付ける中、三ノ沢岳から続く独標蕎麦粒岳の尾根が気になったり、振り返る空木岳のでかさに驚いたり、初冬の好展望を満喫する一日だった。檜尾岳まで4分の3くらい来たところで、中退したのか、トレースが現れた。木曾殿越しから4つ目のピークを過ぎたところで最後のレスト。すでに2時を回っている。目の前の檜尾岳は木曾駒ロープウェイから一日の圏内であり、北から縦走パーティが来るのが見える。

檜尾岳避難小屋は、頂上東肩に建つ丸屋根の快適な小屋だった。入口は2重戸で、中は暖かい。壁の断熱も良いのだろう。少し麓寄りに、水場もあるようだ。我々が到着した時には無人だった避難小屋だが、夜までには20人ほどの満員となる。

3日目、まだみんな寝ているところに朝食を済ませ、檜尾尾根の下降に入る。月明かりでじゅうぶん歩けた。覚めやらぬ南アルプスを曙空に望み、一步一步雪を踏んで降りていく。まだ気持ちは冬に追いつかないが、それはなにか心が引き締まり、そして山の喜びをひしひしと感じさせるものであった。

ケニア：キリマジャロ

【期日】2007.12.6~15 【参加者】小川, 他2

山から遠ざかって久しいのですが、何を思ったか65才に成ったのを機に、残った体力でどこまで登れるか試したくなりました。

まずは富士山よりも高い山に登ろうと2007年度はキナバル山(4095m マレーシア・ボルネオ島), 大姑娘山(5025m 中国・四川省), キリマジャロ(5895m タンザニア), カラパタール(5,450m ネパール)への登頂を企てました。このうちキリマジャロに関して簡単に報告します。(小川建吾, 12期)

12月6日,7日

関空からエミレーツ航空機でドバイ経由でケニアのナイロビへ。真冬の日本から暑い日差しでのケニアに到着。空港にはあらかじめ手配しておいた現地旅行社のスタッフの出迎えがあり、案内されてホテルへ。途中スーパーマーケットで行動中に必要な水を6リットル購入する。

12月8日

ナイロビから路線バスで国境を越えタンザニアのアルーシャへ。アルーシャからは旅行社が手配してくれた車で登山口のマラングのロッジに到着。夕方ロッジに登山ガイドのアロン氏が現れ、ほっとする。翌日からの行動を打ち合わせる。

12月9日 マラング・ゲート(1,550m)→マンダラ・ハット(2,720m)

登山口のマラング・ゲートで入山手続きをすませ、ガイド2名、ポーター兼コック3名とともにマンダラ・ハットを目指す。熱帯雨林の中の泥んこ道を歩く。時折激しい雨に会う。約4時間の歩行。本格的な登山シーズン前なので小屋は空いていた。ロッジはどれも4人用で、そのうちの一つを我々3名で占有した。

12月10日 マンダラ・ハット(2,720m)→ホロンボ・ハット(3,658m)

8時すぎに出発。高度とともに木々は低くなり、視界が広がる。前衛峰のマウンジにつづいてキリマジャロも見えはじめ、元気が湧いてくる。天気は曇り、時々ぱらぱら。高度上昇にともない水分補給を意識的に行う。途中何度か急病人を降ろすストレッチャーをすれ違う。

2時頃ホロンボ・ハット着。高度にともなう障害は特に感じられず。到着後少し高い地点まで散歩し、体をならす。夕焼けがきれいだった。

12月11日 ホロンボ・ハット(3,658m) --> ギボ・ハット(4,710m)

高度順応のため、このホロンボ・ハットに連泊する6日間コースが標準的だが、我々は1泊のみでギボ・ハットを目指す、ややきつい5日間コース。ところが同行のF氏が「昨夜から頭痛がひどく、もうこれ以上登れない」とのことで、一人ホロンボ・ハットに残ることになった。このため我々2名とガイド2名で出発。すぐにポーターたちに追い越された。途中4,000mを越えた地点で同行のK氏の歩行がおぼつかなくなる。結局チーフガイドのアロン氏が同伴して下山することになった。私はアシスタントガイドの若いメシュエ君と2人でギボ・ハットを目指す。サドルとよばれる砂漠のような平原は印象的。2時頃ギボ・ハット着。心配した高山病も感じられず、到着後散歩をし、体調を整える。

12月12日 ギボ・ハット(4,710m) --> キリマンジャロ・ウフルピーク(5,895m) --> マンダラ・ハット(3,658m)

短い睡眠のあと、深夜12時15分頃ギボ・ハットを出発。すでに降り始めた雪で一面真っ白。時折風も強くなる。高度とともに歩行が遅くなる。メシュエ君にゆっくり歩くよう頼んだが、それでもついて行くのに必死。先行するスイス人グループのヘッドランプが頭上高く見え、斜面の傾斜がかなりあることが分る。5,500mを越えたあたりからは全行程中で一番苦しかった登りだった。呼吸を整えるため、ときどき立ち止まることもしばしばあった。雪がダンゴ状に靴底につくので、ときどき蹴落とす必要があった。

5時、富士山でいえばお鉢に相当する地点ギルマンズポイント(5,685m)の到着。想定していた時間より1時間早かった。依然として雪は止まず、まだ真っ暗。温かい紅茶を飲み、元気回復。5時半ウフルピークを目指して出発する。ウフルまでは傾斜はないが、火口にそったともかく長い道のり。次第に明るくなる。それと思わしきピークに幾度となく騙されながら7時過ぎにアフリカ大陸の最高地点のウフルピーク(5,895m)にやっと到着。残念ながら雪で景色は見えぬ。それでも写真を撮ったり、記念に石を雪から掘り出したりして約30分間滞在する。天候は一向に良くならず。霧の向こうにかすかに氷河が見えただけ。帰路はひたすら降りつづけたが、ともかく長い。

10時すぎにギボ・ハットに戻る。仮眠、昼食をすませ、12時にギボ・ハットを出発。高度が低くなったせいか、快調に歩き15時前にホロンボ・ハットに到着。同行者2名はすでに下山したとのことで、ロッジを独り占めし、夕食後爆睡する。

12月13日 ギボ・ハット(4,710m) --> マランゲルート(1,550m) --> アルーシャ

朝早く快適な目覚め。前日とはうって変わって好転、朝日に輝くキリマンジャロの写真を撮る。朝食後、いっきにマランゲゲートを目指し下山。ゲートではウフルピーク登頂者名簿にサインし、証明書ももらう。名簿に書かれた年齢を調べたら、20代、30代が圧倒的に多く、さすがに60代は少なかった。タンザニアの避暑地アルーシャで先に下山したF氏、K氏と合流する。1日早く下山し、サファリを楽しんだとのこと。

12 日 14 日, 15 日

アルーシャから来たときと同じように路線バスでケニア国境へ。国境で、ナイロビの旅行社からの出迎えがあり、専用車で空港へ。ナイロビ → ドバイ → 関空 と往路の逆をたどり帰国。

感想：同行した F 氏も K 氏も日本 300 名山を達成間近のベテランで、体力的には決して私に劣らない方々でした。その 2 人が途中で下山せざるを得なくなったのは、高所の経験の少なさにあったように思います。私の場合はキリマジャロ以前に、キナバル、大姑娘山と 4,000m, 5,000m クラスの山で体験をつんだことが生かされたように思います。また登頂をより確実にするには、私のような 5 日間コースではなく、途中ホロンボ・ハットで高度順応日を入れる 6 日間コースをお勧めします。

0734 奥秩父：広瀬～雁坂峠

【期日】2007. 12. 18 (火) 【参加者】橋本

当初は金峰山に行くつもりだったが、オオダルミへの焼山林道は塩平、柳平とも閉鎖で断念。急遽雁坂嶺に変更。登山口の広瀬は-4℃。8:02 出発。雪はまだ凍結しておらず、アイゼンなしでも歩ける。沓切沢橋 8:46 着。ここから徐々に急登に入る。途中で凍結した沢を 3 回渡渉するが、転倒注意。鮎沢右岸の急登に入る標高 1800m 位からやっと太陽が差し込み始めた。積雪は 20-50cm でトレールも比較的はつきりしており、ラッセル不要。雪煙を上げている富士山が美しい。10:52 雁坂峠着 (2082m)、甲府盆地と秩父盆地が望める。軽食をとっていると西方に厚い雪雲、すぐに雪が降り出し、西よりの寒風が強まり、気温が急降下。予定の雁坂嶺への登頂は断念、下山に取り掛かる。沓切沢橋 12:10、広瀬帰着 12:50。所要 4 時間 48 分。登り 3 ピッチ、下り 1 ピッチ。途中ナメラ沢への取り付き点の標識がはっきり表示された。(西朋掲示板 No. 2545)

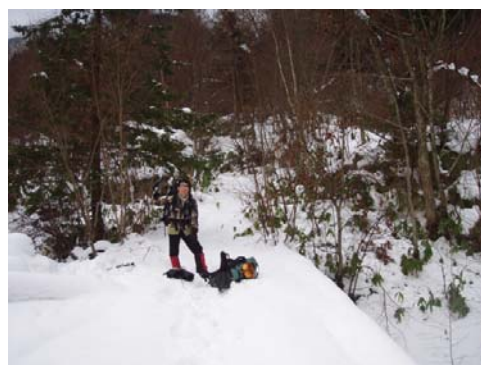
0737 北アルプス/VR：餓鬼岳釣魚尾根（敗退）

【期日】2007.12.29～31 【参加者】松本，尾崎

すでに1週間前から、南岸低気圧通過の後、年末年始に強烈な寒気の流入が察知できていた。これはきついなという印象で、28日夜のムーンライト信州で大町に向かう。予報通り、29日は雨、その夜快晴（擬似晴天か）、30日以降降雪となる。行動は、29日1660mで幕営、30日1900m付近まで登高後、その日のうちに林道まで下り、31日の朝下山となる。本格的な寒波が来る前の撤退で、気温としては寒くなかった。

結局、この山行は冬季餓鬼岳の登高手段として釣魚尾根の偵察、という一定の意味はあった。取り付きは急だったが、夏道合流点までは悪場はないようだ。この尾根は過去には整備されていたルートであり、地形的にも無理がない。踏み跡はごく微かあった。しかし、夏道合流後の急斜面（百曲がり）までは達しなかった。そこは地形図を見る限り、雪が多いと雪崩やルートファインディングに気を使いそうな点に懸念が残った。

下山中に、なんと5-6人パーティに出会う。互いにびっくりだった。トレースのお礼をもらうが、下降は予想通り、トレースがないとわかりにくい分岐も少なくない。林道まで降りてくる頃には雪は本降りとなり、登高を続けた彼らがどうしているか気になった。降雨後の大雪で、かなり積雪は不安定となっても可い。うらやましさと心配が合い半ばする。自分たちもこの状況下によく行ったと思う。松本さんありがとうございました。（尾崎）



雨の取付点にて



1770mあたりで見つけた岩小屋

今年の冬山は、短いものの充実していました。入山日は、雨。かなりぬれてどうなることかと心配しましたが、その後は快適に1900mまで達することができました。この天気では、よく行けたなという感じです。時間的にはもう少し上までいけたのですが、気力が続きませんでした。

結果的には、餓鬼の周辺の探索ということになりましたが、いろいろと面白そうな、ルートが考えられます。特に餓鬼と燕の間の、ケンズリはぜひ通過してみたい課題として残りました。他の方もいっしょに行きましょう。（松本）

0736 上越：宝台樹スキー場

【期日】2007.12.28～31 【参加者】上遠野，山野

結局は上遠野さんと2人でした。

28日は快速アーバンや普通列車を乗り継いで水上へ行き、バスで上の原入り口へ。スキー場直通のバスはなくなったが、無料の出迎えバスがあるようだ。

上遠野さんの山小屋まで15分徒歩。

すぐにスキーとスキー靴を借りて徒歩で宝台樹スキー場へ20分。スキー場は雪は50cmと書いていたが所々土が出ていた。

2時からのんびりと下の方で滑る。遅い昼食をとりながら4時半まですべる。途中少し雨が降りだした。

30日は朝9時から2時半まで昼食以外は休みなく、のんびりといろいろなゲレンデで滑る。時々晴れ間が出ていた。2時半で終わり、山小屋経由宝川温泉まで徒歩で行く。小屋から30分。4時過ぎからは日帰り入浴が千円。露天風呂がたくさんあり雪を見ながらはしごした。混浴でカップルが数組入浴していた。帰りは半分バスを使った。6時過ぎに上遠野さんが犬カンクロウと車でこられた。夜は星が見える天気です雪はほとんど降らなかった。

31日は雪が降っていたが、午前中のみ滑り、小屋で昼食後薪割りや小屋掃除をし、3時前に出発。途中水上の先の公共温泉で上遠野さんの車のポリタンクに温泉水を入れ(300円?) 関越高速で松山まで。5時過ぎに降りて100km以下でETCを使うと高速代が半額だった。後は圏央道を少し使いながら16号、新青梅街道、府中街道川崎街道などを使い、田園都市線の駅まで送ってもらった。1月1日、2日は雪が降った様で2日朝の積雪は90cmになっていた。

また2月、3月に行きたいのでどなたか一緒に行く人はいませんか？

丹沢：戸沢～塔ノ岳・丹沢山

【期日】2008.1.2（水） 【参加者】橋本

毎年体力の衰えを感じながらも、近くの山を主に単独で登っています。中高年の単独登山者が最も遭難の可能性が高いことを充分認識し、対象の山選び、季節やスケジュールに充分弾力性をもたせて楽しみながら登ることにしています。2007年に比べ、2008年は更に身边多事となる予定ですが、暖冬との長期気候変動にもかかわらず、今年は積雪が多く、冬季に登れる山の範囲も狭まりました。

毎年正月2日に今年1年の山行の安全を祈願して塔ノ岳に登っている。戸沢山荘前から入る(06:42)。気温-4℃、積雪はなく、スパッツのみ着用して書策新道を登る。本谷を横断する地点から急登が始まり、標高1000m付近に来ると展望が開け、新春の太陽がまぶしい。書策小屋着(08:16)、表尾根は凍結しているが積雪は殆どない。塔ノ岳着(8:58)。富士山、南ア、房総半島、筑波山まで見える。例年、尊仏山荘裏の北斜面の下降地点は雪が多いが、今年は無雪。暖冬の影響か。墨染めの衣を着た修行僧に会う。丹沢山着(10:00)(1567m)。帰途は塔ノ岳から大倉尾根を下り、途中から天神尾根経由で戸沢山荘帰着(12:01)。所要5:36(西朋掲示板 No.2582)

丹沢：箒沢～檜洞丸

【期日】2008.1.9（水） 【参加者】橋本

明るくなるのを待って西丹沢6:40出発、気温+3℃、暖かい。ゴーラ沢出合い着(7:19)、展望園地着(7:58)。例年、この展望園地付近からルートは積雪があり凍結し、アイゼンが必要だが、今年は無雪。付近のブナとミズナラ林は葉を落とし檜洞丸が見える。石棚尾根の北面にわずかに積雪あり。稜線着(8:49)、檜洞丸着(9:01)(1601m)。山頂も例年になく殆ど雪はない。霞の中にポツカリと富士山。すぐ前にシカ3頭。山頂直下の大きなブナを写真に収める。すぐに下山開始。ゴーラ沢の先、東沢の南斜面にはミツマタの白い頭状花序が美しい。10:50西丹沢帰着。所要4:10(西朋掲示板 No.2582)

0739 桂秋/VR：鶴島御前山東南東稜・北稜

【期日】2008. 1. 20 【参加者】中村，青谷，尾崎

心配した天候も，ほぼ一日晴れ渡り，暖かい日和の近郊岩ハイクでした。

行動は，鶴島御前山東南東稜～一般道下降～北稜（ダイレクト稜目指すがよくわからず。）～栃穴御前山～栃穴集落から小道を抜けて上野原へ。

東南東稜の最初，かぶり気味のクラックでザイルを出しましたが，後はお助け紐でじゅうぶんでした。岩はしばらく登っていなかったので，私自身，体がいまいち。日和田山にまた行く方が良さそうです。

山頂北側に広がるゴルフ場の切り開きはちょっと残念でしたが，すぐ足元に広がる町並みがミニチュアのおもしろく，広がる低山の展望もよく，心和む楽しい一日でした。

松本さんが参加できず残念でしたが，中村さん，青谷さん，上野さんどうもありがとうございます。また中村さん最後はご馳走さまでした，下山後は現実が戻ってきて・・・あれこれとつい考えてしまうのですが，美味しかったです。（尾崎）

青谷、尾崎両氏には全く不足だったと思います（私でさえ物足りず？）が、帰りの一杯も含めてお付き合い頂きありがとうございました。握力のなさに呆然としました。ザイル捌きも全然忘れていました。ゲレンデで馴らさんといかんでしょね。（中村）

丹沢：用木沢出合～大室山～加入道山

【期日】2008. 1. 27 (日) 【参加者】橋本

一昨年と同じ頃に犬越路から登ったときは、大室山山頂より加入道方面へのルートが雪が深く、引き返した。

用木沢出合い (6:54) 出発 (-6℃)、先日降った雪が凍結している。用木沢を2回ほど渡渉したところでアイゼン着用。犬越路直下のササヤブでは降雪のためササがルートを覆い、ここをクリヤーするのに時間がかかった。犬越路着 (7:54)。ここから大室分岐点までは積雪 20-50cm だが、トレールがはっきりしており、ラッセル不要。9:32 大室山着 (1588m)。大室分岐点から前大室にかけては急下降で積雪は 50cm 位で慎重に歩く。加入道山 (10:49) 着、ずっと積雪は 30cm 内外だが、歩行に問題ない。白石峠 11:01 着。ここから、モロクボ方面もトレールあり。12:03 用木沢出合い帰着。 所要 5:07 (西朋掲示板 No. 2582)

道志：山伏峠～今倉山

【期日】2008. 2. 8 (金) 【参加者】橋本

御正体山に行くつもりで、道志溪谷の山伏峠に向かう。山伏トンネルの出入り口付近に2ヶ所の登山口があるが、いずれも深い雪で (-11℃) トレールなく、ラッセルに自信がないため断念。近くの今倉山 (1470m) に急遽変更、道坂トンネルに向かう。道坂トンネル出口にある登山口 7:24 出発 (-7℃)。ここも雪が多く、登山口よりアイゼン着用。2月3日に大雪があったか。トレールはある。この山は標高は低い、急登の連続で、標高差 450m を約1時間で登らせる。8:24 今倉山着、登山口帰着 9:09。4本爪の簡易アイゼンでは多様な雪質のあるルートでは若干歩き難い。8本爪が無難。所要 1:45。(西朋掲示板 No. 2582)

0740 上州武尊山/VR：獅子ヶ鼻山～剣ヶ峰～武尊山

【期日】2008.2.10～11 【参加者】松本，岡田，尾崎

初日は玉原スキー場のリフトに乗せてもらえずスキー場を歩くところから始まる。ゲレンデ上端からは深いラッセル，吹雪，雪庇の崩壊を見るなどなかなか精神的にきつい登りであった。獅子ヶ鼻山の懸垂地点の手前は雪庇が張り出し吹きさらしの細い稜線である。すでに16時を回っているため，少し戻って灌木のある斜面を切って幕営。夕方氷点下10度ほど。

翌日は良く晴れ，見慣れないアングルから奥利根の山々の展望を楽しむ。すぐに核心部のキノコ雪稜になっていて，そこから北面への懸垂下降は高度差がある。50m ロープでは長さに不安が残ったが，ぎりぎり傾斜は緩みそうなので降りてみることにする。

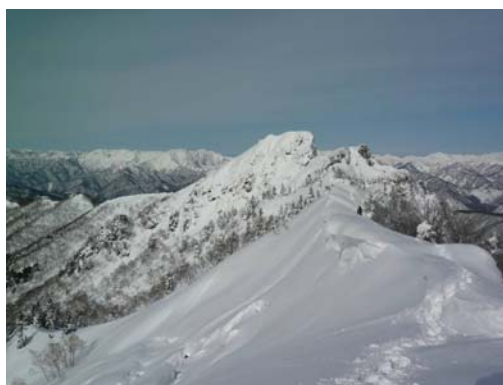
私がトップで降りていくことになったので，仮固定～登り返しの可能性も考えて，念のため，左のレググループにカラビナを掛け，そこにメインを通しておく。ヤブに絡まったロープを途中で解きながら降りるうちに傾斜が緩まるのが確認でき，そして気が緩んだ瞬間，なぜかロープにダンゴ結びができていて，それが左足のカラビナに引っかかるまで降りてしまう。それに加重がかかってしまった。良かれと思ったことが災いしてしまう。完全に宙吊りになってしまい，自己脱出用にクレムハイトを作る。径8mmのメインロープに手持ちのロープスリングは太めなものと，雪が付いてフリクションが効かない。荷物，ヤブ，雪，手袋と条件が厳しい。ワカンをつけた足をこのスリングに入れるのも難しい。手袋をはずして再度掛けなおすが，手がかじかんですぐ限界となってしまう。もがいているうちに，運よくダンゴ結びがカラビナとエイト環を通過したが，今度はクレムハイトがそれに引っかかって宙吊りになる。仕方ないので，メインロープに掛けたそのスリングとすっぽ抜け防止用のバックアップデイジーチェーンをナイフで切断。脱出できた。ザックをはずして落とそうかとも思っていた。結び目が通過しなかったら，ナイフを首から提げていなかったら，と思うとゾッとする。ロープのキンクもほとんどなかったのになぜ？やはりトップはかなり気をつけて下る必要がある。径8mmのメインロープに合うスリングも，再検討が必要。いったんメインロープを全部引き上げてもらい，松本さんに解いてもらう。意思の疎通も風の音とか岩に反射するとかで，当然簡単でない。

まだ急で微妙なスタンスからもう1P懸垂し，ラッセルして尾根上に戻る。その後まだ雪稜は続くが弱点をぬって行く。もう一段急な下降は窪状を降り，右にトラバースで容易に抜ける。

あとはラッセルをがんばって剣ヶ峰まで登りきり，上州武尊頂上へは空身で往復。頂上直下の急斜面は雪の状態変化が激しい。硬く氷化した急傾斜はキックステップも効かず，アイゼンへの履き替えもままならない。ピッケルでステップを慎重に切る。

剣ヶ峰への帰着は 14 時半過ぎ。懸垂で苦勞した部分は黒い筋になって見える。自分たちだけでつけたトレースは優雅に曲線を描いていた。結局、川場スキー場に降りたのが 16 時になった。スキー場からは無料の送迎バスで沼田へ出られてラッキーだった。

楽しく存在感のある山でしたが、反省点も大きい山行だった。まず、声による伝達は文節ごとに区切ると比較的有効であるようだ。第二に、8mm メインロープにフリクションノットをかける際、径が合うのは 4mm スリングとのこと。少し細い気もするが。私はクレムハイスト（変形プルージック）がよいと思う。第三には何よりも、懸垂下降では濃いヤブのある場合はロープを投げないほうが良い。最初の方は、支点にロープをセットした後、その場で別支点にエイト環を掛け、上の人に制動してもらいながら降りれば、ロープの引っかかりは起こらない。ただし下降者（トップ）と制動者（セカンド）の意思疎通が欠かせない。ヤブをふつうに自分で懸垂下降する方法として、左右に畳んだロープを肩にかけて下りてトラブったことは無い。しかし肩に掛けたロープが引っかかって首を締めるとか、付きまとう他のリスクが怖い。



懸垂下降後に稜線にトラバースして戻り、獅子ヶ鼻の絶壁を見上げる。背景は谷川連峰。



上州武尊をピストン(左)。重荷と緊張から解放されて眺めを楽しみました(右)。

御坂山塊：天下茶屋～御坂山・黒岳中退

【期日】2008.2.29（金） 【参加者】橋本

河口湖の北に位置する黒岳に向かう。快晴、-7℃。天下茶屋 7:17 出発。付近は雪が残るが、南斜面のため登山口は落葉が多いがその下は凍結、すぐにアイゼン着用。稜線上では積雪は約 50cm だが表面はクラストしており、概ねトレールが切られておりアイゼンが効いて歩きやすい。8:07 御坂山着(1596m)。ここから先がトレールが殆どなくラッセルが必要。クラストしている所と、乾燥した雪面上をきついアルバイトが待っていた。夏道で所要 30 分のところ、今回は 43 分かかった。8:50 御坂茶屋着。茶屋の前後 300 メートル位のみトレールあり。軽食後、黒岳に向かう。トレールは消え、乾燥した軽い雪に変わり（積雪 80cm 内外）、斜面が少しきつくなるとアイゼンが効かず、歩き難い。黒岳直下の最後の標高差 150 メートルの急登開始の地点に御坂茶屋から 50 分かかってたどり着いた(9:50)が、これまでのラッセルがきつかった。またアイゼンが効かず、覆いかぶさるような雪の壁にウンザリして、時間・スタミナともに消費したため、敗退を決心した。10.28 御坂茶屋着、11:21 御坂山着、12:01 天下茶屋帰着。（西朋掲示板 No. 2582）

0742 丹沢：箒沢～檜洞丸

【期日】2008.3.8（土） 【参加者】橋本

ミツマタやミズナラ、ブナの芽吹きがどの位進展しているか見に行く。6:45 西丹沢発、快晴、無風、気温-2℃、ゴーラ沢出会までの途中で群生しているミツマタの大きく膨らんだ花芽が見られる。ゴーラ沢出会 7:24 着。展望園地（1100m）辺よりルート凍結、また、昨日降った雪が積もり、ここでアイゼン着用。石棚尾根との分岐 9:12 着、石棚方面は薄いトレールのみ。檜洞丸への登りのコースも高さ 50cm 位の木道の高さまで積雪。9:27 檜洞丸着（1601m）。富士山と南ア連山が美しい。軽食と写真を撮り、すぐ下山開始。ゴーラ沢出会 10:49 着、西丹沢帰着 11:21、登り 2 ピッチ、降り 1 ピッチ。所要 4 時間 35 分。（西朋掲示板 No. 2629）

0744 奥多摩：鴨沢～雲取山

【期日】2008. 3. 23 (日) 【参加者】橋本

快晴、無風、気温+1℃、所畑 P 出発 6:55、スギ花粉が多く、苦しい。堂所着 7:52、七つ石分岐 8:27 着。アイゼン着用。ブナ坂 9:08 着、積雪は 50cm 内外だが、コースははっきりしたトレールがついており、歩行に問題ない。10:27 雲取山着 (2017m)。北ア、南ア全山、奥秩父、浅間山、丹沢、富士山と全て見える。軽食をとり、写真を撮ってすぐに下山開始。奥多摩小屋付近から南に見える丹沢、特に蛭ヶ岳が美しい。11:37 ブナ坂、11:54 七ツ石分岐、12:13 堂所、12:52 所畑 P 帰着。登り 3 ピッチ半、降り 1 ピッチ、所要 5 時間 57 分。(西朋掲示板 No. 2629)

0745 安倍奥：神通坊～七面山

【期日】2008. 3. 27 (木) 【参加者】橋本

登山口の羽衣は雪がない。羽衣 7:07 出発、中適坊 8:00 着、36 丁目晴雲坊からアイゼン着用。見晴らし台 9:21 着。ガスで何も見えない。ここからカラマツ樹林帯を縫って七面山方面は積雪はかなりあるがトレールがはっきりしており、ラッセル不要。大崩れ付近では常時落石の不気味な音が聞こえる。七面山着 10:08 (1982m)、山頂では案内盤がスッポリ雪に覆われていた。小雪が舞い始め、急に気温が低下してきた。急遽下山開始。羽衣帰着 11:49。コースの標高差は約 1500m 有り、雲取山とほぼ同じだが、こちらのほうが疲労度合は少ない。登り 2 ピッチ半、降り 1 ピッチ。所要 4 時間 42 分。(西朋掲示板 No. 2629)

2008 年度

2008 年度役員

会長	遠藤 彰
チーフリーダー	上野 午良
サブリーダー	尾崎 宏和
学生リーダー	島田 悠彦
会計	上野 利之
記録・会報	尾崎 宏和 灘吉 聡 島田 悠彦
装備	灘吉 聡
西高係	山野 裕 福村 任生 小澤 晃平
都岳連関係	上野 午良
ホームページ係	灘吉 聡
超 OB 係	林 武志

0802 武蔵/RCT：日和田山

【期日】2008. 4. 12(土) 【参加者】小川, 山野, 中村, 松本, 尾崎, 島田

陽差しもやわらかく桜吹雪と新緑でよい春の里山でもありました。

印象に残ったのは女岩西面の狭いチムニーでした。

最初のトライでは最後の核心で（自分の実力から考えてぎりぎりのポイントはどこでも核心）体を反転するとよいホールドを掴めて巧く突破できたのですが、2度目の挑戦では滑って結局ピンを足場に使ってしまいました。

全体を通して気力に筋持久力がついてこなくて苦戦した感がありました。エレガントさのかけらもありませんでしたが、とにかく取り付いたルートは登ることができたので充実していました。

懸垂下降の仮固定の状態からの自己脱出訓練ではハーネス用、足用2つのフリクションノットを交互に体重をかけて高度を早く上げていくことが課題。

カラビナをつかったノットがしっかりときまり、かつ比較的容易にずらすことができるようになってからは快適でした。個人的な感想としては、スリングに足をきちんとかけさえすれば重心を上昇させること自体は思ったより楽で、階段を昇るのと同じくらいの労力であると思いました。

ただ最後実際にほぼ宙吊りで体荷重を移し替える必要に迫られましたが、落ち着いてひとつひとつの手順を実行するのは難しく慣れが必要だと感じました。

平ダイナーが今回はたまたまうまくしまっているようでしたが摩耗の可能性もあるかもしれず、メインザイルにちょうどよい径の丸スリングを持っておくべきことは気をつけておきます。

今日は今後のために学ぶことが多かったように思います。

先輩方、どうもありがとうございました。

(島田)

0803 南アルプス前衛：日向山

【期日】 2008. 4. 16(水) 【参加者】 橋本

暖冬傾向とのことだが、山では今年は積雪が多く、また、4 月も降雨（雪）の日が多く、山行の機会が制限された。最近感じることは、山でシカやサル、イノシシ、野鳥などに異状に多く出会うことだ。これは異常気象の予兆なのか。

甲斐駒ヶ岳の北側にある日向山（1660m）とその奥の鞍掛山を目指す。一度、雪の甲斐駒ヶ岳の黒戸尾根を観察したかった。矢立石 P 手前にゲートがあり。

7:04 矢立石登山口発、8:02 三角点（1660m）着、8:06 日向山着。山頂は北側が開け、正面に雨乞山、右手に八ヶ岳が見える。山頂から少し南に回りこむと、甲斐駒ヶ岳、鳳凰 3 山方面が望める。小休後、急斜面の花崗岩砂を降り、雁ヶ原に行く。これまでのコースはカラマツの樹林帯で、適宜間伐されておりコースには雪はなかった。雁ヶ原から鞍掛山方面はやや踏み跡が薄く、樹林帯が濃くなり、積雪がある。1622m ピークを越して急登に入る辺から（雁ヶ原から約 30 分登る）積雪上のトレールは薄く、ラッセルが必要になった。鞍掛山まで標高差 400m、夏山で 2 時間の距離を一人でラッセルするのは無理、敗退を決めた。日向山に引き返し、再度、雁ヶ原から急坂の錦滝方面を下降して、矢立石 P に帰着 10:12。途中、尾白川林道から見る甲斐駒ヶ岳、黒戸尾根は見事。（西朋掲示板 No. 2629）

（橋本）

0804 増毛山地/ST:雄冬山～浜益山～群別岳～暑寒別岳

【期日】2008. 4. 26(土)～5. 1(木) 【参加者】岡田, 他 1

相棒とともに、4/26～5/1 の日程で、雄冬山～浜益御殿～浜益山～群別岳～暑寒別岳～暑寒荘と縦走。2泊3日の予定が、雨のため2日停滞となり、順調ならこの後ニセコ方面に行こうと考えていたのは取りやめに。

旭川へ向かう特急から留萌線に乗り換えて、さいはての駅、増毛を目指す。海へ向かう1両のローカル線に大型リュックとスキーは、どう見ても似合わず、乗客の奇異の視線を感じてしまう。乗客がほとんど居なくなった列車は海沿いの駅にいくつも停車しながら、やっと終着駅の増毛に到着。線路止めの先に、趣のあるさいはての駅舎がぼつん。

駅付近でとれたての刺身を食べ、これだけでもはるばる旅してきた甲斐があったと満足、山はいつでもよくなってきてしまう。明日からの空模様はかなり芳しくなさそうなので、私はここに居て刺身を食べていた方が幸せと考えたが、同行者がどうしても予定通り行きたがるので、計画した入山口のケマフレへ向けバスに乗ることに。

バス停付近にテント泊し、翌日ルート偵察するも、雪が少なすぎてここから雄冬山に登るのは無理と判断。北側林道からの入山に変更、増毛からタクシーで入れる所まで入る。半日林道歩き尾根に出たところでテント泊。翌日からは雪と雨にたたられ、浸水するテント内で予備食で2泊を耐える。

どうなることかと思っただが、その後の3日間は何とか天候が持ち、所々では強風、あるいはやぶと格闘を強いられながらも、予定していた縦走コースを概ね快適なスキー歩行と滑降で楽しむことができた。浜益御殿～浜益山は日帰りの山スキーヤー2名に会った。

ハイライトはマイナー名山に選ばれた群別岳超え。この山域では珍しくピラミッド状の鋭峰。登りは急斜面のやぶをスキーをかついでつぼ足で。1箇所垂直のヤブ超えで少し苦勞したが、大きな問題はなく山頂に到達。下りは雪庇の尾根をしばし進んで、雪庇の切れ目から急斜面を滑降。

平らな広い尾根を進んだ後、暑寒別岳へきつい登り。暑寒別岳山頂付近はかなりの強風だったが、多少風を避けられる場所に幕営。最終日は前日まで何本もの滑降跡のある雄大な斜面をのんびり滑った。会ったのは、下部で日帰りて登ってきた単独者のみ。日程的にぎりぎりの所で、縦走を完結できたのはラッキーだったと天に感謝。

増毛に戻って食べた、上生ちらし丼と日本最北造り酒屋の地酒「国稀」の味は忘れられない。増毛山地は札幌などから車で比較的短時間で来られるのだが、列車で訪れるのも旅情があった。

(岡田)

0805 飯豊/VR：二王子岳～赤津山～門内岳

【期日】2008. 5. 2(金)～4(日) 【参加者】上野午, 尾崎

GWの春山はなるべく人のいない(であろう)ルートを縦走しようということで、飯豊の二王子岳から長駆門内岳への縦走とした。とはいえこのルートは、地元の山岳会はもちろん、結構メジャーなルートであり、参考にする記録も結構あるので心強い。メンバーを募るも、最終的に上野と尾崎の2名となった。

期待と緊張が入り混じって突入した分、絶好の条件に恵まれて、歩きに終始しあっさり終わってしまった感もある。ただ、特段の登攀技術は要らないとはいえ、雪庇やシュルンドに対するルートファインディング、効率的なヤブ漕ぎ、基本的な雪上歩行技術(まだまだ未熟を実感)が必要な、文字通り長くて奥深いルートだった。悪天ならずと厳しいだろう。山は、緊張して入山しないと許してくれない。

[5/2]

二王子神社7:52～8:05 一王子小屋～9:10 994m～9:45 1110m～11:08 二王子岳11:40～14:01 雷岳～16:00 榎取倉山

新発田駅に朝集合し、予約していたタクシーで二王子神社に向かう。今年の残雪は少ないということで結構な藪漕ぎが懸念される中、出発する。二王子岳までは雪の消えた一般道を行き、二王子岳直下で残雪が現れた。一王子避難小屋も、二王子岳頂上避難小屋もきれいで快適そうだった。天気は快晴で上半身は大汗でびしょびしょ状態、頂上付近で泥臭い流水をすくって水筒に入れる。都会では考えられないことが無性に楽しい。二王子岳からは稜線上の残雪を行くが、二本木山分岐よりしばらく下った所で雪が消えて藪漕ぎとなる。二本木山からの下りから雷山を経て榎取倉山までは殆どが藪漕ぎだった。過去の記録の写真だと榎取倉山までの間も残雪があり、所要時間も我々よりも短時間で通過しており、今年は雪が少なかったのであろう・・・。榎取倉山直下の雪



二本木山からの下り



初日の幕場

田で豊富な流水を発見。重荷の藪漕ぎでようやく柵取倉山に到着した。時間もいい時間であり、雪のない小さな頂上部に幕を張る。越えてきた二王子岳がもう遥か彼方にあり、静かな山頂で二王子岳の肩に沈む夕日を眺めながらの夕餉の支度と缶ビールでの一献は格別だった。

[5/3]

発5:56~6:58 1150mP~8:25 R 8:40~9:45 R 10:05~水汲み~11:00赤津山11:37~12:35 R~水汲み~13:55藤十郎下14:07~15:20幕営 1348mピーク

軽量化のため羽毛インナーシュラフのみでシュラフカバーを持参しなかったが特段寒くはなかった。悪天だったら厳しかったかも・・・。今日も朝一から藪漕ぎから始まった。天気も良さそうだ。ヤンゲン峰までは痩せた尾根を残雪帯と藪漕ぎのミックスで所々深い藪もあり、思ったより時間と体力を消耗する。進む程、背後の二王子岳が遠ざかっていき、よくもここまで歩いてきたなあと感慨してしまう。赤津山の登りは急斜面の雪面歩行となる。微かな足跡らしきものが雪面上についており、GW前半に入山者があったのだろう。ややバテ気味で赤津山に到着した。ちょうど昼でもあり大休止とする。太陽が燦々と照りつけ、暑いくらいだ。展望の良いこの山頂で泊とし、ゆっくりしたいが先は長く、重たい体を押して出発する。広い尾根を藤十郎山へ向かう。暫くは残雪上を行くが、すぐに藪に突入する。猛烈な藪ではなく、明瞭な尾根上を行くのでさほど苦痛ではないが、距離が稼げないのがもどかしい。1348m地点の万石平と思われる地点で15時過ぎとなり、広い雪面上に幕を張る。二王子岳が遥か遠く、今日越えてきた山並みが一望に見渡せる絶好の幕場。陽はまだ高く、燦々と雪面を照りつけている。喉の渴きを我慢して一通り幕営して落ち着いたところで缶ビールを分け合う・・・至福の美味さ・・・。暖かいので今日も外で夕餉の支度をする。明日越える二ノ峰直下の急斜面の藪が黒々と見えており、あんなところ超えられるのかなあ・・・とってしまう。遠く二王子岳の背後に沈む夕日はすばらしく、広大な夕焼けが印象的だった。

[5/4]

発6:00~7:20 R 7:45~8:46二つ峰9:08~10:00 R~11:22門内岳12:00~13:05 R~14:03 R~15:43飯豊山荘16:00~17:00梅花皮荘

今日も天気は持ちそうだ。気を引き締めて出発。暫くは切れぎれに残っている雪面上を行ったり、尾根に乗り返したりして進む。痩せた尾根の際についている雪面上を行き時間短縮したいが、安全みて藪の尾根を進む。残雪も消え、いよいよ二ノ峰直下の



柵取倉山へ向かう切れぎれの稜線

急斜面の藪漕ぎになる。昨日の幕場から見ると濃い密藪っぽく相当な難儀を強いられると覚悟していたが、下から見るほど急ではなく、藪も背丈が低く思った程でもなかった。痩せ尾根上の藪であり、ここの尾根を通る登山者は皆同じ所を通るので藪も薄くなってしまったのであろう、下部も踏み跡のようになっていた。高度感のある粗藪(?) 漕ぎでぐいぐい高度を稼ぎ、二ノ峰に到着。汗をかいて火照った体に山頂の風が心地よい。ここまで辿ってきた行程が一望でき、二王子岳はもう遙か彼方に鎮座している。人間の足って驚異的だなあと感慨に浸ってしまう。二ノ峰の下りは急斜面のロープを伝い、門内岳までは雪面上を行くが、容赦なく照りつける太陽にバテ状態で門内岳に到着する。見えなかった東面の眺望が開け 180 度の展望。ここで初めて登山者と出会う。大型連休でも時おり縦走者が行き来する程度であり、北アルプスと違って格段に静かといえる。

大休止で大汗のシャツを乾かした後に出発。主稜線を北にいき、大雪面となっている梶川尾根を快適に下る。このまま雪面上を下っていけることを期待するが梶川峰を過ぎた 1600m 地点で雪がなくなり、夏道を下ることになる。プラ靴での夏道の急降下は辛く、喉もカラカラで昨夜雪を溶かして作ったほんの少しの濁った水しか残っていない。我慢の下りでようやく飯豊山荘に到着し、湧き水をがぶ飲みした・・・。林道を梅花皮荘まで歩いて終了。温泉で汗を流して小国から新潟経由で帰京した。2泊3日であったが久々の冬季(といっても厳冬期ではないが) 装備を持った山行で、過半がプラ靴で藪漕ぎの行程でもあり、両足ガクガクで筋肉痛バシバシ、右足に大マメと靴擦れもできるといった有様で下山後の下半身はヨレヨレになってしまったが充実した山行でした。3日間快晴続きで暑く体力を消耗したが、悪天ではなかったことに感謝。

(上野)

0806 南アルプス：仙丈岳

【期日】2008. 5. 3(土)～5(月) 【参加者】小川, 山野, 中村

仙丈岳はいい天気でした。

5月3日 朝小川さんの車で出発した。東京は雨でしたが、甲府盆地からは晴れていました。伊那市の高遠の少し先、仙流荘から市営バスの乗り換え歌宿へ。その先は林道が崩れていて車はとおれない。太平山荘から山道に入り北沢峠経由、川原の北沢駒仙小屋（旧長衛小屋）脇で雪の上に幕営。2ピッチ。テントは34張と多かった。

5月4日快晴。4時25分起床。5時55分出発。峠の少し手前から登り始める。峠のところからのほうが踏まれているようだ。大滝の頭（五合目）。森林限界から上は雪と岩土の混合だがほとんど雪。雷鳥のつがいがいた。5ピッチ11時に仙丈岳頂上。北アルプスから、白山、御嶽山、中央アルプス、甲斐駒、北岳から塩見、赤石、富士山と360度の景色を楽しむ。

仙丈のカールを仙丈小屋まで尻制動、楽しかった。少し登り気味のトラバースで尾根道へ。3ピッチ3時に帰幕。高度差1000mの快適な5月の山でした。小川さんは一番元気でした。高地に行ったばかりだからか？下りで少し足がつったそう。山野は下りばて気味で足がもつれてアイゼンをスパッツに引っ掛けて足を少し怪我しました。

5月5日は曇りでした。6時前に出発し、途中車に乗せてもらい7時35分歌宿発のバスに間に合いました。

帰りに富士見の道の駅で温泉に入り、八ヶ岳甲斐小泉の三浦等さんの別荘によって、山野は電車で帰りました。2年ぶりの5月の雪山、一般コースでしたが、天気がよくて充実していました。

(山野)

0807 奥秩父：金峰山

【期日】2008. 5. 4(日) 【参加者】橋本

今年の冬は概して暖冬であったとされるが、部分的には積雪が多く、てこずる所も少々あった。歳相応に、また、単独行であることを考え、体力の範囲内で山行を楽しむ。

久しぶりの休日の真ん中である。ミズカキ山荘前の広い駐車場は満車である。駐車場 6:57 出発。カラマツやドウダンツツジ類の新芽、ヤマザクラの花が美しい。富士見平小屋着 7:27。大日小屋着 8:03。小屋近くののテン場はテント多数。ここからアイゼン着用。コメツガとアズマシヤクナゲ、ミズナラの樹林帯は急坂で積雪あるがトレール明瞭。ラッセル不要。小川山への分岐 8:35 着。金峰山着 9:56。八ヶ岳は雲の中。南ア連峰が美しい。写真をとり、すぐに下山開始。五丈岩付近で小休止。登山者多く、下山に時間がかかる。砂払いの頭 10:41、小川山の分岐 11:09、大日小屋 11:25、富士見小屋 11:55、ミズカキ山荘駐車場帰着 12:15。登り 3 ピッチ 2 時間 59 分、下り 1 ピッチ 2 時間 19 分、合計所要時間 5 時間 18 分。帰途、ラジウムラインの明野付近から見る甲斐駒ヶ岳、鋸、鳳凰三山が美しく、写真に収める。(西朋掲示板 No. 2664)

(橋本)

0808 丹沢：箒沢～檜洞丸

【期日】2008. 5. 19(月) 【参加者】橋本

昨年秋の台風で交通止めの県民の森からの入山はあきらめ、西丹沢ホーキ沢から入る。8:13 出発。9:08 ゴーラ沢出合い。9:57 展望園地。ややゆっくりのペース。ミツバツツジ、ヤマツツジ開花。11:06 石棚尾根分岐、11:27 檜洞丸着。風が強く、寒かったのですぐに下山開始。11:50 昼食休憩、12:24 テシロの頭、12:51 石棚山、13:01 ヤブ沢の頭、この付近は急下降で樹林中で暗く同行者へバリ気味。13:32 板小屋沢の頭、ホーキ沢 14:35 着。石棚尾根は標高 1100m 内外の場所でシロヤシオ満開、ミツバツツジやヤマツツジも多かった。(西朋掲示板 No. 2664)

(橋本)

0809 箱根：早雲山～箱根神山

【期日】2008. 5. 22(木) 【参加者】橋本, 他

箱根では珍しいブナの新緑を見に行く。10:05 早雲山発、11:41 大涌谷分岐、この付近にはコイワカガミの大群落あり。12:25 神山着、付近は全山ヤマツツジが満開。13:32 坊ヶ沢分岐、ここから神山の西斜面を北上するコースにブナの大木がある。新緑のブナが美しい。かんぼ前帰着 15:07。(西朋掲示板 No. 2664)

(橋本)

0810 丹沢/WC：神ノ川伊勢沢

【期日】2008. 6. 1(土) 【参加者】松本, 尾崎

エビラ沢とどちらにしようか考えたが、結局、伊勢沢を遡行した。入り口を間違えて林道を行きすぎたのが、逆にウォーミングアップになった。林道からの下降点は、短いトンネルを2つ過ぎて曲橋（確認できず）の後とのこと。戻ると林道カーブ地点（入山方向なら右カーブ）で他パーティが準備していたので分かった。鉄製杭にイセ沢と書いていた。

格段の困難はなかったが、シーズン初回から、ルートファインディングあり、腰まで漬かる釜の通過あり（F3）、ザイル登攀あり（F2 と F4 大滝）、ハーケンの連打あり（大滝）と充実した。F2は左壁の1歩がちょっと微妙。F3は左岸に鎖とロープがあったが、増水していて強い水圧を浴びそうなので、釜に漬かって左階段状より越えた。大滝は45mほどあり、2ピッチの登攀となったが、ホールドスタンスには恵まれているので、左寄りから取り付いて中央カンテを登ることができた。最初の5~6mを松本さんが登り、テラス状の残置支点でビレイ。ツルベで尾崎が2P目を登る。下のほうは立っていて少しルート取りに躊躇を感じた。右に回り込んだ上半は傾斜が緩まる反面、水流左でシャワーを浴び、少々ぬめっている。これほどまでに全神経を集中させられたのは久々だ。いや、日頃の集中力散漫。2P目は残置ハーケンが見つからず、3本打ち込む。3本目くらいになるとハーケンの残り枚数を考えながら使う。大滝の後もほどよい沢登りで最後の二俣は滝が見える右俣へ。稜線直下まで水が豊富で、ヤブ漕ぎもない。鹿のせい？ならこれは良くないか。尾根道も気持ちよく、丹沢の山を今回見直した。



伊勢沢大滝

今回はシーズン初で、2人とも万全の状況でもなかったのに、予想以上のお釣りが来た感じである。とくに私は土曜日体調悪く、当日朝もだめだめだったのが、やはり山は行かないと始まりませんね… 行かない理由をひとたび見つけ出すと、どんどん拡大解釈されて（して）しまいそうな（いちおう、将来への戒め）。松本さんどうもありがとうございます。

エビラ沢に関しては、F1から人工登攀になって、朝まだ寒いこともあり敬遠した。それ以上に、F1が林道から丸見えの位置でしかも見晴らし台まで作られており、見られるというより、自分が登るか落ちるかという世界で振りかえれば車がブブーなどという状況が許せなくて、あまり食指はたらないです。それと、沢初めの時期が昔より早くなったのは温暖化の影響か…？（尾崎）

0811 北アルプス：鹿島槍ヶ岳

【期日】2008. 6. 13(金)～14(土) 【参加者】尾崎

6/13 登山口 10 時～14 時 爺ヶ岳～冷池 15 時

この時期はまだ爺ヶ岳南尾根を登る。扇沢の登山口では、『南尾根は、雪消えとともにアイゼンやピッケルで非常に植生が傷つきやすくなっています。細心の注意を払って登ってください。今後は、この時期の登山は自粛していただき、6 月上旬に柏原新道が開通してから登っていただきたいと思います。いかがでしょうか。』とあった。これを書いた種池山荘の方(?)の人柄が偲ばれた。すでに6月中旬だが、今年は、柏原新道上部はまだ雪が多く、硬い残雪のトラバースが厳しそうである。

南尾根の取り付き点は行けば分かるだろうと思っていたが、はっきりとしない。2000m 付近で夏道も雪に埋もれ、雪渓を伝って右上し、尾根上の明確な踏み跡に出た。

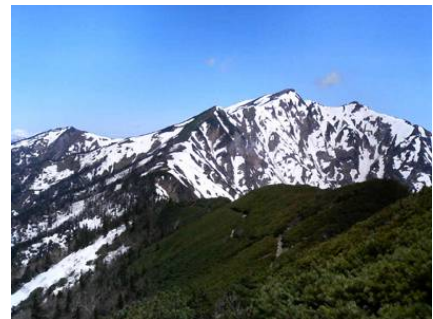
ジャンクションピークで雪を踏む。このあたりが森林限界で、爺ヶ岳中央峰までは悪場は無いのがわかる。ここから踏み跡はおおむね扇沢側の尾根左側にあるようだが、適当に雪渓を伝っていく。14 時、爺ヶ岳頂上。予報ほど天気はよくなく、鹿島槍頂上はガスに覆われている。剣八ツ峰方面もガスにかすんで不機嫌そうである。時折小雨も降る。

赤岩尾根分岐付近で急激に天候が悪化し、横殴りの風雨となる。冷池はまだ営業していなかったが、小屋開け準備の小屋番にテン場代はしっかり取られ、かつ、上の吹きさらしのテン場に張れと平気な顔をして言いつける。まあ、それはそうだが同情の一言あってもいい気がする。

小屋前で宿っていても止みそうにないので、出て行くが、大風で設営に手間取りずぶ濡れになる。雪を集めてから中に入っても、水を作りながらナベをひっくり返しそうな強風である。天気図では明確でないものの、各地の風向きから局地的な寒冷前線通過とみて間違いないようである。

6/14 テン場 6 時半～鹿島槍 8 時～爺ヶ岳 11 時～14 時半 扇沢

翌朝、風は止んだが天気は変わらずで、頂上はガスの中である。様子見していたら日差しが届き始め、出発。布引山から上は再びガスに突入。西風が強く、小さなシュカブラも出来ており、寒い。時折黒部側のガスが晴れたが、頂上での展望はなし。



冷池に戻ると快晴。残雪が底抜けに明るく、あまりに気持ちよいのでゆっくり歩いて爺ヶ岳を越え、南尾根を下山。一人では珍しく大町温泉に寄って帰宅。シーズン内にもう一度だけ雪を踏みたいと思っての今山行だったが、天気さえよければ、この時期の北アルプスは夏のシーズンよりおもしろく、目的達成で満足。

0813 安倍奥：山伏

【期日】2008. 6. 16(月) 【参加者】橋本

安倍川の最上流部にある山伏（やんぶし、2014m）は、安倍奥といわれるこの付近の盟主で、近くに梅ヶ島温泉がある。近くには七面山や大谷嶺などの大崩落地があるが静かな山域である。大谷崩れ分岐出発 7:52, 晴れ, 蒸し暑い。暫く西日影沢左岸を歩く。山伏登山口 8:12, よもぎ峠 9:20 着, ここまで見晴らしはなく, かなりの急登であるが, 水場は多い。峠で老夫婦に会う。一帯は山頂までを含めマイズルソウが極めて多い。縦走路稜線 10:36 着, ここから南方面の牛首から西日影沢方面は危険と記されている。稜線上では, シロヤシオ, サラサドウダン, ミヤマカタバミ, オオイワカガミの花を堪能した。山伏 10:45 着, 南ア茶臼岳らしき山が見えるが, 見晴らしはよくない。更に縦走路を北上して南アの大パノラマを期待したが, 天気条件もあり, 殆ど期待はずれであった。新窪乗越（10:02）まではアップダウンの繰り返し, ここから大谷崩れの下山が始まるが, ひどいガレ場である。富士山の須走り口下山道のガレ場より少し大きめのガラガラ石が不安定に急斜面を覆い, その上が下降ルートになっている。ガレ場のため, 植物が殆ど見られず, やや安定したガレ場下部から, オンタデ, バッコヤナギが見られる。幸田 文の文学碑が扇の要付近にある。13:35 出発点の分岐点に帰着。所要時間 5 時間 43 分。(西朋掲示板 No. 2664)

(橋本)

0814 八ヶ岳：赤岳～横岳～硫黄岳

【期日】2008. 7. 12(土)～13(日) 【参加者】山田, 他

5 月に富士山スキーに行き損ねてからぱっとしない生活が続いていましたが, 会社の同僚の誘いで先の週末に八ヶ岳（赤岳～横岳～硫黄岳）に行ってきました。何年ぶりかの泊りがけ, かつ, たぶん中学生以来の営業小屋泊まりでしたが, 梅雨の合い間の好天が休みと重なって少し早い夏山を堪能することができました。初めての冬季バリエーションルートだった赤岳主稜や取付を間違えて敗退した中山尾根の鶏冠を懐かしく見てきました。他にもブロッケンを見たり, カモシカやコマクサに会うことができたり, 縦走路ですが乾いた岩の感触も少し味わえて, 天気最高の楽しい山行でした。

8 月の夏山は難しいですが, リハビリして沢登りも再開したくなりました。(山田)

0815 奥秩父：大弛峠～北奥仙丈岳・金峰山

【期日】2008. 7. 13(日) 【参加者】橋本

春から初夏にかけ、徐々に体力をつけながら高い山に登る。西朋会員から、いくつかの山行への参加を呼びかける記事があったが（例えば今年5月の仙丈岳）、他用が出来て参加できず残念であった。例年であるが、7-8月の夏山は西朋現役時代に行けなかった山を主に選んで実施している。7月は自身の体力の低下具合を確認する山行でもある。

梅雨の晴れ間を利用して、急遽出かける。夏山の足慣らしでもある。早朝にもかかわらず、オオダルミは車が20台、日曜日は混む。オオダルミ6:20出発。快晴の空には、前国師から、富士山、南アがすばらしい。6:50北奥仙丈岳着、写真をとり、すぐ下山。7:20オオダルミ着。例年オオダルミ小屋付近でみられるクリンソウが今年はほぼ終わっていた。7:41朝日峠、8:06朝日岳着。8:50金峰山着、南ア、八ヶ岳がすばらしい。小休後すぐに下山開始。サイノ河原付近でコケモモとゴゼンタチバナの花が満開。朝日峠10:04、オオダルミ10:23帰着、所用4時間03分。なお、オオダルミから信州側の川上牧丘林道は車通行可。（西朋掲示板 No. 2755）

0816 加賀：別当出合～白山

【期日】2008. 7. 19(土)～21(月) 【参加者】山野, 他

7月19日から21日 六つ星山の会で白山に行きます。参加者17名 視覚障害者 6名 健常者 11名。チーフ 田村猛 氏サブ 野村美紀子さん西高出身。

7月19日 池袋 バス 福井市泊まり

20日

8時 別当出合 発砂防新道経由して

15時 室堂センター着 宿泊

21日

6時 センター出発 御前峰往復

8時センター出発 展望歩道経由

14時すぎ 別当出合着 バスで帰京

コースの変更等はありませんでしたが、21日2時過ぎに少し遅れましたが全員無事下山しました。天気は比較的良好、21日朝はご来光を拝みに頂上に行き、北アルプスの上の雲のところからの太陽を拝みました。

お花畑もきれいでしたし、雪渓も多く残っていました。

(山野)

0818 南アルプス：青木鉱泉～鳳凰三山

【期日】2008. 7. 20(日) 【参加者】橋本

青木鉱泉 5:53 発、既に有料駐車場はほぼ満車。20 分位歩いてから、ルートからはずれ、踏み跡の多い急坂の枝沢に入り込んでしまった。ケモノ道であった。ドンドコ沢方面にトラバースしてやっと正規のルートに復帰、タイムと体力をロスした。南精進ヶ滝 7:22、鳳凰の滝 7:47、白糸の滝 8:20 着。ゴゼンタチバナ、ミヤマカラマツ、カニコウモリ、チングルマなどが多い。五色の滝 8:50 着。いずれの滝もルートから外れており、見るのは次の機会にした。五色の滝より上はドンドコ沢の河原を歩くが、これまでの急登から緩やかな登りとなる。鳳凰小屋 9:31 着。水を補給。サイノ河原 10:16 着、ガスが出ており、見えるのは観音岳のみ。鳳凰小屋からサイノ河原へのザレ場の急坂はきつい。小休後に地藏岳へは行かずに、南下開始。観音岳 11:26 着、薬師岳 11:48 着。昼食休憩。薬師岳山頂のすぐ左手に中道への下山道がある。眺望のないこの急下降の下山道をひたすら下る。青木鉱泉 14:14 帰着。高度差約 1700m、所用 8 時間 21 分。ドンドコ沢登山道は枝沢が多く水場が豊富。これに対して中道は殆ど眺望がなく、水場も林道近くに 1ヶ所有るのみである。しかし、この中道を登る人が結構多い。稜線にでられる近道のためか。(西朋揭示板 No. 2755)

0819 丹沢：寄沢～雨山

【期日】2008. 7. 23(水) 【参加者】黒澤, 橋本

黒澤さんに連れられて丹沢の雨山付近のブナを見に行く。

8:07 寄沢管理事務所前出発。寄沢に入る。タカノス沢分岐点上部 8:55 着。地獄崩を過ぎて鍋割峠へ直登するコシバ沢への分岐点 9:47 着。付近にイワタバコ、タマアジサイが咲いている。雨山峠 10:47 着。峠から南下するが、急登が続く。ハナヒリノキ、コアジサイ、アセビが多く、徐々にブナが出てくる。大木ではないが、雨山頂上に向かう斜面にかなり多く見られる。湿度が高くハエも多い。雨山山頂で昼食。ヒメシャラやヒコサンヒメシャラの大木あり。檜岳 13:00 着。縦走路から左折して寄へのコースをひたすら降る。14:37 出発点帰着。(西朋揭示板 No. 2755)

(橋本)

0820 中央アルプス/WC&VR：伊奈川本谷～三ノ沢岳～滑川二ノ沢

【期日】2008. 7. 25(金)～26(土) 【参加者】尾崎

7/25 倉本 8:00=(送ってもらう)=登山口 8:37～10:04 中八丁峠 10:15～10:35 伊奈川～林道～取水口より入溪 11:05～12:30(1650m)～14:15(1820m)～14:40 宿泊地(1900m)

7/26 発 5:52～7:28(2250m)～源頭 9:05～9:20 三ノ沢岳・宝剣岳鞍部～10:15 三ノ沢岳～12:30 中三ノ沢岳～13:00 2368m ピーク～13:50 二ノ沢コル～16:00 滑川～17:00 敬神山荘～18:15 上松駅

伊奈川自体は歩くだけ。最初で最後の滝とツメをどうルート取りするかなので問題ない。滝はロープ不要だし、ツメもお花畑の踏み跡たどればよい。源頭はとてもきれいだし、沢初心者には良いと思う。須原からだ和林道で入れるが、今回は倉本からの正統？中八丁峠越えルート取る。といいつつ、地元の救助関係者という方に偶然声をかけられ林道の中八丁入り口まで送ってもらう。一人で行くこその特典だ。

幕営地に到着すると、ひとりでツェルト張り・薪集め・気象通報など忙しいけれど、やってしまふと暇である。焚き火は、晴天続きだったのですぐ点火した。すぐに火がついちゃって(つかなくても悲しいが)、その火で適当に料理すれば、寒くもないのでほとんど用はない。焚き火はやはり仲間とやるのが断然楽しい。料理も適当なので、米炊きは失敗した。朝は火をおこすでもなく、前日の残りをシュラフカバーの中であつんで終わる。

夜中、開けっ放しのツェルトから、満月が皓々と光るのが見えた。気象通報は欠かさないとか、ちょっとした物音にびくっとするとか、単独ではいろいろと臆病になる。でも、こんな月を見ているとき、自分が山奥でひとりであるとか、山が怖いという気持ちは忘れてる。

核心部はむしろ三ノ沢岳南西尾根の下降。頂上の喧騒やいずこに。とくに三ノ沢岳からのハイマツの急下降は完全にルート無く、下方に踏み跡が見えるのに近づいていく感じ。ピークからの下りはじめは何度かルートはずす。微かに踏み跡がある所はあるが、判然としない所ばかりだ。ひとりだと、展望が利かなければ入れなかった。ハイマツの花粉をもろに浴び続け、体もザックも黄色くなる。今頃花粉症になりそう。とくに中三ノ沢岳まではヤブが濃く、それを過ぎても踏み跡はおぼつかない。

単独だと五感をフルに使うので、動物的快感はある。でもやはり毎山行そうはできない。これは人間が野生動物より劣っていることを示すのかもしれない。踏み跡なんかはヒトのものか動物のものかわからない、というより、同居なのだろうから知能程度なんて同じと思っていたが、自然を生き抜く力と知能は動物のほうが上だ。人工環境のなかで人間が“霊長類”なのは当然。そんな言葉、近代生物学が生み出したにすぎない。と、このあたりは思索のできる程度のヤブ漕ぎ

である。

二ノ沢のコル付近に古い残置物が見られたが、本当に朽ちかけている。下降も枯れ沢に出るまで踏み跡ははっきりしない。近年ほとんど人が入らないのだろう。しかし、ここからの下降は最近誰か通ったような草の折れ方が見られた。二ノ沢を下っていくと右上方から枯れ沢に合流したが、逆に登高時にこのポイントを見つけるのは難しいと感じた。行きに送ってくれた人の話でも、二ノ沢は長いだけで滝はないとのことだったが、この先何があるかわからないので緊張が続く。一ヶ所最近崩落したかと思われる箇所があり狭まった水流内を下る必要があったが、技術的な問題はなかった。

滑川は、十年ほど前に上野先輩と高橋先輩と、冬のシヤマ尾根に来て渡渉に苦勞した覚えがある。今回、夏で渡渉は余裕だった。ここまで来て先が見え、疲れてきて川原で2泊目をしたくなる。でも間に合いそうなので上松駅まで1時間半歩き。十年一昔というように、敬神ノ滝小屋やアルプス山荘の付近は、大規模な砂防工事でたいへん痛々しい風景に変わっている。そのすぐ横に、古き時代のお地藏さんや小さな社が肩身狭そうにしている。ちょっと山に入ると日本中何処も重機が大地を穿り返す光景。また逆に、上松までの山村は癒される風景で、村の有線放送が夏祭りの案内を告げていたり。本当の幸せとは何だろうか、考えさせられつつ最後の道のりを下っていった。

上松ではちょうどその夏祭りでにぎわっている。ところが1泊で帰れると思ったのは甘かった。大雨で中央線は5時間以上不通。塩尻でずっと足止めで、帰りのあずさは夜行（行きも帰りも）となり、気付いたら翌朝5時すぎ新宿にいた（特急料金無料）。塩尻では床下浸水などもあったらしく、もう一泊していたらぶ濡れ程度で済んだかどうか。。。

地味ながらもずっしりとくる山行であった。



ツエルト泊・西千畳敷からの三ノ沢
岳・チングルマ

0821 北八ヶ岳：蓼科山

【期日】2008. 8. 2 (土) 【参加者】島田, 他 2 名

以前から約束していたこともありサークルの同期と、後輩を誘って日帰り山行に赴く。高山植物を見たいというので北ア白馬などを考えたが、日程がとれず蓼科山にした。女神茶屋から山頂まではあっという間。一步一步ゆっくり下りながら入道雲ができていくのを見ていると、夏には山に来るべきだなあとつくづく思った。

将軍平で牧場アイスクリームなど食べていると上空に真昼の虹が懸かっていた。大河原峠から笹原の天祥寺原をプール平まで歩き温泉に入って帰途につく。天気に恵まれてさわやかな一日だった。

(島田)

0822 南アルプス：鳥倉林道～塩見岳・蝙蝠岳

【期日】2008. 8.5(火)～6(水) 【参加者】橋本

8月5日(火)

自宅をAM2:30車で出発。鳥倉林道Pに7:26着。P場7:33出発。ここからバスのみ通行可の舗装林道を塩見岳登山口まで歩く。登山口8:04着。ここから豊口山分岐まで急登の連続である。途中のコル着9:02、豊口山分岐10:04、10:24三伏峠着。小休止。この鳥倉コースはこれまでの塩川からのコースより1時間ほど歩く時間が短縮できる。三伏山10:46着、本谷山11:38着。北西方向より雷雲発生、雨が降り出す。塩見小屋13:11着。依然として雷鳴と雨が続く。明日の天気心配。小屋泊。明日蝙蝠岳に行けるか天気次第。

8月6日(水)

早朝は濃い霧。徐々に霧が晴れてくる。天気を心配しながら塩見小屋4:57出発。塩見岳西峰(3047m)5:50着。急速に天気回復、南前方に秀麗な蝙蝠岳が見える。少し距離があるが往復することに。塩見東峰(3052m)経由で北俣岳分岐着6:14。この付近は高山植物が多く、夢中で写真に収める。北俣岳や2758Pは標識なく、不明のまま通過。2758Pらしき広い馬の背状のザレ場で南アでは珍しいライチョウ(幼鳥)を発見。これまでに何回か南アに入っているが、今回初めて蝙蝠岳付近でライチョウが生息しているのを確認した。このザレ場を降りきったところが灌木帯で、ナナカマドとハエマツ、ダケカンバからの雨滴をかぶり、体がビショヌレ、靴の中まで水が入った。また、中腰で通過するところがあり、この灌木帯突破に体力消耗。蝙蝠岳7:30着。思わず快哉を叫ぶ。周囲には3000m級の巨峰が取り囲んでいる。南に荒川3山、東～東北に農鳥に続く白鳳3山、甲斐駒ヶ岳、北西に塩見である。十分に堪能し、写真をとって下山開始。決まって午後早く雷がなる。2758P(らしきP)8:19着、北俣岳分岐9:10着。塩見東峰東面は高山植物が多く、ここでも多くの写真をとる。塩見西峰9:48、塩見小屋10:21、昼食休憩。恐れていた雷がなり始めた。急ぎ本谷山に向かう。本谷山11:42着。本谷山頂上付近で雷鳴が頭上、横とひっきりなしに鳴っている。雨もきつくなっている。三伏山12:17、豊口山分岐12:45、鳥倉林道登山口13:48、鳥倉P帰着14:17。雷と雨はまだ続いている。所要第1日目5時間38分、第2日目9時間20分。大鹿村の民宿宿泊。(西朋掲示板No.2755)

0823 北アルプス：新穂高口～西穂高岳

【期日】2008. 8. 8(金) 【参加者】橋本

この山は西朋現役時代登っていない。7:00 発のロープウエー。7:20 西穂高口着。7:27 出発。西穂山荘までは樹林ごしに笠が岳が見える。西穂山荘着 8:11。焼、乗鞍、笠、霞沢、明神岳がすばらしい。ついにまた穂高に来た。今から約半世紀前、西朋の先輩・後輩と一緒に青春を過ごした場所が目の前にある。懐かしさがこみ上げる。独標 9:05 着。ここから 7-8 個の小ピークが重なり、軽い岩場の連続となる。ピラミッドピーク 9:31 着。途中でライチョウに出会う。10:19 西穂着。目前にせまった明神、吊尾根、前穂、奥穂が圧倒的である。涸沢岳も見える。頂上で小休後下山開始。西穂山荘 11:38、西穂高口 12:17 帰着。所用 4 時間 50 分。独標から上は高山植物多く、多数の写真を撮る。飛騨側からの穂高の眺めは上高地側のそれとは異なり、これもすばらしいの一言だ。栲尾温泉宿泊。(西朋掲示板 No. 2755)

0824 奥多摩：南秋川 熊倉沢右俣

【期日】2008. 8. 8 (金) 【参加者】青谷, 島田, 小澤, 蒔苗, 他 1 名

夏山(神室連峰)のプレ山行として、沢が初めての小澤君、蒔苗君とどこか近場の沢へとの考えで『東京周辺の沢』の頁を繰っていた。幸いにも青谷さんに日程調整のうえ来ていただくことができ、アプローチも車で余裕が持てることになった。

初心者の 2 人の他に青谷さんに同行の N さんも参加。左俣を分けるあずまやの小一時間手前から川歩きをした。皆さん、身のこなしがよくて一安心。陸軍滝の水しぶきのあがるところで虹および副虹を観察する。右沢を行き CS 滝も楽しく乗り越え、ハセツネカップの通過点として有名という浅間峠で休憩する。左沢の下降点はそれらしくは見えないが、地図を見ると明らかなので、たたたと尾根からおりていく。沢からあがるところで N さんがスレートを持ってきたので青谷さんから奥多摩の地質について話を伺った。

暑い日に川遊び川歩きのまっすぐ延長上にあるようなお手軽な沢を楽しむことができた。

(島田)

0825 中央アルプス：駒ヶ根高原～空木岳

【期日】 2008. 8. 10(日) 【参加者】 橋本

昨日午後から伊那地方は強い雷雨。多量の雨が降った。駒ヶ池より池山方面に行く林道（悪路）を利用して標高 1365m まで行ける。標高 1365m P を 5:30 出発。池山小屋分岐 6:17 着。3 年前にきた時にはなかった立派な水場がある。尻無 6:47 着、マセナギ（一寸したコル）6:53 着。この辺りまで緩やかな登り。これから急登が始まる。迷い尾根 7:41、避難小屋分岐 8:32、ここから灌木帯に入る。右手に宝剣岳が見え出す。空木岳 9:29 着（2864m）。早くも雷雲が北方に現れる。写真を取り、軽食をとってすぐに下山開始、避難小屋分岐 10:09、マセナギ 11:19、尻無 11:23、池山小屋分岐 11:39、P 帰着 12:15。コース全体に高山植物が多く、カニコウモリ、フウロソウ、シモツケソウが満開であった。所用 6 時間 45 分。

今回の夏山は車を使ったもので、縦走とは違い、その分荷物が少なく、比較的楽に行動できた。体力が低下する年代になれば、このような方法であちこちの山に登ることも出来よう。また今回の山旅ではたくさんの写真をとることが出来た。便利なデジカメと重量のある 645 カメラで多くの高山植物を写真に収めた。（西朋掲示板 No. 2755）

0826 新庄神室連峰/WC：土内川銀次郎沢～根ノ先沢左俣右沢～西ノ又川赤岩沢

【期日】2008.8.10(日)～14(木) 【参加者】山野, 松本, 岡田, 上野午, 尾崎, 灘吉, 島田, 小澤, 蒔苗

●コースタイム

8/10 歩き始め 11:45～1241 はきかえ峠～1345 入溪～1426R ～1530 幕営

8/11 発 550～658R ～845 1050m ～955 尾根道～1045 神室山 1140～1228 R 1245～1330 R 1340～1420 根ノ先沢～1600 左俣～1610 幕営

8/12 発 545～652 R710～750 R820m～805～900 1080m～1005 天狗森 1055～1105 小又山 1243～1324 1191m 1335～1423 830m 山の神～1515 幕営

8/13 発 520～640 赤岩沢釜ノ沢二俣 658～847 R905～930 大滝下～左岸巻き～1045 R～1145 R～1426 小又山 1505～1616 山の神～1645 幕営地

●見上げしより厳し (島田 記)

メンバーも多くにぎやかな合宿でした。大学生も大きな沢に参加できて良かったのではないかと思いますがいかがでしたか。自分自身は最後になって厳しいながらも良い経験ができました。参加の皆様に感謝いたします。

11日の土内川, 12日の根ノ先沢左俣右沢, ともにおだやかな溪相が続き, しかも詰めは緩い斜面でヤブ漕ぎもほとんどなく稜線に達することができた。おそらくこれらは東北の沢の優しい一面であって, 大学生で沢が2回目の蒔苗君と小澤君が参加したことを考えるとちょうど良かった。

二日とも尾根の下降をあわせて行動時間は長かったものの, 沢の中で緊張を迫られる時間はなかったためそれほど疲れは感じなかった。さらに言えば, 河原歩きからはじめて美しい釜や深いゴルジュ帯といった様々な要素は詰まっていたものの, 自分にとって想像を超えた何かに自然に圧倒されるという場面がなかったかもしれない。



初日, 銀次郎沢 1P めの休憩



初日の幕場



根ノ先沢のゴルジュ

13日の西ノ又沢赤岩沢では、二段大滝が見えてくるとそのスケールの大きさに素直に感心せざるを得なかった。まとめて左岸を高巻きすることになると、次々と大滝が現れてくるように見えたので、さらに大高巻きにして懸垂であっさり降りる。(これらが登山大系の廻行図で8m, 22mと続く滝であったとすると、その上部は5m滝が連続するなど快適に高度を上げていくことになっているが、大高巻き中はいかにも手強そうな大滝が連続しているように見えた。)

さて、全行程をとおして「実際取り付いてみると見た目より簡単」というパターンで最後までいくのは喜んでよいのかそれとも残念なのかと考えはじめていたのだが、小又山南面の脆い岩から成る詰めでは久々に厳しい経験をした。傾斜やホールド、スタンスの数は日和田山の岩トレの易しいルートと変わらないのだが、落石の素がそこら中にあり、なにより一度つかんだホールドが平気で剥がれる。早いところ左の草付きに入って行ったらどうかという良心の声(岡田さんなど)。自分は既に正面の岩に取り付いてしまっていて途中だったが、一段上がってから左の草付きにトラバースで逃げることは十分可能そうに見えた。しかし…。実際わずか10m程度上ってしまったからのトラバースは傾斜がきつくなっておりまともなスタンスが見あたらない。下から上を見誤った。

傾斜はあっても正面はまだまだ掴み所があったので、正面の壁を行く。頭の高さにある岩のちょっとした張り出しを乗り越せばその上部はブッシュもポツポツと現れ、傾斜も少し緩くなるというポイントで次の一手がなかなかとれなくなった。張り出しの1,2m左にまわりこむにはスタンスが土砂まじりの急斜面となりホールドも見つけられなかったので、ハンマーを渡してもらって岩の間の土面に打ち込み仮のホールドにした。左にも大きな岩の張り出しがあり、体を移してから後傾気味の不安定な姿勢で長い時間をかけてしまったが、なんとか隙間から上部へ乗り越した。短いながらもここが核心となり、尾崎先輩が上部のブッシュで素早く支点をとってからやや下でザイルを垂らした。結局その後リクエストがあってバックマンのカラビナをつかって登り返し、上部でビレイをされた。その先は松本さんのルーファイによって問題なく直上しやや右方のブッシュ帯に入り、やがてヤブの濃い稜線にでてから20分程のヤブ漕ぎで釜ノ沢の源頭を通過しつつ平和な小又山の山頂にでた。

▼ 追伸：話題にのぼった地形図を原寸大印刷するフリーソフトです。

TrekkingMapEditor

<http://tme.yu-yake.com/>

国土地理院の地図閲覧サービスの現行システムに対応しています。

●合宿成功でした（尾崎 記）

今回は 9 名の参加があり、賑やかで楽しい夏山でした。前半ほど平易なルート取りを設定し、大学生も来やすくするのが成功したようです。反面、神室は林道が奥まで延びており、どこからでも出入りしやすい分、良い意味での緊張の持続が難しいと感じました。しかし魅力的なルートはまだたくさんあり、出入りのしやすさを使ってまたたくさんの方で行きましょう。沢が初めての小澤君、蒔苗君いかがでしたでしょうか。島田君充実できたようで良かったです。ホームページに書いたことをそのまま載せます。

8月10日、雷滝の上で登山道を横切る窪から念のため懸垂下降で沢に入る。土内川は最初ゴルジュで遊びながら遡行。溪相おだやかで問題なし。幕営地では9人で夜9時ごろまで焚き火で談笑。

8月11日、4箇所滝はどれも簡単。最初と最後の滝は念のためザイル使用。神室山手前の登山道へ。頂上からは根の先沢出合まで登山道を下り、山野さん、上野先輩、蒔苗君は帰宅。根の先沢左俣に入り良いテン場を見つける。

8月12日、程よい滝がインパクトになって楽しく遡行。10時過ぎ天狗森につき上げる。小又山経由で西の又沢出合へ下降。

8月13日、松本さん、岡田さん、灘吉君、島田君、尾崎で赤岩沢へ。5時20分出発。はじめ容易な滝だが大滝とその上の連瀑帯から左岸巻き。途中からその先にも大きな滝が見える。もう一個の大滝も続けて一気に大高巻き。その間の溪相は不明。連瀑帯を過ぎるとガレがちになる。詰めはもろい岩の垂壁で、厳しかったが充実した登攀。島田君トップお疲れ様でした。小又山南尾根に出てヤブをこぐと、きっかり頂上につきあげる。14時半。

8月14日、釜ノ沢遡行の案もあったが、天気が思わしくなく、昨日の残置ハーケンを回収だけしてきて（往復1時間強）、帰宅。その後大雨。気象情報では記録的な大雨とか。



2日目の快適な宿泊地



根ノ先沢詰め上げ、神室山背景に



赤岩沢の溯行

0827 上越/WC：宝川ナルミズ沢

【期日】2008. 8. 14(木)～16(土) 【参加者】中村, 渡辺, 青谷

車で手軽に行けるところということで、宝川温泉から宝川ナルミズ沢往復の計画。

14日 17:00 雷雨後晴れ 阿佐ヶ谷を車で出発, お盆の渋滞につかまることもなく, 快調に宝川林道車止めまで, ほかに車もなくそこでテント泊。

15日 6:15 曇り時々晴れ 荒れた林道から疲れるトラバース道を渡渉点まで2時間弱。しばらく歩道をたどったあと沢に入る。大石沢出合にてテントを張って荷物をデポする。遡行を継続 9:45。ナメがちの溪相は明るく, トロもせいぜい腰まで。特に困難もなく楽しめる。二股からは右俣をたどり, ナメのつめは草原となって自然に稜線につめあげた 12:30。ここから長い笹原の稜線をたどって朝日岳 14:30。お盆というのに誰もいない。山頂の草原と周囲の展望を3人で独占する。大石沢出合まで, 登山道を下る。焚火と月を眺めて(お酒なし)夜が更ける, 一時雷雨。

16日 小雨後晴れ間 ナルミズ沢をそのまま下降する。ナメや淵の通過, 大岩くぐりなどに遊んで渡渉点まで。そこより登山道に入り, 車止めに戻る 9:20。高速も快調で昼には帰京できた。

喜仁さんは「1冊本を読み終えた気分」とのこと。ナルミズ沢自体は初心者も楽しめる1本だが, 前後のアプローチは意外と長く悪い感じで, 最近でも2件の遭難があったという。

(青谷)

0828 裏岩手：松川温泉～曲崎山～乳頭山～秋田駒

【期日】2008. 8. 15(金)～17(日) 【参加者】岡田

夏山に続けて裏岩手松川温泉～秋田駒の縦走に行ってきました。2泊3日避難小屋泊まり。曇りか晴れ、午後にわか雨でまずまずの天気。近くまで向かってきたという意味ですが、熊に襲われるという珍しい体験しました。危害は無いので念の為。でも沢より怖かった。

遭遇場所は乳頭山から秋田駒方面に下った千手ヶ原付近。今回のコース中では人の多いエリアに近くまさかという感じ。草原状で比較的に見晴らし良い斜面を登る途中、左前方 50～100m先に子供2匹+親1匹（ということはメス？）がこちらに歩いてくるのを発見。やばいと思い、止まって注視していると、向こうも気づき唸り声を出してかなりの速さで近づいてきた。背を向けるのはダメと考え、その場で動きを見ているだけ、子供も後から追いかけてくる。大きさは大型犬ぐらいでそれほど圧倒されるような感じはない。距離数mまで近づいた所で私はウワ～と声を出し、攻撃されないよう相手を見たまま後ろに下がるも、しりもちをついてしまった。しかしその距離で熊は止まって私を見ながら、戦うべき相手では無いと思ったのか子供と一緒に斜め後方にさっさと逃げてしまった。あっという間の事で写真など撮る余裕は無し。その場の状況は以上です。最悪は事故になりかねない状況で、遭遇を避けるようにもっと気を使うべきでした。

(岡田)

=====
なるほど、よく状況がわかりました。

まず子連れグマですから、親熊はメスです。体重はこの時期ですから、せいぜい50kg程度かもしれませぬ。本能的に子供を守ろうとする行動と思われる。子供は多分今年生まれですね。岡田さんの行動は正解でした。まず相手から目をそらさない、後ろを向かない、逃げない。これとまったく同じ対応を秩父で聞きました。「相手が目の前まで迫ってきたが思わずわーと叫ぶと、子供が上の斜面に上がり親もそれを追って行ってしまった」というもの。まったく同じ状況です。最初に数10mの余裕があったことが、お互い？冷静になれる分、よかったです。

(青谷)

=====
千手ヶ原南隣の笹森山と湯森山の間に熊見平という地名を見ました。熊の多いところなのかもしれないうですね。

(尾崎)

0831 北八ヶ岳：麦草峠～縞枯山

【期日】2008. 9. 1(月) 【参加者】橋本, 他

毎年初秋のこの時期は他用が多く、山行が途絶えがちになる。それでも、友人との低山ハイキングなどには極力出席するようにしている。例年8月末頃に奥多摩で行われる西朋祭に出られず残念である。

年配の友人数人とでかける。麦草峠Pに車を置き、10:06 出発。朝から雲行きが怪しい。昨日の雨でコースには水がたまり、またデコボコ石が多く、歩き難い。2232mPの中小場10:45着。ガスが出ており、眺望はない。ここから急登が続き、茶臼山(2384m)11:34着。山頂は眺望無く、近くに展望台があるが割愛して縞枯山(2403m)に向かう。文字どおりの縞枯現象の木々を見ながら、2387mPを通過し、縞枯山12:25着。昼食休憩。ここからの下降も悪路で、大石のあるデコボコ涸沢道である。雨池峠着13:18、木道が続く快適なコースをたどりロープウェイ山頂駅13:40着、ここから、縞枯山の南西面山腹のコースをとり、麦草峠帰着15:37。この下山コースでは、ヤマトリカブトとアキノキリンソウが花盛りであった。(西朋掲示板No. 2796)

0832 上越/WC：登川 米子沢

【期日】2008. 9. 13(土)～14(日) 【参加者】渡辺, 中村, 吉田, 尾崎

本当に久しく西朋の山行に参加したことがなかったが、8月の西朋祭で久々に沢登りの話をしたことがきっかけで今回の山行の計画が持ち上がった。巻機の米子沢は高校の9月山行で行ったことがあったが、20年以上前の話で新鮮な気持ちで上ることができるし、久しぶりの山行復帰には、景色の素晴らしさと行程から考えて適当な沢と思い、9月の連休を使って計画した。

現地には13日の夕方に入り、その日はキャンプ場にてオートキャンパーよろしくレトルトを多用した宴を行い、快適な寝床で一泊した。尾崎君は13日早朝に夜行で現地入りしていたので、割引沢で1日を過ごし、残り3名と現地での合流となった。

事前の天気予報でもこの3連休はところにより激しい雨となるとのことであつたので、天気には気をもんだが、14日は朝からどんよりとした天気だが雨は降っていない。6時過ぎに駐車場を出発した。米子橋下の林道を30分ほど歩き、さらに30分程度河原を歩いたところで溪流シューズに履き替える。さすがに人気のある沢だけにルートははっきりとしており、最初の30mの滝は右岸を高巻き超えることができる。その後も滝が連続して快適に超えることができた。ゴルジュ帯入口のチムニー滝では先行した渡辺さんが左岸を高巻気味にとりついたが、本流に戻るルートが見つからず引き返す羽目になったが、全行程を通じてザイルを必要とする場面もなく、核心部を通過することができた。天気は相変わらず曇りで、上部大ナメはガスの中だったので展望が臨めなかったのは残念であつたが、11時過ぎには上部二股に到着。辺りは、木イチゴが群生しており、木イチゴを頬張りながら源流を目指すことができた。沢の源流からすぐのところが巻機小屋であり、無事遡行終了。昼を食べたのちに、空身で巻機山を往復するころには天気も回復して青空がのぞくようになった。

ここから2時間30分の下りが、運動不足の身にこれほど応えるとは思わなかった。山行前は体力の不安を感じていたが、現実には下りの膝へのダメージで運動不足を思い知らされることになった。急斜面での下りで膝に違和感を感じ始めた後、右ひざが完全に悲鳴を上げ始め、右からの着地ができない。最後1時間半はびっこを引きながら何とか駐車場までたどり着いた。

私にとっては、久しぶりの沢登りの快感を味わうとともに、運動不足を感じる山行となった。
(吉田)

0833 朝日連峰：長井葉山～大朝日岳

【期日】2008. 9. 21(日)～23(火) 【参加者】尾崎

9/21 白兎 9:40～登山口 10:40～11:48 R～13:15 水場分岐～13:35 葉山～14:14 R～15:40 幕営

駅から登る連峰主峰である。山形鉄道白兎駅に 9 時半過ぎ降り立つ。天気は予報より悪く、初日と二日目の昼過ぎまで雨とガスにたたられた。しかし葉山から奥の尾根道は原始の趣がよい。

葉山の登りは本降りの雨。寂しいのでラジオを聴きつつ歩く。山頂手前の水場で、念のため今夜の分の水も確保する。葉山神社ではこれから行く道のが黒雲の中へと続くのをみて躊躇した。容易なエスケープルートも存在しない。「葉山」とは「端山」であり、その奥は信仰の対象となる神様のエリアである。それはこの長井葉山（大朝日岳）然り、羽前葉山（月山）然り。上越・高田平野の青田難波山（など彼の地方には 3 つのなんば山があるらしい。いずれも直江津や高田の町の南はずれにあるからか？）は妙高山が奥山だろうか。葉山山頂奥の湿原地帯は晴れれば気持ちよさそう。現実には終始雨、靴はグチャグチャ、展望はゼロ。それでも歩程はまずまずで、15:40、適地でないが傾斜のないところを選んで道の真ん中に幕営。

夕方小降りになった雨が夜半再び大降りになっている。来る前の予報は大幅にずれ込んで、ラジオでは明日も日中いっぱい雨を伝えている。それでも全体としては回復傾向で、明後日には晴れるだろうか。。明日の行動をどうしようかと煩いつつシュラフに入る。

9/22 発 7:20～9:05 中沢峰～11:20 御影森山～12:10 大沢森水場 12:31～13:22 平岩山～14:05 R～15:00 大朝日岳 15:17～15:30 幕営

1 時間半寝坊してすでに明るい。しかも相変わらず大雨の朝である。ズボンをぬらさぬようパンツの上に直接雨具を着る。もう帰るつもりだが、葉山手前の草薺地帯を再度通過したくない。御影森山から朝日鉱泉に下る手も、先は長い。米子沢に続き、無理して連続したのがばち当たりか。。やはり帰ろう、と決めてテントを出るが、こっちは空はよくなりそうで、あっちの空は絶望的である。望みはよさそうなのが西側であり、天気予報も今日夕方以降は持ち直しそうな点である。乗り気にならず、空とにらめっこしてまた 30 分。。大きく見て、今先に進んで自分は遭難しそうな状況にあるか？ 否である。もう、帰る理由は無い。

道は、所々ヤブがかかったりするが問題ない。焼野平は地形図と違って西を巻く。下って中沢峰東のコルに絶好のテント場発見。水場徒歩 50 秒。晴れた秋の日にも、ぜひ泊まりたいところである。御影森山まではエアリアマップと違って、はっきり表示のある水場は、結局葉山手前とここだけだった。

すぐその後、何か異音がすると思ったら、5～6メートルの距離で熊に遭遇。木の実でも取るのだろうか、3～4メートルよじ登っている。目が合って、双方 1 秒ほど動かなかった。幸い熊は飛

び降りて走り去った。鈴が功を奏したか？私は鈴はザックの肩ベルトか腰ベルトに取り付けている。良く鳴るものは重いようだが、この位置だと安くてちゃっちゃつでもまずまず鳴る気がする。手で鳴らしながら歩くこともできる。胸は高鳴ったがツキノワがかっこよかった。

中沢峰でカクナラ方面への道を分け、北へ下る所はよく刈り払いされており、余裕と思っていたら、鞍部から先は急にヤブ漕ぎになる。進むほどヤブは濃くなり、胸くらいの笹を分けるようなこともある。ルートをはずさない限り足もとの抵抗や笹の葉の高さでかなりわかる程度ではある。しかし前御影森手前で一度道を失う。展望皆無で雨は変わらず。やべえなあと思った。とりあえず戻って消去法で進路を探る。ヤブこぎは御影森山まで続いた。

御影森山からは鉱泉に下りず大朝日目指す。まだ展望ないけれど夏道は極楽である。水場下降点で大休止。今日は大朝日小屋止まりになりそうだが、水は何とかなりそうであり、濡れた斜面を下るのがめんどくさいので汲みには行かない。平岩山を過ぎ、知っている道に出ると安心感はさらに増す。構造土状の地表面が興味を引く。空気も乾いてきたと思えばらくすると、大朝日の登りにさしかかったあたりで劇的な天候急転。一気に青空が広がる。橙色の陽射しがまぶしく、稜線上部でちょぼちょぼ始まった紅葉が映えている。

大朝日岳では感動の大展望。荒川を遡行してきたという若者 2 人に会う。しばしたたずみ朝日小屋にて幕営。夜半は西風がかなり強かった。

9/23 発 7:30~10:24 古寺鉱泉

3 日目午前は、昨夕小屋で会った地元の方と、西朝日岳周辺の植生回復ボランティアに参加する予定。実のできるこの時期、それを採取して裸地化した部分に菰を敷いて播種する作業である。

「よかったら、加われえ。そんで、昼前には降り始めるから、それで山形まで連れてったから」こんな感じの山形弁で昨夕誘われた。朝日鉱泉下流の白滝へ下り、林道を歩いて 13 時 20 分の宮宿発バスで早々帰りたかったが、これもまた貴重なチャンスと参加表明した。だが、朝は普通に立てないほどの西風で、作業は中止となってしまふ。一緒に古寺鉱泉へ 3 時間で下り、風呂の後、お彼岸だから実家に寄ってけと。ずんだ餅、煮物、漬物と、観光じみずコマース的な雰囲気微塵もない郷土の料理をご馳走になり、山形駅まで送迎つき。もらった割引券で新幹線は 4 割引である。まったくいいとこ取りの下山日となってしまふ。荒川遡行の 2 人パーティも、ボランティアの別の人に送ってもらっていた。地元の方の心行きにたいへん感謝の山行であった。

0835 富士山：須走り口～剣ヶ峰

【期日】2008. 10. 2(木) 【参加者】橋本

既に富士山は冠雪が観測され、今年最後の登山のチャンスを待っていた。昨日からの台風の進路がずれ、本日が好天の予報、急遽出かける。朝の須走り新5合目Pは気温1℃で寒い。6:00 出発。7合目7:50。樹林帯ではナナカマドの赤い実とダケカンバの黄葉が目を楽しませる。風が弱く、好天に恵まれ気温が上昇してきた。本7合目見晴館8:20、本8合目御来光館9:09、久須志神社9:51着。8合目付近から積雪があり、コースは凍結している。アイゼンは不要。小休の後、お鉢めぐりに出かける。剣ヶ峰10:29着。久須志神社10:55着、8合目江戸屋まで下山したが、吉田口下山道に入ってしまった。若干トラバースして須走コースに復帰。7合目太陽館より砂走り下山ルートを取り、1ピッチで新5合目P帰着12:44。登り3時間51分、お鉢めぐり1時間04分、下り1時間49分、所要計6時間44分。

富士山は登りはともかく、下山がきついで、もうこんな山は金輪際登りたくないと思うが、また暫くすると登りたくなる、不思議な山だ。(西朋掲示版 No. 2796)

0836 東北の山旅：甑山・甑岳・黒伏山・丁岳・翁山

【期日】2008. 10. 11(土)～14(火) 【参加者】岡田

10/11-14 の4日間、車で東北の紅葉を楽しむ山旅に行きました。登ったのは甑山と甑岳（村山市近郊と秋田山形県境にある別々の2つの山）、黒伏山、丁岳、翁山です。初日以外は晴れか曇りで山の展望も楽しめました。夏の沢合宿で行った神室連山が大きく眺められ、延々と連なる様子にその存在感を再認識しました。この辺の日帰り温泉入浴は安いですねえ～。道の駅泊まりなのでさほどお金はかかりません。

丁岳はアルペンガイドに乗っている岩尾根縦走コースがあつて駐車場から一周できます。一般登山道なので問題はなかったですが、急斜面やヤセ尾根など要注意箇所はあります。付近には道無き岩峰も結構あるのかも。他の登山者によると毎年9月に刈払いするらしく、ヤブは無かったです。夏後半はヤブがうるさくなるのかも。

11/1-3 日光白根南尾根縦走もなかなか行きにくい所なので私も参加したいと思っています。こういう渋い所は若い方は興味湧かないでしょうか？ 私個人的には白根～皇海を全部縦走してすっきりしたいのですが、確かにメンバー多く集まったほうが良いので、相談して決めてください。私もこの部分はまったく行ってないので、沢＋一部の縦走でも参加はしたいと思っています。

(岡田)

0837 北アルプス：餓鬼岳・唐沢岳

【期日】2008. 10. 12(日)～13(月) 【参加者】尾崎

10/12

中房 6:10～9:22 東沢乗越～10:30 東沢岳～11:31 R～ケンズリ偵察～14:23 餓鬼小屋幕営

昨年末、釣魚尾根から挑んだ餓鬼岳は悪天で敗退。実質の試登となった。今回はケンズリ、唐沢岳、百曲がりの地形と登高ルート、釣魚尾根分岐点の偵察を目的に、連休の後ろ 2 日を使って出かけた。

今回のルートは、地図で見た以上に細かいアップダウンが多かった。中房温泉から東沢乗越の道も、東沢左岸の道は数度の登り下りをへて、ようやく乗越への本格的な登りとなる。ここで今夜の分の水を汲む。海外出張の直後だからだろうザックの重みがこたえる。この登りは、最下部以外は、急で無木立の広い窪状を詰めるもので、熊笹帯を縫って行く。冬季は積雪によっては雪崩れそうであり、左岸（窪には水流はないが）のヤブ尾根に行くしかなさそうである。

東沢乗越から東沢岳を経て、ケンズリ直下の鞍部までは問題なしと思われた。ケンズリは、南のコルにザックをおいて下部を直登してみた。最初のうちは急なヤブ漕ぎだが、それ以外は何とかなりそう。ヤブはうるさいがゴミを見たり、不自然な枝折れを見たりして、人が通った形跡も否定できない。遠目にみたときももっとも立っていたところは、傾斜 45° ほど距離にして数メートルのフェイス状であるが、左右に岩や立ち木があり、露出感はあまりない。ケンズリから下降してくることを想定していたので、懸垂下降となろう。遠望した限り、この岩の上は傾斜が弱まると思われる。ここで、引き返す。

夏の巻き道は、樹林帯からガレを横切り、再び樹林帯からかなり巻いているので、積雪期の使用はためらわれる。再び稜線に上がった後、ケンズリ頂上にも寄ってみたが、何とかかなりそうな気はした。むしろ、ここから餓鬼岳小屋までの間が、見た限り尾根筋には岩峰が多く、夏道は西面に栈道が続き、所によっては下方を巻き気味なので、冬は雪の積もり具合や天候によって注意を要すると感じた。餓鬼小屋の若い管理人に冬季の状況や、ケンズリに昔あったという尾根沿いの道について聞いたものの、まったく情報を得られずじまい。頂上往復してテン場に戻る。安曇野の夜景と月明かりがきれいな夜だ。

10/13

発 4:55～7:06 唐沢岳 7:20～9:36 餓鬼テン場 10:07～14:28 白沢登山口～15:45 信濃常盤駅

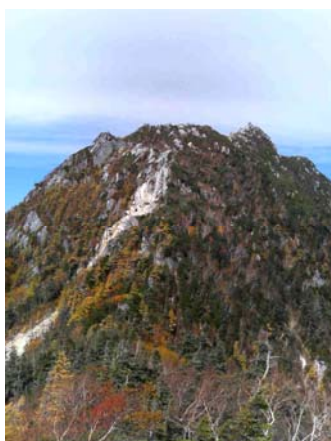
暗いうちから歩き始め、小屋のトイレの前を通過して餓鬼岳を巻く。これは冬季は稜線上となる

か。餓鬼のコブを見下ろす大きな下りは、上部はハイマツ帯であり、北西向きであるので、冬はカリカリにクラストするのだろうか。下部は樹林帯に入り、餓鬼のコブ頂上でいったん樹林を抜ける。そこから岩峰の南側を巻き下り、樹林帯を行く。

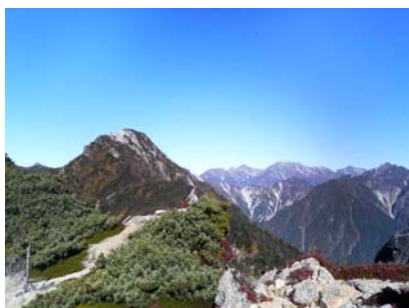
唐沢岳との最低鞍部付近まで達し、唐沢岳が近く見えてからが、案外長かった。のっぺりした岩場の斜上、ナギ縁の通過をして、いよいよ頂上かと思うが、道はさらに南面を巻いている。急な岩混じりの右上となり、頂上の一角に上がる。

頂上からは、針ノ木から裏銀座の山々が高瀬溪谷のすぐ向こうに見える。針ノ木岳は黒い姿がかっこいい。その裏手の剣立山は風格がある。野口五郎は朝日に赤く、あんなにおおらかで、何年経っても変わらぬ大きな姿をみせている。自分もそんなふうになりたいと思った。足元に見える唐沢岳西尾根は問題無さそうで、近い将来、正月のルート候補になりそうだ。

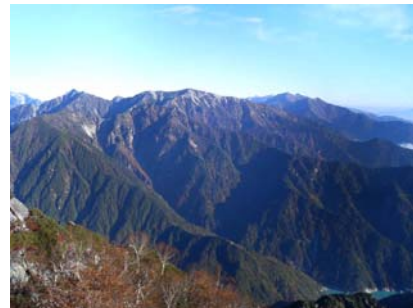
餓鬼岳への戻りは、唐沢岳頂上から頂上手前の岩峰群南面の巻きへの下降点が不明瞭であり、急である。マーキングはあるが、右に強引に下る印象があり、ハイマツ部分に入るまでも、道のつき方が不自然でもある。そしてダケカンバ帯に入っても急なので、状況次第で懸垂下降が出るかもしれない。その他の部分は、おおむね歩きに終始するが、唐沢岳頂上付近の通過は時間を要するのではないかとの印象を得た。



ケンズリ南側の岩場



唐沢岳は見た目以上に遠い



後立山南部の山々

次の偵察ポイントは百曲がりの急下降と釣魚尾根の分岐点である。ここでは、あくまで自分が歩いた夏道の下りをもとにして状況を書く。まず、餓鬼小屋から夏道は頂上南東面をトラバースするが、冬季は積雪量次第であるが、頂上から尾根沿いを直接下降するほうが良いだろう。トラバースが終了して前方に平坦部が見えるところで、道は右へカール状のカンバ疎林へ入るので、積雪期は尾根沿いに下るのが良いだろう。尾根はこの部分は急なので、完全に尾根上というより、リッジを左に見ながらなるべくカール内に入らないように下ることになりそうだ。それが終わると、夏道はいったん尾根上に戻る。その場所には立派な枝を斜め上向きに張った白樺(?)や太めの黒木が数本生えている。ちょうど、2万5千円では下からきた尾根が急斜面に吸い込まれる、

「百曲がり」の「百」の字あたり。そこから夏道は、上から見下ろして尾根左の急なカール状で笹の生えた疎林帯に入る。ここも冬は尾根沿いに行くべきだと考える。夏道は右に尾根状をみながらジグザグにカール内を下っていき、やがて右の尾根上に戻る。百曲がりの前後は、夏道は 2 万 5 千図の記載とは違う位置にあった。百曲がりは地図では尾根が続いていないように見えるが、現場を見た印象としては、実際は尾根がつながっているようだった。雪が積もればまた違った印象となるかもしれないが、地図の印象と比べて何とかなりそうだ。ただし、ここを下る場合、最初（夏道が頂上トラバースを終えた所から右へ下って岩場を巻き気味となる所）の下降は急である。冬には岩壁基部に行くことになるのか、その時でないとは完全にはわからない。

続く釣魚尾根の分岐点は地形が不明確で、かつての道の名残も見つからなかった。地形図では、百曲がり後の 2 度目の小さな登り返しである。しかし 1 度目の登り返しが小さすぎ、釣魚尾根分岐の登り返しを 1 度目と間違えそう。今回は、よくよく確認した 2 度目のピーク付近に竹竿数本を見つけたこと、その先で大きな下りに入ったこと、その後右手に顕著な尾根が見えたので確証をもてた。今回は分岐点（と思われる場所）に、拾った竹竿とテーピング（白）でマークを残した。赤布を持ってくれば良かった。その竹竿は、昨冬の水戸葵山岳会のものだろうか。。。

夏道は大風山北のコル(2050m ピークとの鞍部)まで下らず肩から直接魚止めの滝に下っている。その道は樹林帯の強引な切り開きの後、落石の起きそうな窪状急斜面を長く下り、左右へと数度の変なトラバースもあつたりして、不自然に思う所が多い。北コルまで行って沢筋を下るのが自然に思うが、出水で荒れるのだろうか。沢まで下っても、ハシゴの登り返しや枝沢の栈道トラバースなどで気を抜けないし、下山口間近も新しい登り返しがあつたりで、なかなか大変な道だった。

林道から信濃常盤駅まで歩いて 1 時間 15 分だった。国営アルプス安曇野公園の建設現場で、山麓に似つかない幅広直線道に合流した。ふだんは重機が騒音と土埃を揚げていますか？（今日は休工）原生林が切り開かれ、広大な駐車場やオートキャンプ場、森の体験館など、何処に作っても同じものが出来そうな、お仕着せ施設が喜ばれる時代だろうか？

ケンズリの通過、唐沢岳頂上付近、いずれも荒天時の通過は厳しいものになりそうで、晴天をねらったフレキシブルな計画設定が望まれるかもしれない。

0838 中央沿線：笹子近辺の小径ルート

【期日】2008. 10. 12 (日) 【参加者】中村

笹子→中尾根の頭→笹子峠→笹子雁ヶ腹摺山頂手前の藪尾根→甲斐大和、半日コースです。CASIO の高度計テスト主眼ですが、唯一標高の判る中尾根の頭 (1278m) で 1265m を表示しました。約 600m で 15m 位の誤差なら腕時計兼用の品でも使えるな、というのが感想でした。

0839 南大菩薩：大谷ヶ丸

【期日】2008. 10. 12 (日) 【参加者】青谷, 他 1

柳沢川から錫が岳など魅力的ですが、11 月の連休は学校行事があり参加できません。足尾周辺の山中は結構、野生動物 (特にクマやシカ) の生息密度が高いので、まあ鈴でもぶらさげていってください。間藤からは、渡良瀬溪谷鉄道で結構不便ですが、日光に出るバスもあります。

さて、10 月の連休でしたが、12 日日帰りでこちらは息子を伴って、曲り沢～大谷が丸 に行っていました。特別なところもなく、きのこ狩りと岩魚釣りを楽しんできました。中村さんとはニアミスでしたね。

0840 箱根：地蔵堂～金時山

【期日】2008. 10. 31 (金) 【参加者】橋本, 他

友人数人と紅葉見物を兼ねて、地蔵堂から入る。丸鉢山経由で金時山 (1213m) に登る。帰途は仙石原に下山し、箱根の湯につかる。見事なリンドウやノコンギク、シラヤマギクが花盛りであった。所要 4 時間。(西朋掲示板 No. 2796)

0841 日光・足尾山塊/WC&VR：柳沢川右俣～錫ヶ岳～国境平

【期日】2008. 11. 1(土)～3(月) 【参加者】中村, 松本, 岡田, 尾崎, 他 1

11/1 西ノ湖入口 11:30～赤岩滝分岐 12:57～15:55 幕営

初日、西ノ湖入り口でハイブリッドバスを降り、柳沢川へ入る。天気は抜群。しかし稜線には雪が見え、風が冷たく、これから沢登りかと思うとちょっと気が引けてくる。しかし柳沢川は水量少なく、右俣は美しい滝が連続する。1ヶ所、右より入る滝が水量多く、どちらに行くか気を使う。ここは左に入り大滝を左より巻くと、再び美しい滝が続く。どれもザイルを使わず、足先と手先が少し濡れるくらいで突破できる。最後のスダレ状ナメ滝を越えると、背後で中禅寺湖の遊覧船が輝いている。滝場が終わると雪を踏む。上空、晴れているが千切れ雲から小雪も舞ってくる。沢靴のフェルトは歩きながら凍っていた。

窪をつめると、突然ごぼごぼと水が湧き出す所で水流が終わり、その上はまっ平になっている。いやはや最高の幕場。夜の帳があたりを覆う頃、降る星空に焚き火が揺れた。



柳沢川右俣



楽しい沢登り



幕営地にて

11/2 発 6:02～錫ヶ岳 7:56～12:15 宿堂坊山～13:36 三俣山北コル～15:45 三俣山

2日目は登山靴を履き、水を汲んで6時出発。窪を左寄りに詰めると、1時間ほどで稜線に出る。シラビソ幼樹から落ちる雪を浴びる。マイナーピーク錫ヶ岳を踏まぬわけに行くまいと、空身でアタックへ。頂上付近で凍った池を見る。北にはうっすらと新雪の白根山が、南望するとこれから行く笹尾根が見渡せ、それがうねりつつ皇海山まで続く。右の上州武尊との間に八ヶ岳そして富士山も。

尾根上は、ところどころに踏み跡がある程度だが、笹もそれほど深くなく、快適に歩ける。ルートは木にプレートがかなり打ち付けてあり、ほとんど迷うこともない。味のある道標も多く見かけた。

宿堂坊山の頂上はいい所だ。しかしそこから長かった。三俣山との最低鞍部で13時半。次の水

場は確実なのはカモシカ平だが、今日はそこまで行き着けない。今夜用の水をここで汲むことにして、岡田さんと尾崎で東の緩い窪を下ってみる。途中、鹿道か何かの踏み跡が交錯するが人が通った跡はあまりない。だいぶ下る必要があるかと心配したが、7~8分で水を得た。三俣山に向けて歩き始めると、ちょっとした盛り上がりを超えた所に明るい笹原がありテン場跡と水場標識が出ていた。さっきの方が窪が良く見え降りる気持ちになるのだが。これは先ほどの小窪の隣の沢のようだが、いずれにしろ両者すぐに合わさりそうな感じだ。

三俣山への登りは結構長いが、森の雰囲気はよい。15時半をまわっており、今日は頂上で張ることとした。焚き火はしなかったが、テント内でくつろぐのもまた楽しい夜だ。



皇海山遠望



後ろは錫ヶ岳と白根山



三俣山頂上

11/3 発 5:48~8:50 国境平~10:06 ニゴリ沢~14:48 林道~15:52 親銅公園

雲が多いが、天気は問題なし。今日も笹尾根をかき分けて進む。かなり皇海山が近づいてきた。オオノゾキを振り返ると、「もののけ姫」で森が再生する前のシーンを思い出す。カモシカ平は、気持ちのいいテント場で、個人的には国境平より気に入った。

下山に使ったもみじ尾根は、その名のとおりきれいな紅葉が残っていた。松木川はすさまじい自然破壊の跡、増水時のすさまじさを見ながら下る。ひしゃげたシャベルカーが岩に埋もれているのを見て、「天空の城ラピュタ」を思い出した。グランドキャニオンのような荒漠とした渓谷、砂漠のような黒い斜面。この色は足尾銅山の鉱滓の山だった。帰りはわたらせ渓谷鉄道にのってのんびりと帰った。時間が遅く周りは真っ暗だったが、昼の景色はきっとすばらしいことだろう。沢のぼり、雪、そして紅葉と社会勉強もあった楽しく充実した山行でした。(松本・尾崎 記)



笹尾根の縦走



カモシカ平



松木川を下る

0842 奥秩父：西沢溪谷～甲武信岳

【期日】2008. 11. 6(木) 【参加者】橋本

例年秋季は他用が多く、山行が難しくなる。逆に言えば、山行は急病や他用があるとすぐに中止となってしまふ。今年は年末に風邪をひき、今回報告の甲武信岳 11 月山行が最後となったが、これまでに報告していない低山ハイキングなどを含めると、山行回数は年間約 30 回位になる。山に行けることがいかにすばらしいことか再認識する。

西沢溪谷 P 付近は紅葉が美しい。朝の気温 3℃。6:32 P 出発。標高 1500m 位まで見事なカラマツの黄葉で、風が吹くたびに黄色い落葉が雨のように音も無く落ちてくる。戸渡尾根分岐 8:13、2111m ピーク付近はアズマシャクナゲの多いところだが、全山紅葉のなか、ここだけはコメツガとともに緑の葉が鮮やかである。稜線 9:31 着。甲武信岳 (2475m) 着 10:04。空気が澄んでいるせいか、すばらしい眺めだ。北ア、中央ア、八ヶ岳、南アの甲斐駒ヶ岳、北岳、金峰山、富士山がくっきりと見える。山頂には今回はナナカマドの姿は無い。写真をとり、軽食をとってすぐ下山開始。戸渡尾根分岐 11:34 着。2111m ピークからの下山路が落葉にうもれ、コースを見失う。かなり左よりに獣道の急斜面を下った。正常のコース復帰には多数の大木の倒木帯を横断し、右の鶏冠尾根側に回り込み、シャクナゲのブッシュを突破する。しかし、ここで復帰できた気の緩みから、落葉に足をとられ、転倒の際、とっさに手にした立ち木の突起で手指を切り、応急手当をした(ルートから外れた気のあせりと手袋をしていなかった不注意)。この甲武信岳のコースは特に下山では、急斜面上や露出した木の根上に秋季は落葉が堆積しており、危険箇所が多く、足首の捻挫や転倒事故が多い。標高 1600m 付近で、今朝、登りで出合った下山中の若い人を小生が下山中に追い越した！が、様子がおかしいのでたずねると、足を捻挫したとのこと、痛そうに歩いており、何か援助しようと思ったが自身も手指を怪我しており、かなり痛みがひどくなっていたのと、コースをはずれて復帰するのに体力を消耗していたので、そのまま失礼した。荷物くらいは持ってやるべきだったか反省している。西沢 P 帰着 12:45。登り 3 ピッチ半、下り 1 ピッチ、所要 6 時間 13 分。(西朋掲示板 No. 2852)

0843 上越：カドナミ尾根～荒沢山

【期日】2008. 12. 14(日) 【参加者】山野, 尾崎, 中山

天気が悪そうだとこの予報の元、谷川岳天神尾根は中止し、土樽から荒沢岳（1302.7m）に変更しました。

山野が車で行ったのですが、集合時間に遅れたため、出発が9時50分になりました。雪が少し降っていましたが、ほとんどやんでいました。風はほとんどなかった。夏道はかなりはっきりわかりました。登りは落ち葉の上に雪が5cmくらい積もっていて下が粘土で急登の所は滑って半分木登りのようでした。藪コギも結構大変でした。

頂上が3時頃、雪は10cmくらいでした。生姜入りミルクティーを飲んで下山しました。足拍子岳が近くに見えましたが、稜線は一癖ありそうです。下りの途中で暗くなりヘッドランプをつけました。半分滑りながら下り、土樽駅に5時50分ごろ到着。

尾崎さん、中山さんは列車で、山野は車で帰りました。

今回は藪コギが大変だったなどの印象でした。天気は必ずしもパツとしませんでしたが、予報よりは良く、ピークに立てたのは、良かったです。もともと予定していた谷川岳方面は、終日ガスの中でした。

2人ご苦労さんでした。山野が遅れたため、下山が暗くなり申し訳ありませんでした。（山野）

少し遅くなりましたが、こちらからも参加者としてご報告いたします。山野さんの文章にもあるとおり、雪は少なく、滑りやすく、藪の濃い道でした。藪コギが二回目と不慣れなためか赤旗を藪に引っ掛けることが多く、ここで想定外に力を使い、ペースを落としてしまったと思います。結局冬山の装備としては、ピッケルのみ使用しました。頂上直前のみ先頭を歩かせてもらいました。一瞬ながらルートや足の置き場を判断する難しさを感じました。卒論が終わったらまた参加したいと思います。お疲れさまでした。（中山）



荒沢山頂上で、足拍子岳バック

0846 南アルプス/VR：聖岳東尾根～上河内岳

【期日】2008. 12. 27(土)～31(水) 【参加者】松本, 尾崎

12/27 金谷＝千頭＝畑薙第一ダム沼平ゲート 9:10～9:50 大吊橋 10:05～11:05R11:20～12:30R12:42～13:33 聖沢橋 R～14:28 出合所小屋跡

入山日。畑薙からいつもの長い歩きである。林道には雪はないが、赤石ダム付近で聖岳を高く望んだ。雪煙があがっており、風は強そうだ。聖沢登山口より一登りで出合小屋跡へ。もう小屋はなかった。地面は一面雪に覆われるようになってきたが、水を取れる平坦地で快適。焚き火で燃料を節約した。

12/28 発 6:15～7:08R1580m～8:15R1750m～9:10R1910m～10:21R2070m～11:10JP11:30～12:33R～13:39R13:48～14:53R～15:43 白蓬の頭（幕）

小屋跡より直接登高を開始し、淡々と登りつめていく。赤布も沢山つけられていて、登りに関しては迷うことは無い。2250mのJPでワカンをつけ、いよいよラッセルが本格化する。夏の踏み跡は北寄りに付けられていることが多いが、ぼこぼこ潜る。なるべく南寄りを絡んで進むと雪が締まっている。長丁場のラッセルをこなし15時半過ぎにようやく白蓬の頭へ。付近は針葉樹林で良い幕営地だった。

12/29 発 6:18～アイゼン付け 7:15～8:25R～9:45R～10:41 聖岳～11:40R～13:22 聖平～15:10R～16:00 2430m 付近

日本海に低気圧が入って冬型が崩れ、絶好の登頂日和だ。森林限界付近で日の出を迎える。ワカンからアイゼンに換え、快適な雪稜の登高となる。とはいえアイゼンではけっこう潜るので、なかなか辛い登りでもある。右手側から風も強い。赤石岳がけっこう近い。上河内岳は名前は有名ではないけれど、どっしりとしたいい山だ。まだまだ先は長い。今日中に越えられるだろうか？

奥聖岳が高く見えてくると、手前に核心部の雪稜が立っている。豪快な風景で、いいルートだと思う。奥聖手前の雪稜は右下からの稜線を登る。傾斜は見た目ほどでなく、ロープの必要性は感じなかった。

聖から雪の少ない大斜面をザクザク下る。この頃空に雲が広がったが、幸い崩れるには至らない。視界がないと迷うかもしれない大斜面だ。メインを越えて先行トレースも現れたためか、2



核心部手前での休憩

人ともペースが落ちる。眼下に見える聖平は案外遠い。

気を抜いたが甘くはなかった。トレースは西沢渡からの往復らしく、聖平を過ぎると消えてしまう。昨今縦走者は少ないのか。再び深いラッセルを強いられ、今日中の上河内岳越えは断念。途中 2400m 付近の二重山稜を目標とする。辛いラッセルが続いたが、西日に照らされ進む雰囲気は充実した一日を締めくくるにふさわしい。16 時、窪地内の快適な場所を見つけて幕とする。このあたり、夏道の様子はまったくなく、東面を巻いているようである。

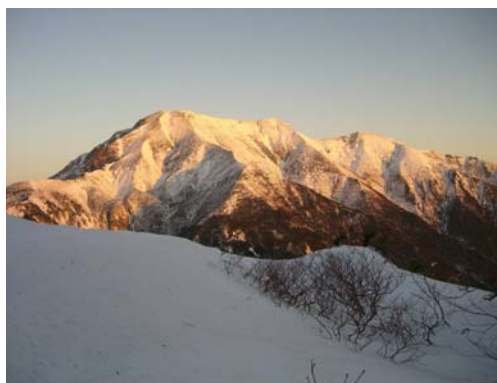


聖岳頂上。背景は赤石岳。

12/30 発 6:05~7:00R アイゼン付け~8:14 主稜線~9:21 直下(上河内岳ピーク往復)10:00~10:40 亀甲状土地帯~11:37 下降点~13:00 夏道~14:25 横窪沢小屋 14:36~15:25 ウソッコ小屋

今日は天気はよいが、風が強い。朝日に赤く染まるどっしりとした聖岳を背に、急な斜面を登ると、上河内岳の肩に着く。そこで空身になり、頂上を往復する。上河内の下りで茶臼からの縦走者 2 名とすれ違う。今回初めて見る登山者で、こちらは人懐かしいのだが、強風でお互い話している余裕もなく、すれ違う。

その後の稜線も強風にあおられ、なかなか行程がはかどらない。東側の斜面に回りこめば風もなくなり、穏やかな日差しが暖かい。茶臼小屋には寄らず、直接尾根を降りるルートを選ぶ。適当に降りても、小屋へトラバースするトレースにぶつかるはず、と下り続けるが、そのうち尾根がなくなってしまう。もう一本、左の尾根にトラバースして戻る。トレースがないということは、上河内の上ですれちがった 2 人はどこから登ってきたのだろうと不思議に思ってさらに下ると、かなり下でトレースにぶつかる。夏道は、地図とは異なりかなり下で尾根からはずれてついているようだ。



朝日に染まる聖岳と東尾根

後は、急な尾根道ひたすら下って、ウソッコ小屋まで。雪は次第に少なくなり、落ち葉の道に変わっていった。

12/31 発 5:52~6:40R~7:20 ヤレヤレ峠 7:31~8:00 畑薙大吊橋~8:40 沼平 9:06~9:56R~10:35 畑薙第二ダム(白樺荘)バス停=井川=千頭=金谷

もう降りてきたとはいえ、まだ行程は少しある。バスの時間に間に合うように暗いうちから歩き出す。ヤレヤレ峠への登りでは、さっきの沢をそのまま下って、今は広い河原になっているダ

ムをわたって林道に行けば早かったかななどと考えてしまう。

大吊橋の下の水のない広い河原には、流木が大量にあり、あれを積み上げて、壮大な焚き火をしたいななどと、焚き火にすっかり洗脳された頭で考えてしまう。

やっとなつた白樺荘は、年末で営業もしておらず、それでもバスはやって来た。小さいマイクロバスで、井川まで、お客はわれわれ以外にだれもない。去年までは路線バスだったが、採算にあわず、自治体による運営に変わったとのこと。白樺荘も少し上の山が見えるところに宿泊施設付に新しくなるとのことで、そうすれば少しはお客が増えるかもしれない。

井川からは、トロッコ列車に乗り、SL を見学し、レトロな電車と、すっかり観光客気分です、大晦日の電車の旅を堪能しながら、帰京した。

(松本・尾崎)

0847 丹沢：戸沢～塔ノ岳・丹沢山

【期日】2009. 1. 2(金) 【参加者】橋本

まだ老け込む歳とは思えないが、徐々に体力が低下しているのが山行で判る。登りも当然だが、殊に、降りの歩行の力が落ちている。トレーニングの積りで、降りは休憩を取らずに一気に下山を心がける。特に急ぐ必要はない。

地球温暖化が叫ばれて久しい。低山だが、冬山に入るとこれが実感される。山に雪が少ない、例年凍結している場所に氷がない・・・など、その経験は多い。

例年正月に丹沢に行く。取り付き点の戸沢は朝-2℃。6:57 出発。源次郎沢を左にみて書策新道に入る。本谷沢との出会いを過ぎ、セドノ沢沿いに登るところはややルートがはっきりしないがペンキを注意深く追う。新春にキラキラ輝く相模湾が美しい。大島、利島、新島と三宅島が見える。8:23 書策小屋着。表尾根稜線上や北斜面にも雪はない。塔の岳(1491m)9:03 着。北西の風がきつい。尊仏小屋の裏の北斜面にも雪がなく歩きやすい。丹沢山(1567m)9:51 着。軽食をとり、すぐに引き返す。西風が強くなってきた。塔の岳 10:41 着。下山は花立より天神尾根を下る。この時代でもボッカがいるのか、天神尾根では、カラミのボッカと灯油を担いで登ってくるボッカに出合った。戸沢 11:46 着。所要 4 時間 49 分 (西朋掲示板 No. 2897)

0848 道志：山伏峠～御正体山

【期日】2009. 1. 7(水) 【参加者】橋本

山伏峠Pは朝-4℃。昨年2月に来たときはこの辺一帯は積雪 60cm 位だったが、今年は全く雪が無い。トンネルの東出口に引き返し、山伏峠 7:06 出発。石割山への分岐 7:32 着、奥ノ岳(1371m)7:39、鉄塔 7:43 着。コース上には雪なし。中ノ岳(1411m)8:06、前ノ岳(1471m)8:29、この辺は標高差 150m 内外の急登が連続する。前ノ岳を過ぎ、やや平坦なところでは積雪数 cm。ブナ、ツガ、モミの巨木が美しい。ミズナラも多い。御正体山(1682m)9:01 着。軽食をとりすぐ下山開始。左手に光る山中湖、正面にはレンズ雲がかかった富士山。山伏峠 10:32 帰着。登り 2 ピッチ 1 時間 55 分、降り 1 ピッチ 1 時間 31 分、所要 3 時間 26 分 (西朋掲示板 No. 2897)

0850 丹沢：箒沢～檜洞丸

【期日】2009. 1. 27(火) 【参加者】橋本

西丹沢 P7:00 出発、気温-3℃。ゴーラ沢出会 7:37 着。途中例年見られるミツマタはやっと白い蕾。標高 1000m の展望園地少し下部よりアイゼン着用。ツツジ尾根は尾根の北西を登るが、ルートは積雪が凍結。稜線 9:05 着。木道両側のブナが美しい。木々の間から、南アと富士山。檜洞丸 (1601m) 9:20 着。山頂直下でシカ 5 頭。写真と軽食をとり下山開始。ゴーラ沢出会 10:26、西丹沢 P10:53。登り 2 ピッチ、降り 1 ピッチ、所要 3 時間 53 分。(西朋掲示板 No. 2897)

0851 那須/VR：朝日岳東南稜敗退

【期日】2009. 2. 7(土)～8(日) 【参加者】山野, 松本, 尾崎

当日は強風で敗退, 下山中に滑落者の救助依頼を受けた。敗退を決めた時と救助依頼の一致のタイミングは不思議でもある。以下, ホームページの記録を記載します。

=====

●那須より, 下山連絡あり (島田)

17:50 分頃、大丸温泉へ無事下山したと連絡がありました。ただし、強風で引き返す途中、別パーティーの滑落者の救助を行ったということです。滑落した方は意識もあり救急車で搬送されたとのこと。

下界もかなりの強風でした。大変であったろうと思われます。詳しい状況など、教えてください。

=====

●まずご連絡 (尾崎)

島田君連絡先ありがとうございました。電話が遅くなってすみませんでした。私達も強風のため朝日岳には登れませんでした。

下山報告にあるとおり、救助を手伝いまして、近いうちに詳細を報告します。事故者は外傷や出血もなく意識ははっきりしていたし、車道まで登りも無く近かったので、救助側にとっても幸運といえば幸運でした。

私の感じていることは、救助経験の立場だけでなく、山行前に自分の緊張感が無かったことを山に見透かされた気持ちや、事故が他人事と思えないことなどで、気持ちが萎んでいます。まさに他山の石だということも確かです。

事故パーティーのリーダーから電話がありました。事故の方、命には別状無いそうです。ただし、肋骨、鎖骨、背骨骨折とのこと。山野さん、松本さんにもお礼を伝えてくださいと言われました。

=====

●反省 (松本)

山野さん、尾崎さん 本当に御苦労さまでした。

私にとっては、緊張感なく、ということにはなかったです。メンバーに頼っていたということはあるかもしれませんが。久々の冬の岩場ということでそれなりに緊張はしていました。天気はまったくの誤算でした。小さな低気圧が北部を通過することは予想されていたのですが、それほど発達せず、すぐに次の高気圧に覆われるという予想でした。したがって、暖かい日差しのなか、楽しい岩登りを考えていたのは事実です。それを甘かったと言え言えるでしょう。予想に反し、低気圧が発達し、短時間でしたが、強い冬型になり、各地で強風を発生させた。ただでさえ、強風で有名な那須岳ですので、結構厳しい気象条件になりました。現地でも、天気が回復する期待を持って、取り付きまで行ったのですが、回復の兆しが見られないことから登攀を中止した判断は間違っていなかったと思います。

登攀をあきらめて、早めにおりて、温泉に入って帰ろうと強風にあおられながら下りていると、下からひとり岩場に落ちて動けないので救助をお願いしたいと要請がありました。事故を起こした3人パーティの残りの2人と、別パーティの4人、我々3人の8人で、簡単に役割分担をして、登攀装備を持っている我々がとにかく現場に向かうということにしました。

その活動で一番の問題点は、二重遭難を起こしかけたことでしょう。尾崎さんと私が遭難現場まで懸垂下降をしている間に、最初から遭難救助に加わっておられた別のパーティの方が一名、突風にあおられて、バランスを崩し、同じ岩場を落ちてしまいました。幸いなことに、岩場の傾斜がきつく、直接下の雪に落ちたので、まったくけががありませんでした。落差は10m以上ありましたので、もし、あの時点で、もう一名、動けない状態になった場合は、救助は明るいうちには終了せず、かなり厳しい状況になったと思われます。

その場の救助活動は、混成部隊ですので、それぞれの力量の範囲で、できることを行うことになるのですが、安全確保を確実に行って、絶対に二重遭難は起こさないという確認が不足していました。浮き足だっていたといわれても仕方がない状況です。その場所は、何でもないゆるい斜面ですが、下の岩場と強風を考えて、セルフビレイをきちんととるとというのが後から考えた最良解ですが、そこまで考えて指示をすることはできませんでした。

そのあとの救助活動も、あれでよかったのかという反省点はいくつかあります。私自身の問題としては、十分に確認や意思疎通をしないで、動きを始めてしまう欠点があるのは自覚しているのですが、今回もその面が出てしまいました。

結果的には最短時間に近い形で、収容できました。自分で言う話ではありませんが、私たちのような登攀装備を持ったパーティがああ場所をああ時間に居合わせたこと自体が非常に幸運だっ

たと言えらると思ひます。

=====

●遭難救助 (山野)

松本さん、尾崎さん遭難救助ご苦労さんでした。那須の風については強風でたびたび滑落が起きていることは知っていましたが、実際に突風になると耐風姿勢をとつてもあおられることがたびたびでした。後で聞いたら那須の風は一度吹き出すと 24 時間続くとのことで、そのうち弱まるかもしれないと朝日岳東南稜に取りつこうとしたのは甘かったかも。引き返したのは賢明だったと思ひます。

遭難されたのは早稲田大学 WV 部 OB の 64 歳のかたで緑山岳会にも所属されていたベテランのかたのようでした。3 名で朝日岳東南稜を目指しておられました。1600m 付近の一般道のところで、突風にあおられ雪原を滑り出し、ピッケルストップをしたが止まれず、ピッケルも飛ばされたそうです。雪原の傾斜はそれほどではなかったのですが、すぐ下が約 10m の崖になっていてそこを落ちて下の雪で止まっていた。早稲田 WV 部 OB の 3 人パーティの残りの 2 人はザイルももっておられ、落ちた人と声で話を交わして意識がはっきりされていることを確認されてました。我々 3 人と、他に北稜山学会の 4 人パーティ (うち 2 人は女性) が手助けしました。簡単に役割分担をきめました。

まず携帯電話で警察に連絡し、救助を依頼しました。携帯電話は便利ですね。救助の段階でパーティアが 3 つに別れましたが、お互いの連絡が良くとれなかったのですが、あの場所ではもっと携帯電話を活用すべきだったかもしれません。ただ低温で電池の性能が落ちていたのが気になりあまりつかいませんでした。予備の電源も必要かも。

遭難の崖の上の木にザイルを固定して、尾崎さん、松本さんの順で崖の下に下りて遭難者の所に行きました。痛がっていましたが意識ははっきりしてました。その間北稜山岳会の方が崖の端から下の遭難者を見ていて風にあおられ 10m の崖を落ちましたが幸い怪我もなく、救助に加わりました。二重遭難になるところでした。ピッケルを使つてのセルフビレーをすべきところでした。

遭難者の肩を支えながら約 10m 歩き、風の少ない平らな場所に移動し、遭難者をザックやツェルトでくるんで暖かくしました。その時に山野も遭難者の所に下りて行きました。その後、松本さん、尾崎さんが下の方からまわつて上の道にでて、救助隊との連絡をとったり一緒に戻ってきました。

山野は北稜山岳会の人と遭難者の所に残つて励ましました。胸が痛いと思ひましたが途中

から煙草を吸わせると気がまぎれて少し元気になりました。そのうち松本さんが早稲田 WV 部 OB の仲間を連れてきたので、遭難者は非常に安心したようです。

救助隊は地元那須山岳会の遭難対策隊のメンバーと警察消防の人で 10 人位きました。スノーボードに乗せて崖の下の元林道の所を下しましたが、斜面のトラバーをスノーボードを支えながらは結構大変でした。山野はすぐ息が上がって脱落しましたが。何とか明るいうちに大丸温泉までおろして救急車で那須塩原市内の病院に運ばれて行きました。

我々 3 人は峠の茶屋付近あずま屋の中にテントを張って止まっていたので、荷物を回収して下りました。大丸温泉のおおたか旅館のご主人が那須山学会の会長で、遭難救助の拠点になっていました。地元の情報も事前によく調べる必要があると思います。朝日岳東南稜は岩も脆いので登山禁止したいくらいだと話されていました。今回は我々も風にあおられる可能性もあり気をつけていかなければと改めて思いました。山野はビーコンも持っていませんでした。

松本さん、尾崎さんは何度も現場を往復したり、ご苦労さんでした。

=====

●遭難救助について (島田)

山野さん、松本さん、尾崎先輩、本当にお疲れ様でした。早い時点でのご報告をいただきありがとうございます。読んでいて現場の様子が思い浮かびます。

強風の冬山での体力消耗を考えると、短時間で収容できたことは良かったのでしょうか(参考として良かった面についても知りたいです)。セルフビレイをせず二重遭難になりかけたこと、混成部隊で十分な意思疎通を基に救助にあたるのが難しかったことが分かりました。

=====

●那須の強風 (青谷)

高校時代に、那須の強風には苦労したことを思い出します。都内でも風があり、どうかなと思っていましたが、やはり甘くなかったですね。救助活動および詳細のご報告、ご苦労様でした。

=====

●追記 (尾崎)

当時の行動概要をエクセルにまとめました。

<天候について>

当日は未明よりすごく風が強く、東南稜へ向けて登る最中よりバランスを崩しそうになることも多いくらいで、引き返してきたのは正しかったと思う。

風の吹き方が一定でなく、ほとんど強風が吹き続けていたが、瞬間的にきわめて強い突風が吹き、そのとき体が何度も持っていかれそうになった。しかし止んだかと思うときもあるくらい。

年末の聖東尾根のように、一定方向の強風が吹き続けるなら、それに身を任せることも出来るが、不規則なため瞬間的にあおられた。山野さん、松本さんが指摘しているように、見た目安定しているところでも、セルフビレイは非常に重要でした。

<よかったこと>

- ・滑落第一報を聞いたとき、居合わせた者が全員一度集まり、方針を確認した。
- ・単独行動しなかった。
- ・伝令役、待機役、滑落現場救助役に分かれる形で、ある程度チームワークができた。
- ・待機場所 2 では穴を掘ってツェルトをかぶることで、1 時間半くらい強風の元でも、ほとんど寒くなかった。

<岩場を懸垂下降で降りて>

灌木に 50m ロープ末端を直接エイトノット+1 回転（ハーネスにメインロープを結ぶのと同じ方法）で結びつけ、結び目が締まって回収不能にならないように、エイトノット内にカラビナを掛けておいてもらった。ロープシングルで懸垂下降で降りた。

救助者が 1 名だけだと、何も出来なかった。励まして、上からツェルト掛けて保温するくらい。あそこまで痛がる事故者に、どうしてあげればよいのかわからず、付き添うことしかできなかった。頭で分かっていることも本当にそれでよいのか躊躇してしまう。その後、松本さん、北稜・人見氏、山野さんの順で来たので何とかできた。このとき、尾崎は人見氏が落ちたものとは全く知らなかった。

<岩場の登り返し>

松本さん、山野さん、北稜山岳会人見氏、尾崎で事故者の応急的な保温、ツェルト保護をしたあと、松本さんと尾崎は登山道に登り返して、待機組に現状を伝えるため、少し巻いて別の岩場を登り返そうとしたが、そもそも技術が無いだけかもしれないが、気持ちが落ち着かず登れそうな岩場も全く登れなかった。

正直言って、ショックだった。これじゃ東南稜なんて好天でも登れないんじゃないかと。しかし、二重遭難できない気持ち、時間的な焦りの気持ち、など、別パーティの事故とはいえ、事故に関わっている以上、気持ちの動転があった。

中間支点を取ることも頭に無かったので、やはり冷静さを失っていました。緊急時はそんなも

のかもしれない。だから登れなかったのかもしれないとも思う。

当たり前かもしれないが、救助方法やルートなどはもっとも容易で安全な方法を選ぶ必要があること。しかし現場で、何がベストな方法か判断するのは本当に難しいです。

<登山道に登り返して待機場所 2 での待機について>

早稲田 OB の山本氏・栗原氏、北稜山岳会の加藤氏と合流し、松本さんと山本氏は再び事故者のもとへ行った。栗原氏、加藤氏、尾崎の 3 人は、救助隊がこちらに来た場合、ここから下ってもらうように伝えるため待機した。

雪面を L 字状に掘ってツェルトをかぶったので、寒さほとんど感じなかった。よく言われていることではあるが、ツェルトの有効性を実感した。

このとき、だれもスコップを持っていなかった。尾崎はスコップを家に忘れてきた。ピッケルのブレードで掘ることは出来た。自分のツェルトは救助に提供済みだったので、役割の分配前に必要なものを互いに確認しあうことが必要だと思った。たまたま、一緒に待機に入った北稜山岳会の加藤氏が持っていたから良かったが、松本さんたちと別れる前に確認すべきだった。事故者一人でも、事故者の保温でツェルト 2 個くらい、伝令役がツェルト 1 個、待機役で 1 個などと考えると、ツェルトは個人装備くらいの数があってもよいか？それでは過剰装備？

いずれにしても、朝の出発時、今日はアタックだから何が必要何が不要と決まりきって荷造りするのではなく、今日は風が強いからとか、その状況に応じた荷物の判断は必要となると思う。

また、別行動に分かれる際は、分かれる理由が有るからなので、それは全員確認する。しかし、分かれた後どう意思疎通をするか、どう再合流するかを確認するのを忘れがちになった。これは必ず確認・合意しておくことが必要。

ツェルト内で待機中、早稲田・栗原氏より互いの連絡先の確認を求められ、西朋は尾崎が対応した。

<無線機を持っていた>

しかし、免許をもたないこと、それ以上に使い方を熟知していなかったので、スムーズにいかず、結局使わなかった。携帯電話が通じたから今回は良かったが、やはり無線機をちゃんと使えるようにしておきたい。

<セルフレスキュー、シート搬送について>

事故者は意識ははっきりして、話も出来たが、呼吸、脈拍などチェックすべきだったかもし

れない。保温や底面の厚さは大丈夫だったかとか、事故者のひざ下にもクッションになるものを入れてあげるべきだったとか、梱包方法の問題もある。後からいろいろ反省がある。搬送時は、搬送者がピッケルを持っているとシートとの位置関係によっては事故者を刺してしまいそうになり、危険を感じた。アイゼンも同様で、これは前後の位置関係にある搬送者相互で足を踏んでしまいそうになり、バランスを崩した。搬送速度はゆっくりでないという危険が高まると思った。

なお今回は、土曜日にビーコン練習もしました。結局、セルフレスキュー実践訓練山行になってしまいました。良い経験だったかも知れませんが、自分も何度も風に体をもっていかけたので、とても他人事でなく、考えさせられました。自分たちの事故ではないとはいえ、やはり、緊急連絡先の島田君に電話した時は、やはり皆さんのバックアップがあるんだと、心強かったです。

推定時刻	山野	松本	尾崎	北稜人見氏	北稜加藤氏	早稲田栗原氏	早稲田山本氏	北稜女性2名	救助隊7名
11時過ぎ	全員集まり役割分担, 一人行動はしないこと確認								携帯で119番
	救助へ	救助へ	救助へ	突風で崖から落ちるが無事	登山道待機1	登山道待機1	崖上待機	大丸温泉へ下山, 救助要請	
	滑落者介助	滑落者介助	滑落者介助	滑落者介助	↓	↓	登山道待機1	↓	
	↓	岩場巻いて登山道へ戻る	岩場巻いて登山道へ戻る	↓	↓	↓	↓	↓	
	↓	状況確認	状況確認	↓	状況確認	状況確認	状況確認	↓	
	↓	登返し・山道合流地点に戻る	登返し・山道合流地点に戻る	↓	登返し・山道合流地点に戻る	登返し・山道合流地点に戻る	登返し・山道合流地点に戻る	↓	
13時～14時半	↓	事故者の所へ	登山道待機2	↓	登山道待機2	登山道待機2	事故者の所へ	↓	
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	先発隊到着
15時前後	↓	登山道待機2へ	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
15時半	↓	事故者の所へ	事故者の所へ	↓	事故者の所へ	事故者の所へ		↓	後発隊到着
	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	事故者搬送	↓	事故者搬送
	幕営装備回収	幕営装備回収	幕営装備回収	↓	↓	↓	↓	↓	↓
17時～17時半	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉	大丸温泉

=====

●お疲れ様でした (上野)

那須の事故では大変お疲れ様でした。悪天で目的が果たせなかったのは残念ですが、事故の対処や支援等にご足労されたこと、多大なる敬意を表します。怪我人に対しての的確な処置の甲斐あって回復もかなり違ってきているのでしょう。また、上記振り返りで反省されてますが、救助者のみなさん十分連携して対処されていたように感じます。(あくまで文面から推察される感じのみですが) 西朋としても外部アピールにもなったのではと思います。怪我された方が所属する山岳会よりいろいろ連絡等があるようですが、宜しく申し上げます。

=====

●お互い無事で良かったです (高橋)

山野先輩、松本先輩、尾崎君、本当におつかれさまでした。西朋も遭難された方も無事で良かったです。臨場感あふれる文章で、読んでいて引込まれてしまいました。こういう特殊な状況の経験はとてもプラスになると思います。私も山へ復帰したいのですが、もう少し、会社を安定させてからですね。

0852 安倍奥：神通坊～七面山

【期日】2009. 2. 10(火) 【参加者】橋本

登山口の羽衣の気温 1℃。登山口 7:38 出発、肝心坊 8:07 着。標高 1400m 位の 34 丁目でアイゼン着用。敬慎院 9:55、ここまで登山口からの標高差は 1200m、急登の連続である。ここからシラビソの林の中を標高差約 200m で山頂である。10:46 着。途中 2 回ほど 2 頭のシカ。七面山山頂 (1982m) の積雪約 50cm。すぐに下山開始、途中の大崩れの場所は今日もカラカラと音をたてて落石があり、崩落が続いている。14 丁目付近で、盛んにスギの枝を嘴でたたいている赤褐色の野鳥。敬慎院 11:14、登山口 12:20 帰着。登り 3 ピッチ、降り 1 ピッチ、所要 4 時間 46 分。(西朋掲示板 No. 2897)

0853 奥秩父：鴨沢～雲取山

【期日】2009. 2. 16(月) 【参加者】橋本

昨秋に登る予定であった。鴨沢の上の所畑 P7:05 出発。この付近はリスが多い。野鳥も多数。比較的暖かいせいか。堂所 8:03 着、風が出てきた。8:57 七つ石山分岐、ブナダワ 9:07 着、更に風が強まる。日影になった場所ではルートが凍結しているがアイゼン不要。時にバランスを崩すくらいの強風が吹き荒れる。10:17 雲取山着 (2017m)、写真を撮りすぐ下山開始。山頂付近は 30cm 内外の積雪。山頂からは南アのほぼ全山が見える。ブナダワ 11:10、所畑 P12:36 帰着。登り 3 ピッチ、降り 1 ピッチ、所要 5 時間 31 分。(西朋掲示板 No. 2897)

0854 八ヶ岳:西岳～権現岳～編笠山

【期日】2009. 3.7(土)～8(日) 【参加者】尾崎, 中山, 他 1

3/6～7 富士見駅=憩の森別荘地 6:45～～13:15 西岳 13:50～～16:30 青年小屋

尾崎さん(47 期)、都岳連指導員の杉坂さんと共にムーンライト信州で富士見へ向かう。席が離れていたため、下車後に改札口で顔合わせ。

西岳への登山口からしばらく登ったときの印象は「雪が少ない」。頂上付近も果たして…という感じであった。序盤は別荘地帯から始まり、緩斜面をひたすら進む。のんびりムードである。やがて斜度、積雪ともに雪山らしくなってくる。自分にとって冬山は 3 回目だったが、体が沈むような雪質はこの時初めて経験し、噂に聞いていたラッセルのつらさを徐々に味わうことになる。

登りの後半はわかんを履き、まずまずのペースで西岳に登頂。山頂には他のパーティも来ていた。雲ひとつない快晴で、見晴らしもなかなか雄大であった。

青年小屋に向けて下っていくが、途中で木に結ばれている赤い目印を見失い、しまいには冬山ながら藪こぎ状態に突入する。若干面喰って到着し幕営。話が弾んで就寝は 21 時すぎだったか。

3/8 発 6:00～8:10 岩稜手前～10:15 権現岳～12:10 青年小屋 13:00～編笠山 13:56～16:05 観音平～17:25 八ヶ岳横断道路ゲート

2 日目は権現岳へアタックする。前半はわかんを履き、雪が固くなってきたところでアイゼンへ履き替える。爪が刺さっていると分かってはいても、初心者には硬い雪面を歩く不安感が大きい。体中に力が入ってしまい、進まない割に体力、気力両面で疲労がたまっていった。足が止まるたび、引き返して楽になりたいという気持ちが一瞬現れては消える。雪壁の登高、氷化した雪岩ミックス壁のトラバースなど、無事に(自分にとっての)難所を越え、権現岳に到達。途中がどんなにつらくても、登り切ってしまうとあっという間に忘れてしまうものだ。小屋に戻る頃にはアイゼンにもだいぶ慣れていた。

網笠山は登っても巻いても時間的には変わらないのではないかと、ということで、登ることを選択した。ここにはトレースがあったものの一部で軽いラッセル状態で、疲労して遅れ気味となり黙々と登る。山頂の眺めは本山行で一番のものであった。全体を通して好天に恵まれた山行であったが、ここでは直前に登った権現岳はもちろんのこと、北ア、南ア、富士山等を見渡すことができた。

下りの序盤はなかなか急勾配であったが、幸い凍結はなかった。最後は冬季閉鎖の林道を歩い

て観音平口へ下山。好天の中さまざまな状況を経験し、眺望も文句なく、さらに目標のルートを達成できたことで、(少なくとも自分のような初心者にとって)非常に充実の高い山行であった。行動中に権現岳引き返し、網笠山トラバースの話も出た中で登りきったことに大きな達成感を感じます。

(中山)



青年小屋へのヤブラッセルの途中から権現岳



苦勞して登った頂上は味わい深い(中山・尾崎)

0855 鬼首/ST: 須金岳・大鐮山

【期日】2009. 3.7(土)~8(日) 【参加者】岡田, 他 1

同行者は以下のホームページを開催している友人で、タイトルは昔のままですが既に三百名山を終えています。

<http://www.asahi-net.or.jp/~MV2S-KTHR/>

須金岳(最高点 1120m)と大鐮山(1253m)へ登頂。過去の岳人などに山スキー紹介記事があるところ。須金岳は強風で山頂まで行けないかと思ったが、何とか頂上(最高点)に到達。夏道は最高点を巻いてしまう。虎毛山の丸いピークが望め、東面が急斜面で落ち込んでいる様子もよくわかる。大鐮山は全く道がない秘峰、日曜日は天候穏やかで、神室連峰が真っ白に望めた。神室・鬼首周辺は意外に山が多く、何度足を運んでも楽しめます。

0856 天子山塊：朝霧高原～毛無山

【期日】2009. 3. 10(火) 【参加者】橋本

3 月に入り天気の変化が早くなり、降るべきところに雪が降っていると何となくホッとする。雪が多い山に単独で登るのは大変だが・・・。

比較的暖いが、昨夜降った雨が今朝にかけて山では雪に変わっており、天子の山々は上部が白い。登山口の麓は朝7時で4℃、雨は止んだ。麓出発7:18、やや風あり。不動の滝は落葉樹の間から全景が見える。1合目～9合目までの道標は標高差が100mごとに付けられているようだ。5合目の標高1500m位から昨夜来の雪がルートに見え始め、6合目からアイゼン着用。昨夜の雪はルートを覆い、地形を頼りにルートを探しながらラッセルに入った。30-50cmの積雪だが、急登の場所では目の前が雪の壁である。あえぎながら標高差約400mをクリアせねばならない。風が強くなってきた。立ち往生もしばしば。10:00稜線に飛び出す。なおも強風が吹き荒れているが天気が好転し、快晴に近い。10:00毛無山着(1946m)。間近に見る富士山は圧倒的。担いできた重たい645カメラで写真をとり、軽食をとってすぐに下山開始。今回は厳しいラッセルを強要され、消耗した。麓帰着11:48。登り2ピッチ、降り1ピッチ、所要4時間30分。(西朋掲示板No.2916)

0858 堂津山塊：堂津岳～奉納山

【期日】2009. 3. 21(土)～22(日) 【参加者】上野, 尾崎

3/21 奉納温泉奥 7:30-8:15 林道終点-9:30 R-10:55 1440m 11:20-12:25 R-13:40 堂津岳

松本で安く借りたレンタカーで奉納温泉先の林道除雪終点まで入って歩き始める。1時間ほど歩いて林道終点となり土谷川を渡った対岸の尾根（堂津山西尾根）を取り付く。今年は寡雪と言うが尾根末端から雪面で登りやすい尾根。明瞭な尾根上を藪漕ぎもなく4Pで堂津山頂上。途中何箇所か急斜面のキックステップの登りがあった。快晴のもと、高妻乙妻、戸隠～北アルプス～雨飾～妙高と360度の大展望。14時過ぎに堂津山頂上で幕。

3/22 発 6:00-8:25 奉納山-9:50 土谷川-10:55 林道終点-11:45 奉納温泉奥

翌日は奉納山経由の周回コースで土谷川に降りた。7時すぎに雨が降り出し、ずぶ濡れになって車デポ地に12時前に到着。天気雨で気温が高い。このあたりの尾根筋はもう少し雪があって気温低ければ、サクサク歩ける尾根で縦横無尽にルートがとれると思う。山スキーでもいい場所と思われ、特に堂津山から奥西山への稜線沿いはもう少し雪があってクラストしていれば傾斜も適度で格好のコースだろう。山野さん連絡先ありがとうございました。（上野）



雨飾山の展望台



高妻山が間近に迫る



奉納山へ下る(奥は大渚山)

0859 奥秩父：瑞牆山荘～金峰山

【期日】 2009. 3. 23(月) 【参加者】 橋本

快晴、朝気温-1℃、強風で付近一帯のカラマツ林がゴーゴーと騒いでいる。ミズカキ山荘P登山口 7:07 出発。7:37 富士見平着。風は依然として強い。大日小屋までの飯森山南斜面の樹林帯に入り風は弱まったが、凍結融解を繰り返した氷がツルツルでルート上を覆っている。標高 2000m 地点でアイゼン着用。大日小屋付近にあるアズマシャクナゲの大群落はまだ全て葉を下げて冬眠中。大日小屋 8:21 着。ここから急登となるが、ルート上の氷雪はやや柔らかくなり、歩きやすい。但し、大日岩付近では岸壁に氷が張り付き、これを登るのは危険、巻き道を探してクリアーする。巻き道も林床は厚い氷で覆われている。小川山との分岐点 8:53 着。暫くはゆるい登りが続いた後に急登が始まるが、この辺りからトレールは薄くなり、50-70cm のラッセルもしばしば。2317m ピークの砂払いの頭 9:39 着 (2595m)。昨日の風雪で南ア甲斐駒ヶ岳、白鳳 3 山などすばらしい光景である。

2497m ピークの千代の吹き上げ付近の北斜面は完全にルートが消え、この大斜面をトラバース気味に硬くクラストした雪面をキックステップをしながら乗り切る。ピッケルを持っておらず、転倒したらおそらく数百メートルは滑落するだろう・・・などと考えながら。しかし、大変運が良く、丁度この時間帯に突然風がピタリと微風にかわり、急に暖かくなった。金峰山 10:27 着。山頂は道標が少し見えるだけの積雪であり、シンと静まりかえっている。南ア、富士山、中央ア、八ヶ岳連峰が美しい。軽食と写真を撮り、すぐに下山開始。砂払いの頭 10:57、小川山への分岐 11:21、大日小屋 11:38、富士見平 12:09 着。大日小屋と富士見平の中間点でアイゼンを外して歩き始めた直後に、地表下で融解した水がある場所で足を滑らして転倒し、両手と腰を激しく打った。手と腰に激痛が残る。登山口帰着 12:30。登り 3 ピッチ 3 時間 20 分、降り 1 ピッチ 2 時間 03 分、所要計 5 時間 23 分。

0860 知床/ST: 遠音別岳・海別岳・藻琴山

【期日】2009. 3. 28(土)~30(月) 【参加者】岡田, 他 1

事前購入の安い航空券+レンタカーで友人と行きました。知床の登山道のないピーク 2 つを指すも、あいにく寒気が入って天候が悪く、2 ピークとも登頂は断念という結果。秘境という感じですが、北海道の山スキーヤーは時々入山しているようです。

3/28 遠音別岳(1330m)。一日じゅう雪、視界数 100 メートル、風は弱い。ウトロ側の林道除雪なく、ほぼ海拔 0m からスタート。傾斜緩くなかなか高度がかせげない。730m で針葉樹が突然なくなり森林限界、傾斜が急になり 950m 付近まで進んで、余裕のあるうちに引き返す。上部はアイスバーンや雪下のハイマツに引っかかって快適な滑りはできず。樹林帯に入ると、新雪パウダーのすべりを堪能できました。

3/29 海別岳(1419m)。曇り時々雪、昨日より風が強い。他に 2 パーティ(2 名+単独)入山有り。昨日より行程短いので、天気悪くても頂上まで行けると思っていた。頂上目前のニセピーク(1390m)まで他パーティに追従する形で到達。視界ほとんど無くこの先は痩せていて雪庇も発達している様子で行動不能、他パーティーも含めここまでとなった。

3/30 藻琴山(1000m)。曇り一時晴れ間、風弱い。登り尾根コース、下り沢コースでは初心者向けの短いコース。問題になる場所は無く、頂上より屈斜路湖と摩周岳など周辺の眺めを楽しんだ。斜里岳、知床の山は相変わらず雲の中。

2006 年度追録

御坂山塊：天下茶屋～黒岳

【期日】2007. 3. 4 (日) 【参加者】橋本

今年は暖冬ですが、3、4月は他事多く、山行がやや少なくなりました。

天下茶屋 7:30 出発。春霞の中に秀麗な富士山、手前に河口湖。ミズナラの落葉の急坂を登ると御坂山着 08:10、雪はない。御坂山をすぎると、前方に巨大なブナの古木あり。北斜面に残雪。旧御坂峠 8:30 着。峠にある大きなツツジの葉が展開開始。多数のヒガラ（？、白黒の小型野鳥）が近くで大合唱。幾つかの小ピークをアップダウンし、黒岳の手前の最後の登りでアイゼン着用。山頂（1793m）9:17 着。少し進み展望台へ。富士山、南アが美しい。天下茶屋 10:54 帰着。所要 3hr24m。（西朋掲示板 No. 2379）

2006 年度追録

道志山塊：山伏峠～御正体山

【期日】2007. 3. 23 (金) 【参加者】橋本

山伏峠は-1℃。トンネルを通過して東口登山口から入る 7:03。石割山への3差路着 7:39。風がなく、すぐに暖かくなる。ノッペリした急坂で幾分歩きにくい。7:46 奥の岳着、高圧電線鉄塔（7:50 着）付近からの富士山、南ア、鹿留山などの見晴らしがすばらしい。1400m 位のピークをアップダウンして 8:13 中ノ岳着。やや広い山頂だが、ミズナラなどで見晴らしはない。前ノ岳は中ノ岳から降りにかかるころから見える、前方に覆いかぶさる山だ。8:38 前ノ岳着。ここから登りがきつくなるが、ツガ、モミ、ミズナラ、ブナなどの樹林帯が美しく、広い馬の背状の尾根を過ぎると御正体山山頂である（1682m）。9:06 着。山頂はシンと静まり返り、暖かい。すぐに下山開始。野鳥が多い。シカの鳴き声も至近で聞く。山伏峠帰着 10:45。所要 3hr42m。（西朋掲示板 No. 2379）

西高ワンダーフォーゲル部の記録

【2007 年度】

山行名	期日	行先	参加者
新入生歓迎山行	5/12	奥多摩：生藤山	角館，保延，姫野，枝澤，菱山，小串，中谷
6 月山行	6/9-10	大菩薩嶺	保延，枝澤，菱山，小串，中谷
7 月山行	7/7-8	八ヶ岳：権現岳	枝澤，菱山，小串，高橋，中谷
夏山合宿	8/18-21	北アルプス：白馬岳	枝澤，菱山，小串，高橋，中谷
秋山山行	12/26	奥武蔵：笹山	枝澤，菱山，小串，高橋，中谷
春山山行	3/31	丹沢：高柄山	枝澤，菱山，小串，高橋，田代，中谷

【2008 年度】

山行名	期日	行先	概要
公式山行			
新入生歓迎山行	5/10	奥多摩：棒ノ折山	朝からの雨でコースはぬかるみ山頂で展望はなかった。
6 月山行	6/14-15	大菩薩嶺	快晴の稜線は非常に爽快。晴れてよかった。
7 月山行	7/5-6	八ヶ岳：天狗岳	夏沢峠でカモシカに遭遇。大きかった。
夏山合宿	8/9-13	北アルプス：槍ヶ岳	稜線上ではずっと晴れ，南岳からは穂高の迫力と大キレットがよく見えた。
冬山山行	12/20	奥多摩：日ノ出山	勾配の緩い長い尾根歩き。山頂も快適。
春山山行	3/20	秩父：日向山	蕨山の予定が雨で二転三転，結局舗装路歩きに…
個人山行			
	5/24	丹沢：高柄山	参加者：高橋，田代
	7/23-24	奥秩父：瑞牆山	参加者：高橋，田代
	11/23	御坂：三つ峠	参加者：高橋

その他，平日のトレーニング，山行準備・記録活動，記念祭準備，新入生勧誘活動などを行っています。

西朋登高会 会則

1986年9月1日制定

2001年4月23日改定

第1章 名称・目的

第1条 本会は「西朋登高会」と称する。

第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実践すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。

第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

第2章 組織・会員

第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。

第5条 本会は次の役員をおく。

1. 会長.....会を代表し、事務局をおく。
2. チーフリーダー.....山行全体を掌握する。
3. 学生リーダー.....学生を中心とした山行を掌握する。
4. 会計.....財政を管理する。
5. 装備.....共同装備を管理する。
6. 記録.....山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
7. 西高係.....西高ワンダーフォーゲル部を指導する。
8. ホームページ係.....西朋登高会ホームページを管理する。
9. 超OB係.....現役を引退したベテラン会員対象の山行を企画実施する。

第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。

第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。

第8条 総会では、次のことを議事とする。

1. 前年度活動報告
2. 前年度会計報告
3. 新年度役員選出
4. 新年度活動計画
5. 新年度予算案
6. 新会員承認
7. 会の運営に必要な事項

第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。

第 10 条 例会では、次のことを議事とする。

1. 山行報告
2. 山行計画
3. 会の運営に必要な事項

第 11 条 本会は年 1 回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。

第 12 条 本会には次の会員を置く。

1. 特別会員...西高ワンダーフォーゲル部の顧問を務め、本会に大いに言献した先生。
2. 一般会員（現役会員）...会の活動に関心を持ち、合宿山行や総会、例会及び西朋祭などに参加する会員。
(会報、西朋通信などを事務局より送付する)
3. OB 会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加でき得る会員。
(総会などの連絡・会報・西朋通信のみ事務局より送付する)
4. 超OB 会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加できる会員。
(総会などの連絡・会報・西朋通信等、連絡不要の会員)

第 13 条 前条のOB 会員及び超OB 会員について、次の場合一般会員（現役会員）より移行する。

1. 本人の希望による。
2. 5 年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB 会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

第 3 章 会費・会計

第 14 条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。

1. 一般会員（現役会員） : 年額 4000 円
2. OB 会員 : 年額 1000 円（数年分前納できる）
3. 特別会員・超OB 会員 : 会費なし

第 15 条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。

第 16 条 会計年度は、4 月から翌年 3 月までとする。

第 17 条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。

第 18 条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。

第 19 条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立

金および寄付金をあて、遭難対策基金とする。

第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実践できるよう、部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダーフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

第7章 遭難対策

第 30 条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第 31 条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第 32 条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第 33 条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設置し、会長は必要な係を任命する。

第 34 条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第 35 条 会の遭難救助基金は、当座必要な費用の立替に使う。

第 8 章 会則の修正・改正

第 36 条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

第 9 章 施行

第 37 条 この会則は、2002 年度の総会后より施行する。

西朋 30 編集後記

2009 年夏の前半、天候は不順だった。2009 年秋、今冬は暖冬の予測だ。下界生活では、私は霜柱がピキピキと音を立てて生えてくるような冬が好きだ。山も、四季がしっかりしているほうが、楽しめる。やはり、自然が何かおかしくなっているのかと、山をやっていると敏感になる。

山に行くことは、時間のやりくりとか、もっと休んでいたいとか、不安だとかもあるけれど、なにより事前と現地で頭を使う。自分の数少ない経験と事前調査で得た情報から、最大限の予測を引き出し、さまざまな可能性を探る。そして下山後は、傷んだ装備のメンテナンスにも気を遣う。なかなか大変なことでもあるわけだが、行けばその大きさにのまれてしまう。豪雪地に生える強靱な藪のように、強く柔軟な人間になりたいものだ。

息長く、真摯な姿勢で、山に取り組んで行きたいと思う。そして、山へ向けて家を出るときは、日常生活のありがたみも感じるこの頃だ。山行を理解してくれる家族、山行の良きパートナーである皆さんに深く感謝するとともに、こうした活動の継承者を大切にしてゆきたいと思う。

2009 年 10 月 25 日未明 47 期 尾崎 宏和

西朋登高会ホームページ <http://www.seihou.cside.com>

本会報に掲載・非掲載のカラー写真、「西朋」、「彷徨」のバックナンバーを閲覧できます。会員専用ページから掲示板・アルバム編集ページ・備品リスト・Web 名簿などが利用できます。

西朋 30 (第 2 版)

2009 年 11 月 初版発行

2010 年 1 月 第 2 版発行

発行者 西朋登高会 (会長 松本 哲郎)

発行所 横浜市青葉区すすき野 2-5-10-402
松本 哲郎 付 西朋登高会

編集者 尾崎 宏和

印刷所 石川特殊特急製本(株)

西

朋

30

西

朋

登

高

会

2009